

門前なる經紀人の家より立よりて今轎子にうち駕て寶珠院へ參詣したるの何處の人ぞ知せや。と外々しく問ひしかばその屋主答るやう他の八九村に隠れもなき補姑摩姫をのにて候也。姫の幼かりし時より寺内に同宿し給ひしに八九村へ移徙ありても折々參詣し給へばそれが伴當さへ面善なり。這頭で知らぬものなしと正可よいひしと聞へたり。恚れば疑ふべからせとて豫老師の教に儘してそがかへさを等程よ日の山間に傾きたる晡時の比及に姑摩姫の初のごとく轎子にうち駕りて寺より出て來にければ定められたる隊配にて荷二郎の轎子へ那秘符を多く投掛け我等の伴當を趕威し走らして加持せられたる麻索もて儀のごとくに轎子を重騰して昇し來ぬるよ途にて彌猴に變せし歟。そをいかにして知り候はん憶ふに是も那妙の幻術にこそ候ゆめと迭代にいひ釋くを持永のなほ怒り乘して毫も聽き罵責れば豪袁小雲時と推寛解て郎君けふの崑齡ひの道人々の愆ならせこの老衲が初より漫ふ敵を侮りて用心疎畧なりしによれり那幻術にの頭毛を一條拔取り氣と吹かけて物の形體に做すとあり。姑摩姫もその術を得て恁衆人を愚にせし也。這變體を禁る法と始よりして行い輒く虜にすべかりしとこの拙僧が脱落也。時の聊おくれたれども剛才破形の秘印を結びて口に呪文を念せし

かバ彌猴の忽地薨れたり。是にて思ひ合はるべし又拙僧の何事も前より知る奇特ありながら這轎子の内あるの姑摩姫あらぬを悟らすして戸を開せしに相應しからせと挾とる者もあるべし歟。歟。歟。莫人の用心の危きに賢くて安きに愚なるとあり。又物を視るとも遠きにのよく心を盡しに。近きに疎なるとあり。拙僧も亦恁也。嚮に人々がかへり來て首尾よき注進を聞しより今更危む所なければ敢その近きを查せず。且この處へ聚合しも遅かりければ只名香の薰り十分なるを見て却云云といひしのみ。この是千慮の一失也。頭人達の越度にあらず必あ叱り給ひくと人を幫助て身の拙さをいひ瞞めつゝ勸解しかば持永やうやく怒を理めて屢嘆息したりけり。登時豪袁又いふやう那彌猴の姑摩姫の爪を切り毛を拔たる形代でさへ自宅を去ると七歩にして。こを巳の方。瘞めなれば巳と申の地杖六合也。後必姑摩姫を這里に來とる福ひわらん。一時の敗れは思ふよ足らず最後の捷こそ全勝なれなでふ今番に限らんやと慰られて持永の憶ずも苦笑ひして。しからば老師の教も儘して這畜生を埋めさせんやをれ媒鳥空之介其れ力士等に彌猴を持して庭へ出よといそがしてはや外面に出んとすれば泰勝媒鳥の阿と應つゝ。死したる麻斯吒を引起して。力士に遞與して共侶に主の後方に從へば豪袁も持永に俱して庭

にぞ出よける然程に荷二郎の嚮ふ泰勝煤鳥們と俱に姑摩姫の轎子を衛りてかへり來たれどもなを新參の事なるに身も亦賤しかりければ奥へ出入を許されど玄關の次の間に取遣され獨坐り夜のはや初更なるまでも物階へといふ者もなく泰勝煤鳥も出て來ねばやう屋くに訝りて肚裏も思ふやう嚮に奥にて人々の立談く聲の聞ゆし倘姑摩姫を走らせし歟然らずとも所以あるべし縱免許を得ずもわれ那里までいて見たりとも首を捕らるゝ過にのわらずを鷓鴣の腐れ見て來んと尋思をしつゝ身を起して不知案内なる間毎々々を偷に熟て歎迷ひもせせ其頭に答る者もなければ那轎子を昇居たる坐席に到りて四下を見るに這里にも人影のあらずして四隅に植たる燭臺の燒枯の莖長成て朦朧として薄闇く燭淚礙て氷氷に似たり道に重て眼を定めて又轎子の頭を見るに燈捨たる香の煙のなほ醜都と立升るそが傍に一個の婦人わり頭髻を離く掻亂して覆俯に臥たるが氣息絶果たるものに似たれば荷二郎いよく訝りてうちも置れそが右の手を援出して握試るになほ温にて動脈あり原來いまだ死ざりけり喚活ばやとて胸前にやをら腕を差容れて抱起しつゝ火光就て初てその顔を見るに是則別人あらざ日風こゝろに掛りたる長總にてありければこの什麼とばかり且驚り且歎

びて肚裏に思ふやういぬる比千劍破の宿所なる火計の奴等が遣もなく擲捕られきと聞ゆし折我妹子のいばにしけんと思ひさる日もなかりしかさも我身も獄舎に繋れて娑婆に疎かる折なれば人に問んぬさそがにて胸安からき過したる今宵料らず這處にて環會しん夢ならずや乍麼長総の何等の故も這陣館に在りけるや又是何等の事により髪も頭髻も掻亂して仆れて獨這里にありけん訝しきと限りもなきに問すの知るよしなきものゝ快喚活んと耳の邊に唇を差寄て喚んとしつゝ左右なく喚ばす這里まで聲をふり立なば人に知られて問ふべき事も得問ひで必疑ん要こそわれも尋思としつゝ左右の腋に手を當て修煉の活を入れしかば長總忽地阿と呻きて眼を開き息を吐きて撞抱さる荷二郎の肩も手を掛けつゝと見る目に送る秋の波なほ姑且の恍惚としていまだものをいひざりけり故あるかを長總の鼻たる彌猴に撞ひしられて膺推伏られし折憶さあばらを撲しかば呼吸僅く暢のみ我にも在で有けるを持永主僕も膝に紛れて見かへるものもなく死したる彌猴を埋んとて這里にのわらずなりしより既にはや時移りて剛才荷二郎が活を入れたる修煉に危窮を救れて心地清やかになるものから身の那香爐の頭に在りて憶すも隨喜破貞の香煙鼻に入りたるも稍久かる

をもて怒火狂可に發動して姑くも住らば心正しき女子でも破貞の害ある幽香の淫婦を酔せしむれば思もあるべき談ながら荷二郎の然る心もつらき既にして長総が卒倒本復したるを見て神境に堪え難きを惜めてやま喃我妹子荷二郎なるぞおん身いかなる幸ありて何の比より道里にやとる我が隆光を欺計て竟に目滅を奪らしたる密訴のよしを聞給ひし歎欲する所の初のごとくおん身と夫婦にならん興のみ別後の苦樂を聞まほしはやく報せや甚麼ぞと問ふに答ぬ長総の持れ掛りつ含笑で原來おん身の荷二なる歎願も二字の出来たれば四次と喚んも相應しからば非除五字でも千萬字にもうき盡されぬ塵塚の會話のあれはとて過たる事をもいそぐの要なしそれにも倍て緊要なる説話の這個の轎子の内と小雲時の假寐の枕快立給へと手を拿りつ弟と摘りて身と起せば荷二郎の噫惹し痛しくといひつゝも引れて俱にたつか弓春の心の動き初て焦木抗に附易き火の情慾の發陽氣驟る間を花の普賢象是れ極樂の轎子と引開て俱に入る月の雲に隠るゝ風情にて引戸を内より閉にけり浩處に篠持媒媒の兩三個の力士と俱に彌猴を吉方に埋果て又彼坐席より拾措たる姑摩姫の轎子を外面へ出させんとてうち連立て來る程に方鏡長総と荷二郎が轎子の内に潜び入りたるを晴快く

謂と見てければ喚聲に堪はず聲ふり立て人々やよ出會給へ淫奔兒を見出したりやよ快々と喚立る聲に驚木造泰勝持永も何事ぞとて走りて共に來にければ媒鳥の力士を後方に坐らして持永に稟すやう在下の那猿猴を行者の指揮に従ひて這力士們に埋めさせしに其事既に果たれば這轎子を外面へ擡出させんと思ひつゝふらび道里に來ぬる折大胆無敵の癖者あり是則別人ならず那木綿張の荷二郎が長總と手を掖あふて這轎子にて密會たる鼻息をのみ聞しにあらす姫がのしき光景を正可に認め候ひしかばうちも措れず泰勝等と俱に穿鑿せん興に喚立たるに候といふ持永うち听てその憎むべき奴等也我の千心万慮を盡して奪合せし姑摩姫の姑摩姫ならぬ山揉にて不思議の恥辱に及びたる主の憂ひを身の樂とに猶且處もあるべきを那轎子にて悄會るの彌猴にも劣りし人面獸心引擡出しぬ推並べて手新親刀を執とてし今更躊躇ふとかりと敦固暴く下知したる後方に來ぬる豪表の找みも寄せ在たり然ば媒鳥の本意に慥し烈しき下知に毫も礙議せず承りぬと應つゝ兩個の力士も共侶にはや轎子の頭よとみて戸を開んとせし程に動靜を窺ふ豪表が手に隱形の印を結びて口に呪文を念じたる那時速し這時遅し媒鳥の力士に左右を隔らせ走り蒐りつ轎子の引戸を撲地を開放せば

正は個と思ひたる。長総の見へずして。荷二郎一名内に在り。慌て滾出るを媒鳥の邊さず。力士等に肱肘捉らして動せせ。そが儘堂と推居けり。持永これを吃と見て。やをれ媒鳥向をか見たる。その轎子に。此奴のみ。長総の在ざり。汝が疎忽よあらせや。といひ入れて。媒鳥の慮々々。と展四下を見かへりて。嚮に。正可に甲乙二名情入たる。と認たりし。敵手の在らざる。ありたる。い躲せしにも。や候へん。扱か。扱了仕らんと。いふに。持永黙頭て。然。開奴を縛縛て。緊しく。拷問せよかし。と再度の下知。孫持媒鳥の嚮に。解捨たる。麻索の其頭に。ありしを。究竟と。拿抗つ。手繰よせて。索を掛んと。立寄るを。荷二郎騒がず。力士等に。拿かれし。腕と。振拂ひ。持永に。うち對ひて。や。郎君怒を。鎮めて。稟と。よしを。聞召れ。よ。小可然せる。功な。けれども。拷問せられん。罪もなし。など。て。や人の。讒を。坐に。信て。恚ま。で。冤枉を。負し。給ふ。を。や。といひ。せも。果を。持永の。眼を。睜らし。聲奇立て。黙れ。癖者。大胆也。汝。今。この。處に。長総。が。在らぬ。をも。て。云云。と。陳せ。れ。ども。然。バ。と。て。罪。な。か。らん。や。抑。汝。誰。が。許。容。を。得。て。我。便。室。近。く。進。み。入。たる。且。人。の。足。音。を。聞。て。轎。子。に。躲。れ。し。は。是。偷。兒。の。進。退。よ。て。不。良。の。心。顯。然。たり。然。でも。頼。陳。せ。る。や。と。罵。り。懲。せ。よ。な。は。性。ま。ぬ。荷。二。郎。の。冷。笑。ひ。て。開。ひ。又。御。身。の。邪。猜。也。よ。く。思。ふ。て。も。見。給。へ。か。し。那。姑。摩。羅。を。竊。する。と。て。遊。佐。よ。り。加。勢。に。央。

れて。日。中。一。日。骨。を。折。り。たる。果。の。初。更。よ。なる。ま。でも。夜。食。一。碗。賜。ら。せ。火。の。氣。も。あ。ら。ぬ。玄。關。の。次。の間。よ。安。置。れ。て。坐。凍。り。に。なる。が。堪。か。た。さ。急。酒。で。も。餓。ん。ど。て。來。る。と。も。覺。せ。此。頭。ま。で。漫。に。迷。ひ。來。た。れ。ども。絶。て。人。氣。の。な。か。り。しか。ば。那。轎。子。を。臥。算。に。して。明。な。ば。遊。佐。へ。還。ら。ん。と。思。ひ。し。も。の。を。甚。麼。ぞ。や。開。を。偷。兒。ぞ。と。疑。れ。あ。べ。れ。ん。身。も。亦。姑。摩。羅。を。竊。し。給。ひ。し。偷。兒。也。獨。小。可。の。み。なら。ん。や。と。い。へ。せ。も。果。ず。持。永。の。面。色。忽。地。火。の。ごと。く。身。を。戰。し。つ。聲。高。や。か。に。噫。舌。長。し。白。物。奴。が。息。の。音。住。ん。と。走。り。蒐。り。て。刀。を。拔。ん。と。柄。よ。手。を。掛。る。と。豪。衰。喚。禁。め。て。走。り。出。つ。身。を。盾。に。して。詞。徐。に。諫。る。や。う。大。か。た。な。ら。ぬ。お。ん。震。怒。の。理。り。に。似。た。れ。ども。微。賤。兒。を。敵。手。に。して。と。づ。か。ら。刀。を。汚。さん。と。欲。し。給。ふ。の。大。人。氣。なし。且。此。荷。二。郎。の。就。盛。主。よ。り。今。番。の。加。勢。よ。お。こ。せ。し。に。從。その。功。あ。ら。ず。と。も。一。旦。の。怒。に。乘。し。て。と。づ。か。ら。誅。し。給。ひ。な。ば。就。盛。主。の。恨。む。べ。く。又。姑。摩。羅。に。笑。れ。ん。この。義。を。思。ひ。給。へ。ず。や。と。寬。釋。る。と。の。理。り。なる。に。泰。勝。も。亦。共。侶。に。利。害。を。寄。て。勸。解。し。か。ば。持。永。や。う。や。く。怒。を。理。め。て。舊。の。處。に。立。か。へ。り。豪。衰。に。う。ち。對。ひ。て。老。師。の。誨。に。あ。ら。ざ。り。せ。ば。饒。と。ま。じ。き。癖。者。な。れ。ども。只。就。盛。の。面。に。頓。て。此。回。の。枉。て。沙。汰。に。及。ば。ず。夜。分。の。城。の。出。入。の。自。由。な。ら。ぬ。ば。今。速。に。遊。佐。へ。の。返。し。遣。し。が。た。か。り。と。い。木。工。介。こ。ろ。得。て。奴。隸。毎。に。預。け。置。ぬ。天。明。て。出。し。遣。

るべきもの也。媒鳥のその轎子を力士等に撞出さして打擲て煙棄よ珠を返して櫃を留むといふ世の常言にも似たるかな無益ありきと咤きて櫃で輿にぞ入りける憊而媒鳥の力士等も空轎子と吊しつゝ又外面に出しかば泰勝の恭しく豪袁に揖して然而荷二郎を牽立て面草を投て退りけり登時豪袁の媒鳥泰勝等が出てゆきしとつくぐと目送り果てふたゞび呪文を念ずれば怪むべし長総の形體安定に顯れて忽然として前に在り豪袁にうち對ひて嚮ふの最も危ふかりしに聖人の御庇によりたりけん我身ばかりの人に見られを答るものもあかりしかば悄と轎子を立出てそが儘おん身の法衣の袖の陰に躲れて恙なきことを得たりし歡びの詞に陳も盡しがたかり現再生の御洪恩死かへるともいかよして忘るゝ時の侍らんやといへば豪袁含笑て我の只左馬殿いふの輿に燒せし破貞香の餘煙儕を犯せしかば不覺も春の心動きて荷二郎と共に轎子の内に入給ひしをばやく媒鳥に見出されて既に難義に及びしを見るに忍びせ法術をもて備を人に見せざりしハ素より備の本心ならぬ淫奔の罪により思ひかけなき荷二郎と俱に頭を刎られん事かし憐む故なりき勿論備の當初那荷二郎に哄誘されて權且枕を並べし事も又隆光が妻になりじより荷二郎を疎果て舊恨を復さんと思ひし事も我よく知れり今も然るや否や思念の外なる今宵の密會いまだ佳境に入らずして事の敗れに及び

しかと今さらには又可愛くみぎて遺憾なき歎甚麼にぞやと問ば長総顔うら報ゆぞ何事も明々地に過去未來まで知召すおん身に隠すべくも侍らず遠江にて荷二郎に獄舎の苦艱を拯れしハ恩に似て思ならぞ小夜二郎さへ隆光さへ那奴が爲に非命に終りし怨の忘れがたかるに破貞とかいふ名香の奇特ありけん我にもわらや鈍や那奴と宿まく欲りせむ術の只夢に似ていと耻かしくも悔しくも腹立しくもを侍るなれといふに豪袁然もこそと點頭ながら差寄て然いふよしの搗鬼やらで今宵の恩と恩とも知らば我家を慰め給ひせやといひつゝ手を拿り引よれば長総の吐聲とばかりに顔と背けて振も拂ひせしか宣ふハ有がたさまで歡しく侍れども女人の出家を落ともものハ永却淨ひ瀬あらせと聞にきその義ばかりの饒させ給へと推辭の豪袁眼と睨りて憊いはるれば是非もなし儕の舊惡今宵の事まで就盛主へも左馬殿へも告てその折思ひ知らせん後に悔しく思ふを權して故意といなんとするをやと喃雲時と引禁したる後の地獄より生る遺世の極樂へ先導ん快立ぬとやをら手を拿り掖立る破戒隨落の密婚隨喜破貞の香染の法衣に恥をしら波々現慈海の三惡道有歎ひたり歎迷へばぞ暗きかたへ

と伴ひける。恚りし程に泰勝の心に思ふよしわれ。荷二郎を勤りてその身の子舎に得てゆきつ。飯を啖せ酒を喫して他か心を安しつ。語次は聲を低めて和郎の脱落もなからんにいかまれば。虚々ど今宵奥まで潜入りて。轎子に躲れたる。實に専女の長總と情由ありける。歎甚麼ぞやと問れて。荷二郎隠すによしなく。然ばとよその事あれ。那長總の小可が遠江にて危竊を救ひて。道地へ俱して來ぬる比まで。旅宿ながらに枕と並べし。女房で候ひしを。投名狀の得がたさに。五十棧電次に興へしか。かども陰に眞の離縁にあらす。然るに亦小可の隆光を密訴の後。遊佐の獄舎に繋れて。長總の安危を知らず。人よ問んぬ。さすがにて。折々心にかゝりしのみ。往方を索る暇もなき。獄舎を出て。幾日もあらぬけふの加勢に差來されて。人並に骨を折たるに。我身ばかりの立關の次の間に。うち籠られて。物欲しくなりし。のとならず。奥のかたに立謀ぐ。人の聞えしかば。絳の光景も見ましく。折もよくの一。碗の酒と賜はるともやあらん。と思へば。臆て立出て。搦つゝ來ぬる奥坐席。思ひかけなく。長線が仆俯して在りければ。扶起して。活を入れしに。立地に息出て。連に情を餽りしかば。うちも措れそが。儘に那轎子へ引入れたる。折から無慙や。條持生に見出されて。脱るゝ路なく。既に難義に及びしに。今に解せねば。長總の形體の毀で。見れなき。

りにき。最も怪しき事ながら。時に物怪の幸ひなれば。左やら右やらいひ。瞞めて淫奔の罪を免れしより。行者並に。かん身さへ。郎君を諫め玉ひしかば。やうやくに。饒されて。首に別れを。ありにたり。この再生の御恩なるに。恚懇切。管待給ふ。御好意に我を忘る。秘事までも。うち出して。かん。噴飯に充るのみ。抑我妻長總の何の比より。此陣館に仕へて。専女にせられしや。事皆。意表に出るをもて。今おぼ夢の心地ぞと。願ふの。誨給ひねと。舞々。請問ふを。泰勝所つゝ。領きて。和郎が。疑惑の。然も。あるべし。那長總の。遊佐殿の。紹介により。我公子に。仕へて。専女に。せられし。十月の。時候なり。き。却長総が。罪を。饒されて。就。盛主に。よく。思れし。又。是所以。ある。事ぞ。かし。腹を。な。立。と。具。よ。報ん。件の。婦人の。遊佐殿に。只。和郎を。のみ。思。く。提。做。して。夫。妻。約。束。を。せ。し。事。の。あ。し。他。の。東。國。に。在。り。し。時。名。高。る。騙。賊。の。猖。張。に。て。人。を。殺。し。卒。を。越。た。る。舊。恩。多。さ。も。の。也。と。正。可。に。密。訴。し。た。り。し。か。ば。就。盛。主。信。容。て。和。郎。が。功。を。賞。す。る。と。なく。死。罪。を。饒。せ。し。の。み。に。し。て。放。免。に。せ。ら。れ。し。よ。し。那。從。兵。墨。田。壽。九。郎。に。我。聞。さ。れ。ば。紛。れ。の。あ。ら。ま。恚。れば。甲。夜。に。長。總。が。和。郎。と。宿。ま。く。欲。せ。し。を。願。ふ。に。破。貞。香。の。奇。特。よ。て。實。情。に。の。あ。ら。さ。る。べ。し。或。の。行。者。の。戯。れ。に。術。を。も。て。長。總。の。姿。を。現。し。て。和。郎。に見。せ。又。術。を。も。て。長。總。の。姿。を。は。ら。く。隠。せ。し。歎。是。も。亦。知。る。べ。か。ら。ず。又。郎。君。の。急。を。移。し。て。和。郎。

を破んとし給ひしは姑摩姫ならぬ老羅猴の暴たる事のおれば也。この義もいまだ知らざる歎
 事柄は簡様々々と那羅猴の事いさら也。豪衰が持永に贈りたる香の事までも漏さず惜々地に
 告知すれば、荷二郎怒に得違ずして齒を切り腕を振りつゝ疾視て小雲時の應もせざりしを思
 ひかへしつ。嗟嘆もて原來我恚なりたるも皆長終奴が譏なりし歎然とハ知老夥計の奴等が拷
 問の苦痛に堪せじて口走りたるならんと思ひしといと疎直なり。誰か知るべき長終の曾根
 屏の兼舎にて必死を極ひ得さしたる思を忘れし疎意薄情遂に此身の仇を做て偷に榮利を謀
 りしよ。倘生かば那奴が舌を抜き我此熱腸を何の日にか冷さんや惜むべきと。繰返し
 つゝ怨それハ泰勝然こそと慰めてその憤りの理りなれども性起らば事の差池あらん我ハ今
 より和郎の奥に惜々地は長終に心を厲て他が意裏を焼ん他が本心聊も和郎を思ふとなくば
 その折に便宜を求めて怨を復しね後悔なからん姑且この隙に儘せきやと潜かに諫れば、荷二
 郎喜び頼をつきて舊縁もなき小可を然るに思召ると。厩に銘じてしるべから老倘又異日
 御用もあらば何事され仰付られよ。身を碎き骨を折るとも御恩に答奉らんといへば泰勝も喜
 びてしがらんには、我も亦憑置べき密議あり。我親ハ伊勢の國司北畠殿の權臣にて、姉ハ國司の

側室なれども我身犯せる罪ありて故郷を追放せられたり。その故ハ簡様々々と稻城が事の顛
 末を詞煩しく顯示して恚れば我ハ兩個の仇あり一個ハ女子の事なれば怖るゝに足らぬやも
 那信夫が義兄なる達小六と喚做す奴ハ武藝も捷れし後生也。和主この義をこゝろ得て我が外
 に出る折毎に伴ふ立て偷に防がば後後々思ひなん。又只小六が事のみならずなほ憑むべきよ
 しもあれやその異日談きべしといふよ。荷二郎異議もなく仰こゝろ得候也。その小六とかいふ
 後生が此地へ來ぬるとありて見出し給ふ折もあらば早く小生に知らし給ひね。聞撃にしてお
 ん身の與に永く思を拂ふべし。お伴の事ハなほさら也。只任用し給へかし。といと懇しく諾ひし
 か。泰勝いよ、歡びて然ハ明日ハ遊佐の城へ還りて折折出て來よ。我郎君に提成稟して思
 願のものに做すべきぞ。といはれて荷二郎不勝の歡び肝胆を吐き意裏を盡せし密談に更聞け
 しか。バ久しく睡る遣もあらざその暗日醉し別れて遊佐の城内へ還りけり。去程に長終の憶を
 豪衰に挑れて脱るべくもあらざれば、阿容々々とその意も儘して假寐の枕を並べし折肚裏よ
 思ふやう。我身の過世いかなれば情郎に死別れして思ひがけなき荷二郎にも此行者も死を
 救れし恩義の架にせん。情もなく身を儘しぬる薄情さよと涙叱まで悲しかりしに豪衰ハ其後

も長総が獨宿る臥房に潜び來るを三四宵も及女隨に此惡僧の秘藏にも熱して房藥なとも
 置しからねば長総不覺に住境に入りて樂みありと思ふよき途に氷魚の契りを結びていよ
 憎からせなりにける此醜態に由て今古を憶ふに難は臨て身を汚されず死してその名は芳し
 さ節掃烈女に及べともよくその始を慎むかくの如きに至るべからず現長総が榮枯寵辱是
 淫奔に始りて又淫奔の咎に終らん爲に解く世の婦女子態る不祥に遇ざるを各幸と思ふとな
 くよくその始を慎ば汝に出て汝に返るよ福ありて禍なからん思ふべし怕るべし問話休題恠
 而今茲も向暮とせし季三四日にありしかば衰衰の持永に憐しく別を告て春の亦師も務多か
 り又見參入るべけれとて既又飯北に赴く折長総にの被衣初の衣の料にせよかしとて偷
 些の金を取して飄然として出てゆきけり然ば衰衰と長総の人知らぬ快樂あり又泰勝と荷二
 郎の悄悄地交を結びしよりこも人知らぬ好處なきにあらず只持永のみ木にも就草にも
 就かぬ氣を磨して壁に向ひて吻く息の外にの出る籌策もあらせ什麼いかよして先度の恥辱
 を雪る術のあるべきやとて左さま右さま思ふ程に遊佐就盛が歳暮の佳義に件當許外將て來
 なければ持永聽て對面して先書院にて祝儀を果し其後閑室に招容れて額を合して談せるや

ら知らるゝんとく姑摩姫と婚姻の一條の初に那永人の不働まで還て恥辱を取りしかば遺恨
 に堪せ那妙と途まで奪奪せんと謀りし事の趣さへ齊天行者の疎查にてこも亦知られしよし
 あるを今さら隠すべくもあらず既にして本意の如く他が上墳の折を張ひ兵毎多く遣して轡
 子の健奪奪らしつ我這姫院に將て來にける只夢の間の空憑よて姫にのあらせ山猴なりさ
 开が發出たる爲体の簡様々々に映ひき遺恨を查し給へかし再度の恥辱に遇ながら那隨にし
 て寢どき世の胡盧にならんのさ却いかにせば案儀を送ん願ふの教給ひぬと又他事もなく
 情語くを就始所つ沈吟じていと憚あるとながら尙春秋に富給へば血氣に乗せる性念にて
 事の敗れになれるなるべし願に機變をもてするもの敵も亦機變をもて答へせといふとあ
 し因て快告仕らん今より身職に儘し給ひ這婚姻の媒妁して必整候はんといふに持永感服
 して且歡ふと大がたならせその亦甚麼ある妙策ぞやと問へば就盛聲を消めて約這婚姻に
 三橋の修法あり然らばその第一法にれん身みづから尊大人満家をに消思して這婚姻を告て
 免許を乞給切第二法に納采に儀に役官せられたる姑摩姫の家の重寶菊水の短刀菊水の旗錦
 の御旗栴氏の舊記なんぞをもてせましく欲しと乞給へ愛子の事にをいそれば嚴旨必許客のみ

て。那神々を遊興し給へん。この那神を引よとる。第一の大綱也。第三法ハ。明年の春。奥職年始の拜賀として。上洛の折。便宜を得。バ。情々地に。嚴君に請察して。這婚姻を將軍家持の御誼也。と披露して。補正直に傳ふべし。然る時ハ。正直も敢推辭とを得。又姑摩姫ハ。没官せられし家の寶を得る幸あり。そを推辭。なバ。正直ハ。違誼の罪と免れ難し。恚れ。バ。姫の心ひとつにて。叔父を害する惡名と得ん。事既にかくの如く。勢已とを得ざる。又至らバ。姑摩姫義烈の勇婦と云とも。節を折さ己を枉げて。従んと疑ふし。と事詳に。解示せば。持永いよ。感服して。歡び初。又十倍したる。心花開け。打含笑れて。愉快々々と稱ける。畢竟。就盛ハ。持永の恚と。資け情を穿て。姑摩姫と婚姻の策を施したる。其事成。就しぬる。否。や。開。集と。續。ぎ。巻を。改て。第五集。四十一回。に。解分を。聽ねかし。

作者云。姑摩姫。小六と邂逅の腹稿ハ。看官必。權ふべき。本傳第一の。關見也。豫ハ。必。本集に。寫見すべく。思ひたりしに。每集。五卷と。相定めて。楮數にも。限り。あれば。未だ。其處まで。至ら。せして。姑摩姫を。閣く。を。遺。憾と。せ。且。本集に。演る。所ハ。多く。五集の。仕込也。後集。發行の。折。なら。で。ハ。あ。は。詳。な。ら。ぬ。事。わ。らん。又。云。本集ハ。癸己の。秋。八。月。中。旬。より。稿。を。創。て。多。十。月。廿。九。日。に。稿。を。脱。たり。恚。れ。其。年。内。發。兌。し。難。けれ。バ。一。稔。遲。延。し。ぬ。とも。宜。き。折。を。待。んと。云。急。に。綴。て。緩。かに。出。す。作者の。本。意。なら。ぬ。物。から。梓。行の。書。買の。隨。意。な。れ。バ。將。争。何。い。せん。看。官。これ。を。思。ね。かし。

開卷奇驚俠客傳第四集卷之五終

開卷奇驚俠客傳第五集卷之一

浪華 蒜園主人編次

第四十一回

豪袁管領に就て密に奸謀を助く
泰勝放免を請て且舊僕又遇ふ

再說。畠山左馬介持永ハ。楠姑摩姫を眷戀して。其叔父。楠式部少輔。正直に。蒙。囑し。婚姻の。事。を。説。遣。し。に。姑摩姫。一切。從。ざ。り。しか。ば。齊。天。行。者。豪。袁。が。謀。計。の。隨。に。して。劫。奪。ん。と。し。たり。し。も。疾。く。姑摩。姫。に。悟。ら。れて。大。じ。き。耻。辱。を。被。り。けれ。バ。怒。る。と。雖。も。爲。術。を。知。き。遊。佐。就。盛。に。商。量。る。に。就。盛。三。椿。の。法。を。説。て。媒。妁。せ。ん。とい。ひ。しか。ば。持。永。更。に。喜。び。て。篠。持。媒。鳥。に。京。都。へ。の。使。を。命。じ。歳。暮。佳。儀。と。稱。へ。つ。國。産。數。種。探。賈。せ。密。意。を。恫。々。と。言。含。め。て。手。簡。を。投。出。て。與。へ。けれ。バ。媒。鳥。の。旨。を。領。掌。して。即。て。京。都。へ。上。り。つ。満。家。の。前。に。出。事。の。情。由。を。情。々。に。報。て。件。の。手。簡。を。遞。與。し。ノ。か。バ。滿。家は。是。を。披。閱。る。に。赤。坂。に。下。り。着。て。より。晝。夜。肺。肝。を。碎。き。つ。ま。ま。に。差。を。換。て。姑摩。姫。が。莊。院。

を窺へども表皮の光景を知るのみにて内密の義の謀がたければ靴を隔て襪を掻く心地のみして詳悉ならず依て愚按を廻らすに假に他と婚姻を結び宿所に迎へて虚實を授らば心操亮然として分明なるべし他若異心なき時既に稟上たる如く幾個の勇士悍卒を得たるに増て當家の干城となる事もあるべく子孫に智勇の者も産れべし上に對しても忠なるべし彼反類女を凌利餘一が請たる先職なきにもあらざ然として在下色に迷ひて稟すと亦聞し若れ唯封邑の後忠を絶て當家開運の吉瑞と做ましく思ふばかり也倘亦怨敵の志を誦まば其色置れてや候へき然バ一個の婦人あり縱令幻術ありとても宿所に閉籠たるうへ何程の事かあるべき結果ん事石を以て卵を壓が如くあるべし此職を能々御賢察ありて尊慮にも川いせ給へ日外五十日樞隆光が夜稠せし時奪取たる楠家の重寶錦の御旗菊水の旗代々の古文書那時没官せられる東西御許まなほ在べし其賜りて納采とせば姑摩姫必ず許諾せん這一件の在下が弱冠の疎忽のみにあらず河内守にも豫め商議たる事なれば委さ情由の就盛が年始の佳儀も出京せん廻直に稟上る旨あるべしとぞ記たりける満家の素よりも愛兒の持永がいふ事ながら這のゆゑしき大事なれば左右なくの許可もせず先家表を招來らしめて伴の手簡を指示し老師

の何と聞るゝやらん愚兒が卒爾の了簡の毛を吹て疵を求る端とやならんといと危殆し那楠家の我祖父義深の時よりして代を累ねたる怨敵なるに過頃姑摩姫が獄舎に在しを人として數殺さんと爲し事もあれが冤氣極めて解べからせ萬に一ツも過差あらば世の胡慮もあるべきなり然ども老師の示教もあるかと問へば家表横手を拍て這策決めて妙也現郎君の今世に多く得難き才子にこそと頻に賞てさて曰やう義に貧道法術を以て那莊院を殘る限なく窺ひ知て候へども姑摩姫が心術の今些疑ひしきり他にも些少の幻術ありて心地を露さされれば也これを欺き謀らんには色情に過るゝなし色慾一番萌を時那幻術の瓦の如く解て效驗あらざる事凡て法術の習なりされば其人を得ざるうへも出家の色慾と説ん罪障なきにあらざれば黙止して今まで稟ざりら然るを郎君弱冠よして思召出されたるに實に凡庸ならずと謂べし猶疑しく思されなば一識を菩薩よと奉りて其冥驗に因べきかいと道がから袂接合せて印を結び眼を閉呪を唱へて念ざる事半胸許徐くは眼を開き莞爾と咲ていひける貧道目今神通の三昧に入て規ふに郎君の簾り給ふ如く色慾をもて他に中らば凶を轉じて吉とある事疑もなきものから那姑摩姫が強情ある父祖累世の怨家として當家に心を措たれば急速

に承引べからざればとも上の權威を以て名とする時の忽に遊誑の罪となるべければ承引事も俟べし遊佐氏ハ此機を以て計策んといひるゝなるべし然れども他ハ柳營の御誑といふとも頼く信容べき者ならねば猶遊佐氏と相謀りて簡様々々に行ひ給へさむらば通るゝ道なくして終に承伏稟すべし澁々にも赤坂の御館に参る事あらむ彼冲天の術ありとも折ん事ハ貧道が掌の中にありとて其謀略を漏なく告てかくて一度郎君と枕席を共にせば他が心の漸に解て寔に飯降すべし其にも希代の名法われハ相應しからぬと期に臨まば郎君に授け稟すべし遊佐氏ハ此等の事を正直にといひるゝならぬと他ハ不才は魯直人されば姑摩姫が敵手よ足る者ならぬ然れども言を傳ふるハ他より外に其人なければ嚇し此して逼らせなば竟に成就すべきありなほ遊佐氏に令せ附て心を用ゐて助けなば脱落するべうも候ハ貧道も那里へ往て相共ハ商量すべければ簡様に太上皇の敕使と號して姑摩姫と面を照せし上ハ千雀殿の婚姻に木の端の探ある老僧ハ長しからねば此義ハ用捨し給ふべし然れども別に權を設けて男女和合の法を修し且幻術を調伏すべし此修法にて其男女の本命の支子の八字を以せざれば行ひがたき所あり然れば又簡様々々に謀らひ給へば姑摩姫が本命を知るよしあらん是

も亦遊佐氏に吩咐給ひや整ふべし彼主上浴せられなば試に先其所存を這方より問給へ貧道が前知したるに毫も錯りあかるべし其にて向來の計策も羞ハぬ事を知らせ給へ疑ひ給ふ事かハと手に把るごとく演しかハ満家疑忽然に氷解たる共に持永が才智を履賞られて満面に花を開き東西許々取出で豪衰が布施ハ曳き勞を謝しつゝ春を約りて其日の暇をらせにけり去程に翌れば應永二十年の正月になれど持永ハ片田舎に在ければ省きて何の儀式もせず朝の間の近郷の目代地頭莊官等が佳儀演にとして来りしと對面し家縁に命じて遠侍にて盃酒の式例の如く果たる後の出仕すべき處もなければ花浴の方の春色漫に露出られていとゞ然然なるまゝハ那婚嫁の手段をのみ右さま左さま思ひ續けて惘然として在ける處へ媒鳥が夥兵回り來て京よりの返報ありとて泰勝が披露しければ忙しく把て関るに父満家の直筆よて那婚姻の事ハしも等閑ならぬ大事なれば來春遊佐が上浴の尅寛釋に絆を商量らん努々急進て後悔をな其返言の密議の與縁持媒鳥ハ扯め措て正月の初旬に下すべしと簡約に書れたり持永これを泰勝に看せて情めさ譚らふやう和郎ハ什麼とハ思ふらん如此てハ成否ねばつかずし何れにしても就盛ダ上浴を待るゝ旨なれば遊佐にも尙又這由を意得させずハ有べからざ

和郎の今より大詰ながら那里へ往て情々地に傳へて能々懇み置け。明日明後日に就盛も必
 上落せんぞるいと遠く泰勝畏みて仰の赴承りぬ就て願ひ奉らまほしき那荷二郎が事に候。
 他往時かん便室近く不敬を犯し剩件の轎子は躲入て在けるの不測の曲事と稟せども原來
 匹夫の草賊なれば禮法に拘る者に非ずされば一旦の御憤の理ながら一箇の遊佐殿の要わ
 らんどておこせし者なり二箇に又向後にも用おやうの多からんを那儘にして當館の出入
 を許し給ひ遊佐にも不快に思へんかその右も左も事ながら下郎の口の惡さは他那
 時の機密をもおろく識て候へば難面く遇らば世間に漏さとも稟がたし然れば曲て御免
 を蒙り時々のれん危瀕へ出入せしめて餘れる酒肴を恵ませ給ひ他も又恩を藉ひ徳を感じ
 てかん與に做る事もあるべし且の豫ても稟し如く小可の仇持たる身なるに唯一箇の若黨だ
 になく萬不便の緯もあるに那荷二郎が面魂一併あるべく所見たれば出行する時召俱て其頭
 の要に充んと欲とされれば除非那白痴物が異心を抱き候とも小可斯である上の事に臨みて立
 地に結果んも亦甚容易し是一事兩用なれば只管免させ給へかしと屢乞て止されば持永雲時
 尋思して現いふ處も一理ありされども他が其夜艾轎子の中に躲れ居たる大胆不敵のいふも

更あり什麼ある事情とも我の今尙意得がたかり然れば再び召寄て詳く推問せし上よさせる
 不良の心あらざる登時に免除もすべし這等の緯も就盛に照面の尅譴ひ見よ那首にの知れた
 る事もやあらんといひければ泰勝唯唯と言稟して深藹笠に面を覆み輕卒一個を若黨とし奴
 隷に禮服を拿齎せ遊佐の城へ赴きつゝ町盡處にて衣服を更め城中に入て持永が使者なる由
 をいひければ就盛即て對面して年首の口誼辭竟れば泰勝聲を低うして別に情々に稟せども
 持永が稟付たる事あり雲時御近衆を遣放給ひやといふに就盛點頭て然らば便室へ通らる
 べしけふの年始の佳例あれば鹿酒をも一ツ勸めてんとて侍共に附附て閑室に伴へば問もあ
 らせ童扈從が交代し持運ふ古昔時繪の重篋に故實めきたる長柄の銚子いざとばかり就
 盛が勸むる間に下物も増て思はず半酣に及びはる時就盛左右を遣放てさて左馬殿の密議と
 の那姑摩姫の事なるかと笑つゝ問へば泰勝も莞爾と笑てさん候那姑摩姫を娶らんとて様々
 心を盡ししに逸く其机を猜せられて再度の不覺を採しよし既に知せ給ふが如し然るに殿
 の御計畧にて父管領へ由を報て表向より媒妁もて娶らんとの事情を即ち京都へ稟しに箇様
 々々に回答せられぬ恚れば近日御上洛のかり管領の得心せらるゝやう御賢慮を希ふ所也こ

の稟までにも候へぬ。那管領の文體の事煩重げに听へ候へば、尙念の與在下を使者として憑
 参らざる也。と事細詳に演ければ、就盛頼にうち點頭さ。箇様の事に關係のん、我等にして、用
 捨もわれど外ならぬ。左馬殿のおん憑みなれば、愚衷の限周旋して、必整へ参らむべし。酷くお心
 を苦しめ給ひそ。明后日の上京とあれ、管領を拜謁して、這儀を計らひ稟とべし。此旨稟上
 べし。といと快く諾ひければ、泰勝のこれに謝し罷回りて、然稟さば、持永安堵致すべし。畏て候と
 應答しつゝ、又道やう事の序次に在下が願ひし事いと試に稟上ん敷。其の別儀に、いひのす。禰
 に姑摩姫が轎子へ秘符を秘掛させられたる、赦免荷二郎が事に、那荷二郎が其夜艾いかなる
 事にか轎子の中に躲て居たりしを、篠持蝶鳥が見露して、持永に報て候ひしかば、持永大に憤
 りて成敗せんぞといはれしを、在下やうく、賄話せしかば、さらば遊佐氏の面に對して、免すべ
 くとて放たれたり。けれども、在下が存ざるに、他が面魂凡庸ならざ。一僻あるべき奴なれば、こ
 そ、腹にも放じがたき罪を放して、召寄せ給らむ。且、那夜の机密をも片端識たる者なれば、那
 儘にして、遠陣なば、他怨み憤りて、禍害を懸出す事もあるべし。右にも左にも、久後長く、立入じめ
 と、異日の要に備へん事、兩全の義と思ひし故に、其由持永に稟しに、一旦こそ怒られたれ。方僅の殆

打解て在下に右も左も計らへとの事に候。就て、往々听し看れん。在下の餘義なき事にて、二人
 の仇を持候。一個の女で候へば、畏るに足る者ならぬ。いま一名の男にして、萬夫不當の勇力
 あり。他奴何尙遣地に來らば、憚なきにも候へぬ。只一名の若黨だに、なれば、那荷二郎を身邊
 に使ひて、他尙實に飯服せ。一方の捍城にある事あるべし。されば、いかで荷二郎を時々赤坂へ
 れこさせ給ひて、在下が伴當に俱せん事を許し給ひ。こよなき胎懐も候。といふに、就盛異議に
 も及ばざ。其事あらば、意得たり。那奴の其翌朝回來れと、恚ともいひねば、然る大胆を働さし。この
 拙老の夢にも、知れ疾知たらば、赤坂殿のおん賄話も、稟べきを、緩急の段是非に、暨ばす。這義の和
 主心得て、品よく稟開かるべし。原來那白痴漢の頭を、刻べき奴なれば、希代の騙局なるを以て、
 倒に使役ふ所もあらんと、霎時一命を助け措たる的なるから、殊更に所用なし。尙和主にも
 使ひれて、赤坂殿の御要にしも、たつ事あらば、拙老が素より希ふ所也。と听て、泰勝大に懼び、然ら
 ば、直に召連歸りて、主人に賄話稟たるうへ、兩三日、拙措て、又こそ返し奉らめ。といへば、就盛點頭
 て、その隨意にせらるべし。兩三日も、度毎に斷らるゝに、及ばぬ事也。但し、那奴の心術究めて、
 不敵さ奴かれ、遺亡らぬやう、小心せられ、忽緒に、とべき的ならせ。といへば、泰勝承諾して、杯



素衣之識
古埃水

盤を辞し別を告て就盛夕並を退けバ就盛ハ譽田騷九郎に吩咐て荷二郎を懸出させ泰勝に選
 與させけれバ泰勝これを請奪て即て伴當に交へつゝ騷九郎に謝して赤坂の陣館を投して回
 りけり當下夕陽西に落て雪を備す夕旗雲に光映薄れて曉始る黄昏時候に向しかバ俚の未通
 女が衝く胡鬼子も手毬の音も外に絶て物色蕭然になれりしうへに荷二郎さへに俱したれば
 泰勝ハ又禮服の貌を更老簡編笠をも脱棄て世に畏懼す回り去くに但見れば去向の樹下に鶺鴒
 菰を鋪破手巾を頭上に捲たる窶々しき一個の乞兒が儿還となく頭を叩きて聲憐しげよや
 や殿様お正月のお祝賀に唯一錢惠ませ賜ひねいかで〜と勸解つゝ乞ふを前なる輕卒の若
 黨が聲高やかに振絞りてやをれ道奴等道妨に道頭へ出て什麼をかいふ片退すやと罵ると猶
 憚すまに檜桶を突出しやよいかて御慈悲にと貢縁の間に料らさるも泰勝と面を照せて互に驚
 と駭さけるが物いんとして那乞兒の想ひや返しし左右なくいはずやや殿様這正月に餅
 一ツも飽へせぬ道身の因果も原といへば身より出たる鑄刀にも附及せし人なきにも有ね
 ぞ今ハ又奈何のせん他所の軒端を假寐の夢にも見ゆる往昔を恨しきいかで一合飲せ給へや
 よふん慈悲に候いと口説が如く衝しらすせ那若黨ハ大に怒り道奴甚大胆あり我主人とバ就

とか思ふ飛坂様の御家中さるに解らぬ証言詳々と噂さば許し置べきかと襟上把搦で曳居る
 を泰勝やよと喚みめて今日ハ大事の使節なるに乞兒を奪て作麼にかせんいで那些退て通
 ささや現還年の首より飢寒てハ只願に東西欲がるも無理でいなし餅でも吃へと襦袢袋を搦
 搜りつゝ錢二三文取出しよや紙に括りて撲地と投れば音を葉に播けり上て數回押戴き天晴
 れお慈悲にお愛嬌あるお殿様のね取物隨辱さし有難し其後とても久後くおん目を賜り候へ
 と追従輕薄猶諄々と几回となく叱を看ぬ態なして泰勝ハ脚急に去過れば眼ある好意が酷し
 く情等何時でも今日の如く主人を思ひ奉らば當の鐘が外れなん果報的奴と一言を罵りさじ
 てゆく野徑の竹林に雀の聲静まりて隠る見ゆる燈火の赤坂の館は歸りけり泰勝ハ荷二郎を
 己が子房に等せ置て獨持永が前ハ出遊佐が回答を箇様〜と耳語告てその後ハ那荷二郎を
 召供したりし一五一十を語説りかう仕て候へば始く前罪を恩免ありて在下に預け賜り候へ
 別に異心も候はずハ御婚姻の期ハ置びて用給ふやうもあるべしと忠告めかしていひ嘴れ
 ば持永再應の尋念に暨ばす遊佐にも然様にいふならば雲時和主に預るあり然れども那奴ハ
 舞者なれば小心するよます事なむ由願して取な還むぞと戒めながら許したれば泰勝大に怡

前篇の作者多岐を誤る多氣郡北畠殿の城主多岐也然れども今更に其誤を改す猶多氣に作るも官の爲に紛らんとしどからん也

慌て已ゞ子房に退き出つゝ急ぐ荷三郎と喚出ま喚飯を興へ酒を喫しめその身も共に喫味してさて情々地に語らふやう菊日改を救ひしより奥に心を配りつゝ長総奴を覗み見れども未だ日を経ぬ事なれば遣ぞと思ふ證據も見出せされども竟に他が本意を探らん事も難くわらされば先方便を以て郎君のかん怒を勘解ぬ遊佐氏に乞取て箇様々に料理ひたれば今日よりして我方に和郎を措とも異うのあらず但時々の遊佐の城へも回りて那里の容子を覗ふこそよかぬれさて久後の憑ひべき大事もあれと開よりも親面りて和郎を勞とべき事あり開の方纒回り路にて東西と乞たる乞巧奴が事よ那奴と面を照せし時何とやらん認得たる的の育たりと思ひしかども急に案ひ得ざりしに徐に考れば他の我身が伊勢の多氣にて使隸ひたる草履取にて名を敵介といふ的也橋に稻城が女兒信夫を豪奪して其父親の丈作を殺したるも斧田與記右衛門山勝内といひし若黨と共に密議に關りしが事愈露顯に及びたる時與記右衛門内内斬罪せられ敵介の追放せられぬ然るに爾後恚にして那様体になり作りけん左に右にも我を認りて盡きたる体なりしが言を設けて哀憐を乞ふ意を急ぐ猜したれば切取を取らざるやうにて金二三歩を與措たりさて猶我道所に在る苦黨の輕率奴

が高らかに言曉せられたれば那儘にて棄措がたしとていへ他奴も聊の才覺める的なれば奴隸として駆役の他の的に勝るべし倚打棄て願着すの他のた怨みて仇なす的の補助に亦あまどもいひ難しさればかたゝ這處へ曳入んと思へども乞巧の形での外見悪し因て和郎を勞するなり今より他奴が在處を覓ねて緋恚々と説听せ遣金をもて身の装ひを他郷に至り朋へて日敷を歴てより氣無く訪來るやうに料らるべしよく酒喫て快々往ね白晝にての妙ならすとて金一兩を週與しゝかば荷三郎異議なく領掌して開の奇妙なる事に候他奴が旦那を認着しをり事あり氣に推査しぬさて伊勢まで使ひ給ひし敵介男て候かざらば急ぐ喚請られてねん便利になる事あらんいで一走まわりて來んとそが儘立て往けるが半時ばかり立て立販り仰に任せて那樹下に覓ねゆきて候ひしに開處にをらで遙は道方の灰燼の軒下よ兼轉びたりしを喚痛しつゝ緋由を説听せし始に匿みたりしかども竟に實を吐て候那敵介の去稔の春旦那と共に伊勢國を追放せられ候へども素より他邦に親類もなし然とて國中に徘徊せば捕へて斬るべしと聞ゆしかば辛うじて大和に立越向高市わたりを吟ひて賭博を好めと鋪一錢の本錢あければ刺盜を業とし怯弱人をも嚇しての些の本錢を設けつゝ食博

突に輸盡しければ火家の奴們が醜號を命て無底の不九郎と喚ぬとぞこの底の無き裏に東
 西を入れても溜らぬ如く池が博哭の下手なるを嘲る共に鴝鴒の鳥が夜々小鳥を取啖ふし剽盜
 を擬へし秀句なるべし。さるを敵介の悟らずして竟に己も不九郎と名号たりといふなる
 可笑しき事なり候ひきや。憊て或時一人の旅入を剽んとしたるに案外にその旅人が心剛か
 る手利にてありしかば股と脇とに似たかある痕を二箇所負せられ。跟跡を晦まし逃たれど
 も其痛大に發して腫上りたりければ辛くも殘金を懷ふして龍神の温泉に赴き三廻り浴して
 愈たれども衣服の更なり脇差さへ賣て宿賃に充たれば更に亦剽盜もならぬ爲方もかく落魄
 て形かたちの如く非人ひにんに成下りたりといへり。憊て剛才旦那を見て不審思ひしかば言を設て外な
 がら身の不造化を訴へしかば果して三步の金を賜ひぬ。明日の妬衣の一領も買もて來つ。這
 御館ごかんに參りて訪ね奉らんと思ふ折から又更に和主を使に賜りてなほ一兩を賜へれば天にも
 登る心地なり快く他郷に走去て打點を整へ候ひ。就て參りて拜謁せん。其時愁哀の事ども
 盡しておん禮稟すべしとて大く歡喜候ありされば不日參上せん事。必定に候といふに泰勝點
 頭てうづてさてへ那奴ななの心易かり。來らば情由を郎君に稟上て這方に留めん。その席次せきじに和郎が事

も尙克提成稟し置て恩顧の者に做すべきぞ。心長く時節を待ね我の今まで獨身にて萬事に心
 細かりしに今稔との運氣うんきの直りしよや。年の元月の元日の元なる今日即時和郎が幫助を得たる
 うへに敵介さへ來集きつひ。世に怖おそしき的あてのなし。いざや祝壽しゆじゆに喫のくと又殘殺ざんころを取いだしはつ抑おさつ
 勸すすれ。荷二郎にがじらうも笑坪えつべに入いて更さら關せきるまで醉よめを尽つして其儘倒たよれて寝たりけり。

第四十二回

權門けんもんに媚こて就盛君命しゆじゆのみことを僞いつる
 姪女めいむすめに逼せまり正直親事を促うながす

却説遊佐河内守就盛さつざのちのりもりの正月三日しょうがつ三日に河内國石川郡を打立て京都に上り將軍家義ぎに年始の拜賀
 を稟あがしける事果て管領畠山尾張守滿家の邸やしきに到り同く佳儀かぎを演のげれば滿家就ち書院へ請まねじ
 恒例とつねの式竟まはて後所ごしよも亦またく今暫いましばらくく此處こゝにて休息きよくせらるべし。公用果はてあは緩々ゆるくと御意得ごいたき
 事ことなきにも非あらざと就盛を留め置て滿家の室町殿へ出仕しけるが亭午ていご過る頃ころ回かへり來て閑室かんしつに
 招まねき入れ茶ちやを點てんじ菓子かしを勸すすめ更に杯酒ぱいしゆを整とへて就盛を管待くだつ。やをら左右さうぶを遠退とほざけて膝ひざを合
 せて靜しずくやう。知らるゝ如く姑摩こま姫ひめが去秋きしゆ五十日ごじふにち權電ごんでん次じを討うたる驍勇智謀せうゆうちぼの賢かしこき事驚おどろくに餘
 りあり等間とんがらにして稟措りんそが終つひに國家こくがの禍害わざはひをも洩出もくしゆとべく思おもひしかば愚蒙ぐもの兒左馬介ごさげを萬

事貴殿に打憑みて八九の莊院を接察せん爲赤坂の陣館に遣はしたるに想係なく那姑摩姫を拙
 兒の娶らんといいひおこせぬ強ちに色も溺れて所望とるとも聞かぬとも他女が強情なる決め
 て隣煩ふべからぬ事ハ鏡に照して看が如し任他通る路なくして假に親事と許諾すとも弱
 冠の拙兒が配耦に手は餘りたる心地して持頼んと危殆く思ふを貴殿にも商量したりと
 いへるの實に然る事なる歟貴殿の妙案怎生ぞやと問へば就盛情めさ回へて仰一遍の事
 に候但し在下が存するに女ハ總て水性なる的なれば除非姑摩姫只今こそ父祖の遺訓を一
 涯に守りて任情を稟せども一度税席を交しなば漸々怨恨も解ぬべしさらば憂を一轉して歡
 喜となる事もこそ候へ好些また異心あるにもあれ迎へ拿せ給ひてハ畢竟一個の少女子なり
 四相を悟る才ありてはた幻術を能ととも恚程の事か候べき齊天行者豪衰が法力も候へば开
 の怖るに足ぬとも南北朝のおん事と累世冤家の故をもて決して従ひ稟せまじ因て在下が存
 せざるに是を上へ申上てねん旨を請給ひ南北兩朝御和親のうへに其臣互に遺恨あるべから
 せ補父子の輩ハ代々南朝のおん奥に屍を戦場よ曝したる忠心無二の將あれば其後なきを憐
 め給ふに僥倖にして姑摩姫ありされども女流の事なれば所願を與へて臣ともしがたし依て

畠山滿家の父祖の時より河内と領して代々補と鎗を削りし舊怨最第一たればこれが末子左
 馬介持永を姑摩姫に配耦せて秦晋の好意を結びなば冤氣始て氷解して永く泰平の瑞たるべ
 し然らば久後持永に楠氏の舊領を支ち與へて出生の兒に楠を名告せ祖先の祭祀と嗣をべし
 就てハ先その納采に瀆し没官せられたる楠家の里寶錦の御旗菊水の旗且ハ亦正成己來の舊
 記をも更めて音物とせしといハ大概の整ひハん恚て他が叔父正直を嚇すハ威嚴を
 逞しうして假親と做し姑摩姫を介抱して赤坂へ嫁らとせし若舊怨をなほも稱へて命に従ひ
 奉らずハ姑摩姫ハいふも更あり正直も違証の罪を犯されて重き科條ハ處せらるべしと吃と
 喝命なハ事十二分に整ひなん賊恚ても姑摩姫従ハずハ將軍家の命を听ぬハ名として結果も
 法もあるべし又正直も他ゆるに違証の罪を稟るといハ叔父を害する惡名あれば必従ハ
 やハいハべき思接ハ如此なればさて左馬殿の御商議に加りてこそ候なればされども賢慮に叶
 ハぬ賊覺束さく候といふを听て滿家の肚裏に想ふやうげに豪衰が前知に違ハず就盛果して
 將軍家の御誕を以てせんと説り然らば向來の事ども必行者が神占に漏たる事ハあるべか
 らせと疑念忽ち解しかバ想ハず莞爾と打笑ていハるハ趣其意を得たり嚮ハ行者豪衰に這一

條の吉凶を問しに既に貴殿の謀略を一事も錯へる前知して遊佐主來春上洛わらば箇様々々
 謀らるべし。これ甚妙計あり。然れども伺い。他の南朝の餘孽あれば上の御誼といふと雖
 ども死をもて推辭し事もあるべし。且正直の義絶の叔父なり。今の上の嚴命にて姑且和順と
 いへとも心を放す事もなければ他一名のうへなごの願るべき氣象にあらざ依て今些妙なら
 ぬ處あり。同じく、嵯峨の太上天皇の勅諭にて正成が後を憐ませ給ふといひ。此事必然成就
 すべし。罰に一千金を賜ひし折も柳營に對し奉りていさましく不敬の語を吐しも太上天皇の恩
 賜といふに推辭かねつ。那金を受納めたる光景よてこの成否をば知るべしといへり。遠議
 の如何あるべきといへば就盛只管に横手を拍て感心し。今よ始ぬ行者の神通今番在下か秘策
 を急くも知て告られたる。回すくも怖るべし。開の尙其該の緯ながら太上天皇の勅諭といよ
 くも按ひ着せたり。智略といひ法術といひげに這うへの妙策あるべくも候い。といふに滿
 家手を掉て這箇に一個の難義ある。遣一件を明々地上に上りて稟上かたかり開の想うても看
 給ふべし。恚の所見たる事もなき。父祖代々の怨敵たる楠氏の孤女を娶る事といひ。反くせ
 ば御猜忌を蒙る事もあらん。上に讒者の口をも開くべし。且今年の御讓位の御沙汰もあれ。開

時に姑摩姫怎なる叛心を抱ん事も料りたし。されば旁然様の事と當職に居る我等より目今
 の稟上かたかり假令婚姻整ひたりとも當分の秘措て決して口外すべからず。恚ていよく姑
 摩姫が別心なきにも究らば開時の謀計の與に雲時持永が妾の如く召使ひて試し候。と事も無
 氣に稟上てん。遮莫姑摩姫肯いせして事尙變封に暨びなば太上天皇の勅諭といひ上の定意とい
 ひし事の尙御耳に入とあらば罪の我等一家に在ん。道義の怎麼とべからん。といへば就總小首
 を傾けその仰に候へども甚り賢慮に過たる歎好些姑摩姫這機を猜して承伏せざる事あり
 とも。當今在下が手を超て何處へ出て訴訟ふべき家諫を京へ陟とともその訴訟の管領の必所
 知に係るべければ。是又防ぎ給ふに易し。開までもなく然る事あらば。道程に問者を出し措て若
 莊院より京を望て走陟る。的ありもせば暗撃にして口を塞が。ん。這等の事の機に應じ變ふ應じ
 て在下が禍害を防ぎ候べし。かん心易く想されよ。千に一個も事發覺せば。愈在下が身に曳負て
 肚搔斬ん分の事也。這是累世御被官たる鴻恩に報い稟とべき。微志まで候と。とも潔白く道放
 て。滿家大に歡喜て咄憑じ。貴殿の義胆道上のいふべき事もし。除非道事發覺て貴殿の身上
 に係るとも。我等が恚て在るうへ。身に代て救ふべし。心動く想はれよ。さりととも這の千一の事

道妙策の豪衰行者の未然を査せし神算なれば成就せん事疑慮あし。されば決めて那些の事も心に莫懸られと左も右も這一條の貴殿に任せ遣されば隨意料理せらるべし。尙豪衰の所説に姑摩姫の幻術あれハ事を左右に假托して通る事もあるべければ承諾したるその時に他が本命の支干の八字を證據の與ゝ寫せ給へ抑八字といふ事ハ漢土後世の婚禮にその媳婦の産れたる年月日時の支干を寫て婿の家に贈る式にてこれを庚帖と喚做たり。我上古に婦人の諱を丈夫と定むる男子に名告しと袒背たる意あり。この我邦の婚姻にハ未例なき事なれども姑摩姫の文學あれハ那些の緣由も知りたるなるべし。他日逢變のなき照据にハ必遁りて寫せ給へ。且その本命の支干を以て調伏の法を行ハ。那幻術の忽破れて縁を結ぶに至るべし。と回す。くも説措たり。此義も克々意得て正直に傳托せられ。兩三日の中に那楠氏の重寶を齎して。條持煤鳥を下とべければ當下の恁々料理ハるべし。此餘の事ハ時に臨みて脚力もせ遣おこせられハ。頼に回答をすべき也。と事肌もなく譏嘲れば就盛ハ懷中より矢立の筆を把出て。墨紙に此等の由を委く記て承諾を滿家般々に安堵して。童屋從を喚出して更に銚子を加へさせ酒肴を増て就盛に自ら酌して強勸ければ。就盛も怡悦て酔を盡してやうやくに辭して。旅第に歸り

けり。然而就盛ハ其詰朝三管四職を首として知音の方を打巡りて年首の佳儀を述竟り。睡昏頃より京を出て河内國へ立回り就て赤坂の陣館を訪て。持永も佳儀を演今番滿家と謀りし首尾を箇様々と低語示して。如此く候へハ。豫ての計畧十二分に整ひて候なりといふに。持永大歡び手の舞足の踏を覺へず。既我東西よしたるが如く漫に急進るを。就盛ハ推禁めて聲を悄め。恁ハ謀り謀せられども。那姑摩姫ハ輕々しき婦人に非ざ候へば。おん心長く等せ給へ。一應二應の往復にてハ。決して會得ハ稟そべからず。京都に遣し措れたる條持煤鳥に。嚴君の令含らるゝ義もあれば。他が下着の其上にて。正直に稟與せべし。必忙まり給ふなど。重復戒めて就て城へを回りける。兩日を経て。滿家の條持煤鳥に。密策を授け去秋隆光を誅せし折遊佐が許より。おこせたる楠家の重寶を納たる筈を。將軍家へハ披露せで。暗々に已が許に留措たるを齎して。伴當花鹿に裝束せ遊佐が城へ遣しければ。遊佐も寔に畏みたる面色して。煤鳥を上座に請就しめ。詔意の旨を聞しかば。煤鳥即ち一揖して。豫て云付られたる如く。太上皇の恩勅と室町殿の詔意の旨をいと鷹揚に述けるに。就盛謹で承り。臆て有司等に商議して。正直を喚せける。就盛が恁料理ハし故ハ。俺城中の甲乙にも。机密の漏ん事を。怕れて滿家と喋し合せ寔に京より命令あり

し像くにせし也。正直の恚るべしとの夢にも知ず室町殿の内証ありとて遊佐の城より使來りて即今來臨せらるべしといひければ、怎麼事やらんと駭きて快く時服を更めつゝ、伴當を忙がして遊佐の城へ來にければ、就盛書院よこれに請じ媒鳥を率て出て來つ。那婚姻の一條と事長やかよ説听せて、太上皇の勅書をも賜ふべき事かれども畢竟一家の内縁に面正しく公法を用ゐらるべくもあらねば、特地と御書をば賜ひぬ也。然れども姑摩姫が疑念なきにも非るべき歎困て柳營の御内書を管領に賜ひる者也。これを以て照据とせば、姫も疑念なかるべしとて、又那重室を納采にすべき事庚帖を寫しむべき事までをいと嚴かに命遣與しければ、正直で頭を低熟听て大に驚き且の呆れて爲術を知せ迷惑一身に輻湊たる心地のすれど、柳營の御説といふに力なく仰の趣逐一に畏て候と先御請をしつゝ、さて就盛に打向ひ語の端を更めて河州の怎と听給ふらん、想係なき院宣御説畏て候へども進退谷る心地してこそ候へ。其故の前番左馬介殿在下を招きて姪女が婚姻の事を頼るゝと、黙止がたくて那里へ立超え言を盡して説たれども他の一切肯のさ箇様々々に稟圖て強てせば、女僧に倣らんと稟たり今番の開と、の等しからねど知るゝ如き任情的にて在下とも平素に疎々しければ、偏窟に推辭奉るべしと

れバ貴老のれん提成にて。這一件の媒始の只管御免を蒙りて餘人に仰属られんやう管領家へ仰達せられバ無比類幸は候と恐るゝ推辭んとするを就盛听て居丈高になり開の又怎といはるゝぞ聞るゝ如く上のとならば太上皇の赦慮より出たる恩勅あるものを貴方叔父の身分として唯一女子の令姪女が圖辭せられんとて一應の傳達もなく這儘に辭せらるゝとの道難かるべし嚮に左馬殿の憑れたりし事のありしか知らねども開の普通の縁譚にて熟せざるも又世の常なり今般のそれと同じからず固辭せられなば違勅違証の罪を犯さるゝ事もぞある。這事バ管領もかへすゝ稟されたり。然ても貴方の辭せらるゝか心を定めて回答あれと想ひの隨に窘むれば、正直の大に鬼貽れ丈慮背に汗流して辛うじて陳するやう然承れたいと恐懼し違勅違証とあるうへに再遍も再々遍も姪女を稟諭とべし。管領家へ這由と宜く懇み稟せ也。但し姪女が強情なる竟に通るゝ所なくバ怎様の緯を稟し出んも料りがたし寔に常感至極せりとて慮のさ歎息したりしかば、就盛やうやく面を和らげ然らば承諾せられしおん請ありし趣の在下解道稟上てん開の安心めさるべし。然而恚いふものから寔に賢姪女の義烈驍勇智謀幻術兼備したれば、容易く納得せらるまじ貴方の御苦勞査入たり然れども上の御意の畢

竟貴方の姪女あれはと思召たる而已にして。然る紛雜き情由まで、知食べきやうもなし。然る
 と推て過辭せられなば、必御氣色悪くして在下までも御不審を被る事も有べけれ。バ克々謀畧
 を懸して左にも右にも令姪女の許諾あるやうに料理れよ不肖なれども在下も共に商量に預
 るべけれ。先はや那里へおん旨を傳へ怎樣にいのるゝやらん回答を聞尋思もあらんと好意
 わりげに私語の正直聊想回してさらば直に八九へ赴き姪女におん旨を傳ふべし。倘左右と辭
 みなバ貴老のれん指揮を乞ふ縁あらん。萬事一味地憑み稟すと繰返し措措て馬を急めて出行
 けり再説姑摩姫の前番如意寶珠院の上境の路次にて奸人どもの商量りて畧奪んとしてける
 を快くも猜して奇計を設け幸く虎口と脱れ回れば復一郎安次も遊佐の城より回りて居忙し
 く出迎へて轎子の見えぬと訝り問へば姑摩姫の徐に便室よ入て安次と垣衣とを身造に近
 音有し次第を語るまど安次思はず拳を握り開ハ安からぬ縁に候。按ふ持水就盛們前般の遺
 恨を挿み豪奪せんと謀りしならん在下も今日遊佐の城の役所へ参り候ひしに、養侍に等せ措
 て公用繁多なればとて就盛ぬし、用でも來ぞ一响餘安閑と時刻を移したりし。後、田騨九郎
 とかいふ男を出して這里の莊院の田島の多寄宅地の來由。また寶珠院の智正禪尼に御所縁の

有し事なと尋問候ひしほどに在下答へて稟に、智正禪尼の主人の姑也。此縁故をもて幼少の
 時、那里にて成長ぬ又莊院と田園との在下が父隅谷維盈主君を歿育せん爲に、當時室町家の
 御恩をもて買取たるにて、其折の法券照据の文書在り。貢納の村長がいふまに、相渡與し候
 へば、他を喚て問るべしと稟て回り候ひぬ。按に是程の縁を以て在下を招くべきにも、非ず查せ
 る所就盛ぬし、件の机密に關りて在下、おん伴當に立せしとて招きて隙取せたるに、ぞあら
 ん。今日より後の在下が、おん眼隨仕まつらば、怎里へも出させ給ふなど、或は怒り、或は歎きて
 悄々地々諒れ、バ姑摩姫听て、うも領き備が明查些も錯り、就盛も持永に荷贖して、備を喚せ
 るに、こそ儘道他們が謀らんとすとも、怎程の事か有べきなれども、現小心に及となければ、爾後
 の何方へも、耳外、用捨すべき也。然れども、他們も亦、這儘にして止べきならぬ。バ又術を換て二
 遍三遍も謀んとこそ、較計あらめ、随分内外も心を配りて、脱落さやうに爲べき也。時に臨みて
 變に應るる籌策の幾個も、あらん。聽くな物を想ひとと、駭く色なき形容に、安次、更なり。垣衣も
 开明查に感服して、萬神々しく、わたらせ給へば、後安くの候ものから、執念崇る奸人の多有を亦
 怎にせん。心の暨ひ候はんほど、随分小心仕らんと、言稟して、退さける。然れば復一郎安次、垣

衣と商量て内外の出入よ心を配り農夫等が怠惰を禁めつゝ些の由断もせざりし。或日楠正直が俱當夥多運率て不慮來にけれ。安次則姑摩姫に告て例の書院へ迎へ入れ。姑摩姫も衣服を更め出て年首の賀儀を演互の口誼竟りけれ。正直の貌を改め今日來る絆別義に非ず。持永管領に密訴やしけん。室町殿の御誼とて遊佐の城へ在下を招き箇様々々に道れたりとて就盛が傳へし旨を脱漏もなく説出して。既へ急る上から。在下とてても脱るゝに路なく再遍這首に來れる。和女郎が胸中を查せざる。よあらね。寔に止絆と得され。也這上の理を非に曲て御誼に従ひ奉るべし。噤噤に坐す上皇の恩勅とあるから。父祖に對して遠訓に戻るともいふべから。若又和女郎が猶悟らず。強て推辞て從ひせ。連勅違誼の罪とせられて不測の禍害興るべく。恚いふ正直が身上の發危。首に量難かり。然れば和女郎が與而已ならず。在下一家を助るに。想ひて御稟せらるべし。と他のうへ。又自らへも。季交への。諭し貌なる語を。折て姑摩姫の想ひを。佛然とせし。色を。稍咳嗽に。紛らして。肚裏に。惟ふやう。さて。持永のみならず。滿家就盛商量して。叔父を。嚇して。前愆と。伺も。遂んと。するに。こそ。想へば。些とも。愧ら。はず。面を。端して。靜に。道やう。想ひ。保。さ。く。妾。が。う。へ。を。室町將軍のみ。あら。ず。噤噤。坐。す。太。上。皇。さ。へ。大。御。心。に。懸。さ。

せ給ひて叔父君に令て持永と婚姻を勸給ふ。とか最も恐惶さ辱さ。數成ぬ身に餘たれば。快御稟を申す。可なれ。聊存る仔細も在。是非に及。ず。固。辞。し。奉。る。も。候。遣。旨。を。以。て。然。る。べ。く。仰。上。ら。れ。賜。る。べ。し。任。地。違。勅。違。誼。の。罪。と。て。甚。麼。様。も。令。屬。ら。る。ゝ。と。も。是。非。に。及。ば。さ。る。次。弟。辞。す。べ。き。所。も。無。候。と。絆。も。無。げ。に。道。放。り。正。直。の。喘。息。を。衝。き。雲。時。困。て。忙。然。た。り。し。を。惟。回。し。て。又。言。や。う。そ。の。道。る。絆。乍。ら。普。通。の。通。辞。と。云。べ。き。の。み。然。り。か。り。に。稟。上。難。し。和。女。郎。の。公。界。の。形。勢。を。知。ね。ば。恚。一。昧。地。に。云。成。め。ど。如。是。嚴。重。な。る。勅。誼。御。誼。を。恚。と。陳。さ。る。道。理。も。な。く。情。に。任。て。固。辞。す。と。バ。かり。稟。上。可。様。も。な。し。和。女。郎。が。恚。も。道。ん。と。の。在。下。の。原。是。知。バ。道。媒。始。の。一。晌。も。推。辞。たり。し。に。就。盛。の。箇。様。々。々。に。道。れ。たり。然。れ。ば。恚。の。解。説。も。無。て。の。恚。で。回。去。べ。き。竟。想。て。も。看。ら。る。べ。き。以。前。南。北。兩。朝。と。立。も。別。し。御。時。成。ば。さ。る。事。も。有。可。れ。と。既。に。御。和。議。整。ひ。て。太。上。皇。の。今。上。の。御。父。君。と。御。坐。す。其。政。令。を。主。宰。ら。る。室。町。殿。の。命。成。を。和。女。郎。一。己。の。了。簡。も。て。然。無。愛。の。申。難。か。り。曲。て。承。允。せ。ら。れ。な。ば。三。方。四。方。平。穩。に。事。濟。可。物。成。ば。再。三。再。四。尋。思。し。て。見。ら。れ。よ。か。し。と。諄。々。し。言。バ。姑。摩。姫。莞。爾。と。笑。ひ。淡。々。女。兒。で。侍。ば。公。界。の。事。の。知。せ。侍。と。計。の。事。の。を。さ。く。も。義。理。も。辨。候。へ。バ。最。初。よ。り。仔。細。を。稟。て。推。辞。の。難。く。も。侍。ね。と。扱。ハ。女。兒。の。人。惡。氣。な。る。議。論。に。亘。り。且。の。亦。至。尊。の。恩。

命に對し奉りて言の過るん恐懼もあれば特地理さず候ひしなり。されども然りかりま宣ひ
 仔細を述ざる事を得せ叔父君のふん前にて最も無禮くの候へども意を静めて所給へ抑今番
 婚姻の一條を太上天皇の恩救と稟さるゝ事妾の一切意得難し開の惟うても看給へかし任備
 太上天皇父祖三世の忠功を思看にもあれ。當今嵯峨へ御隠遷のうへにて南朝忠臣の後を立給ふ
 事を室町家へ仰出さるべしや除非又仰出されたりとも義持決して從ひるべからず。開故如何
 と推ても看給へ。往明徳中御和親の時さしも誓書に載られたる御兩統交支御代を知倉へは御
 契約すら義持の拒まれて。今に立太子のおん沙汰もなきに江湖上の風聞に伏見宮を取立て
 實位を讓せ給ひん事。近きに有りとか稟とあるその虚説か知侍れ。太上天皇の勅命を聊の事
 までも辭せられぬ。義持の意ならば是等の重き御契約を打も措ず。快やく料理するべき該
 あるに開をバ除て女子一個が婚姻の絆を左や右や提斯ること心得ぬ。されば是に別仔
 細の必あるべき事なりかし。任地を左まされ右もあれ。假にも勅諭とあるうへの賤微き身もて
 對捍して所志をいふべくはあらねども。開の事からこそ依め今にもあれ御受禪の御誓約の
 違ひなば上皇必御憤ありて。舊好の盟を召と事あらん。歎當り妾の室町殿の家隸たる。畠山持永

が妻といひい怎れに向てか節操を立ん父祖の遺訓に乖きたる。千悔の其益なく。亂離の人とな
 らまく而已。蓋先代のおん時に肩を比べし足利家の家臣が妻にあらん事。好しくも侍らねど。
 も御前約毫も錯りずして。小倉宮の大御代と成る事。あらん開時に。時と勢ひとに因て。只麼家
 系といふべくもあらず。楠畠山の怨讐の畢竟忠義の與なりき。といふ利解も。開首に與らん歎。這
 ひ今にして議すべきに非也。當時のさまにて。楠家の舊忠を賞せられんと。ならば甲斐無女子を
 立られ。とも叔父君正しく坐せ。バ畠山が河内の守護を召放たれて。叔父君に一圓に賜ふべき
 に。さのあくして。叔父君の結句采地を削られ給ひ。更に姪家。畠山が所領を分ちて。當郡の内よ
 て。儘の地を賜へんと。御誰とも覺は候はず。さて又禮記の文に據て。我父没し給ひし上。叔父
 君を父として。其命を聞て。嫁せよと。あるも。奴家の意得難く。侍り稟。その憚る事ながら。祖父頭
 殿。左馬頭正。足利氏に降參し給ひし事。太刀折れ勢究りし故のみにも。非ず。深き御慮。おのしけ
 る御事。と承れど。正しく功を遂給ひ。病て。薨給へりし。那周公が。恐懼の。日王。芥が。誦讀しけ
 る時。死バといひし。白居易が。詔に等しく。成果て。家の汚名の。削りがたし。是故を以て。伯父。勝も父
 も。忠義の二字に。思代て。父に。弓曳き。及と交て。互に。絶交せられたり。おん身の。當時人質として。北

山殿の傍近く召使のれ給ひしかば道頭の情由を知せや在しし竟に足利家の眠近と做て惣志
 の在さず然る故よ今まで正しく親族の間なれども猶疎々しかりつるを過し頃室町にて得
 難き命を助られたる其時よりおん身を謀られ萬事後見と憑むべき由護持のいられければ御
 前約の事十分に通させ給ひの間ながら當時天下の權柄を執察する、將軍家の太上皇の恩
 勅といゆる、儘に前義を棄て屈て和議に、儘ひし也恚れば這はた御受禪の事すむ迄、詭意
 なりともおん身の猶子にせられん事、御免を被るべく想ひ侍り是私の事に非ず父祖尊靈の
 御遺訓おられん身を侮るとな所給ひそ次に去秋強盜們が夜偷の時に紛失せし當家の重寶
 錦の御旗菊水の旗巳下の物を誘引出にせられんと満家のいはる、天下の政刑を司りて
 理非を礼すべき管領の詞どもおほはる奇怪也那夜艾強人が件の東西を盗み出して拿去たる
 事分明にて當家の重寶も究まらば急に返賜ふべきにさへなくして一言の穿鑿にも及ばず開
 儘にして没収られし、是怎なる道理ぞや横計那御旗に疑似ありども開縁故を明かに此方へ
 告て道理なくば没官せらる、事も有らん歎さる斷なく徒に室町家よか管領家にか讒ねど藏
 し措て月を経るまで沙汰もなく今更に拿出して婚姻の目錄に載んとあるこそ傍和けれ、只一

遍の穿鑿もなく緣由を藏主へ告られぬ、那御旗は尊かれ事、一箇の贖物也、贖物を以て
 更に藏主へ佳禮の信に音物にせられんと、沙汰を限りし管領の料理とこそ道べけれ、法度
 一箇の輿に曲ぬを君自ら取りて、恚地に向てか民を治ん義持も聞識ながら管領の稟すまに
 下賜ひし事ならば君自ら法度を敗る比類とや、いづらん説ても著く那御旗の當家相
 傳の重寶おられ、身に家にも換がたく、可憐しき事、際限もあらねど然有とて道の儘あらで、這
 身も受べき所謂の志し、只盜賊が掠奪しを室町殿の更奪ひて、奪取されたる東西とせんのみ争
 か重寶欲ければとて其故と以て身を穢し名を腐とべき事のあらん、這等の由を脱もなく、四り
 て復命給へ強て勤め給ふとあらば、前番にも既稟し如く、おん眼前にて頭髻を截尼法師に成
 べきの、自然でも猶許されば、及に伏て父祖の君へ、黃泉にて分解し侍るべしと、言語撻まぬ、烈
 女の辨論舌疾から、運からず、冤氣を含みて演ければ、正直理義に逼られて、默然として、姑且の
 詔と仰て居たりしか、慚愧たる頭をやらやく、擡げ和女がいふ所も、其理あれど、今も成て、豈
 べからず、吾下も父祖三代の忠勤を想ひぬに、あらねども、故頭殿北朝へ、一旦、飯降し給ひし時、在
 下の未幼弱なりしを、質として、室町殿へ、参せられたる故を以て、詳々、緯の知らざれど、室町殿在



下を他事なく召使ひれしか。在下も亦異心を存せざ。年々忠を盡さんと想へり。然るに聖徳院殿遷逝のをり。御座の頭は奇異しき征矢あり。其に冤氣を復す山の和歌を彫たりしとぞ。在下の看たる事だに。なれば。那御座遷りの外様の入べき事に。非れば。彼此密に穿鑿ありしに。朝の餘孽なれば。とて。先在下を忌嫌。終は當將軍家の御前を遠放られたるうへに。采地をさへ削られたり。されども。照據なき事あれば。御狐疑も解たるあるべし。嚮に和女郎と救免の時。在下をも免許ありて。加恩の地をも賜ひたれば。左右なき御恩と受戴きて。忠義を盡さん事を思へり。然れば。和女郎に思ふ。とぞ。辭をべき事に。いなりぬ。さも。太上天皇の勅詔を固辭奉る程なら。嚮に室町殿にして。一千金を賜ひし。も。全足利家の政學なるに。其をば。辭せず。賜りて。今番婚姻の一條を。ば。怎か強面く辭し奉ると。道せも。果は姑摩姫の容貌を乞と。改りて。其の口を。さる事ながら。那時の一千金。の。艸々にも。われ。室町殿を。刺んとしたる志を。忠孝として。慙ませ給ふ。とありし。勅命なるに。父祖の忠義と。奴家が。孤獨を。思ませ給ふ。とある故を。以て。遁る。道なく。拜領したり。今宵。其の。等しからず。御誓約の。御受禪も。近きに。あらんと。いふ。を。り。から。事。の。黒白も。定らぬ。父祖累代の。怨敵たる。畠山と。縁を。結と。仰らる。院宣の。憚ながら。おん。僭事。敷除。非。南朝の。義也。

ら。せ。とも。君に。大。じ。き。おん。僭事。の。御。坐。ま。さ。ば。几。番。も。念。直。さ。せ。給。は。ん。や。う。に。御。諷。諫。を。も。察。上。げ。さ。て。も。猶。聞。食。容。ら。れ。ず。の。死。を。以。て。争。ひ。奉。る。が。忠。臣。の。道。と。い。は。ば。さ。ず。や。出。や。恠。る。おん。金。の。君。の。御。本。意。を。ら。さ。る。もの。を。室。町。殿。の。他。人。の。忠。義。を。押。て。齋。併。に。倣。せ。ら。る。は。是。亦。人。君。の。道。と。い。は。ば。お。す。所。詮。水。炭。薪。蕪。の。差。別。も。なく。強。取。に。院。宣。御。詔。と。宣。ふ。とも。上。の。御。與。に。も。宜。か。ら。ず。父。祖。の。志。な。ら。ぬ。事。は。從。ひ。奉。る。べ。く。の。非。道。義。を。尋。念。し。給。へ。か。し。と。念。慮。の。隨。に。背。慙。せ。ば。正。直。再。遍。説。べ。さ。や。う。なく。黄。蘗。を。紙。り。し。啞。兒。の。一。般。く。頭。を。垂。て。惘。然。と。困。し。果。て。ど。居。たり。ける。這。回。猶。も。事。長。け。れ。と。楮。數。に。定。限。あ。れ。ば。卷。を。換。て。次。下。の。回。第。四。十。三。回。の。首。は。分。解。る。を。看。て。識。べ。し。

開卷奇驚俠客傳第五集卷之一終

第四十三回

假に婚姻を諾して。寶篋中に復る。巧に智辯を揮ひて。女俠叔父を窘む。再説楠正直の姑摩姫を論破せられて。再遍説べし。義もなく。頭を垂て。在ける。が。肚。裏。に。想。へ。ら。く。

恣て一事の做たることとて遊佐に此旨いひたりとも免ざるべき事にもあらず然有とて姑摩
 姫が爲體諸なふ氣色の些もあければ進退此首に谷りつ現家族に役せらるれば意外の恥辱わ
 り如今姑摩姫が道りし如く我家の是父祖三世南朝に忠を盡ししは父が一旦北朝へ降り給ひ
 し當下より如是物氣なく衰へたるを念へば有繋に真慚かしくて類に嗟嘆したりしが智もな
 く勇もなき老實人の心胸小くも一味地に想回して覺悟を究め恣いふうへの是非に及ばず道
 れし由を脱もなく復命人の易けれども然有とて免ざるべくも非幸慙に違証の罪を被らんよ
 り正直此首に自殺して室町殿へ解説をせんより外に爲術もなし天ある哉といふまゝに腰の
 小刀を拔出し衣領推甘げ座を組て肚を截んとしたりしを姑摩姫の願つゝ駭かず聞の外に畏
 みて伺候したりし安次に屹と目配して禁めよと願もて指揮してければ安次立て仕しく己が
 脇差の小刀をば其頭に振棄上前寄り刀拿たる正直が右の脇を取扯て必急過り給ふなと推禁
 るを正直の所老頭と打掉てこの尾籠也後一即其首放たせやと焦燥つを姑摩姫徐に聲係てそ
 の御短慮と申すべし奴家が回答をも申上ず其儘に御生害ありとてもおん身の功といふべ
 からず一旦の義理をば述侍れども然ばかり思欲す事ならば猶商量も候べし刀と取め給はず

やといへば安次意と得て刀を強て動放ち鞘曳密て儘と収め傍側に措て伺ひひたり正直の居
 直りてさの婚姻を承允するやと道に姫摩姫點頭て室町殿への解説に自害せんとまで謂ひい
 尚爲術も侍るべしされども親事の一件の男女生涯の大禮なれば父母の命に違ひて治定る締
 に侍るを奴家の父もなく母もなしさて執人の命を聴てか這一條を全うせん道義を思惟給へ
 かし那禮記の文をもて叔父を父にと謂へどもおん身の我父と志同じからねば憚あり且媒
 妁を管り給へば那本文にも據回からんと道に正直面を和らげ開け然る道理もあらめども締
 よの權といふ事あり變ふ處しての權を以て行ふも亦尋常の理也既に和女郎の父母あければ
 命を听べき人もなしされば義絶の間なれども上皇よりも柳營よりも在下を父とせよと令下
 されたる上の所謂權は處するにて強ち非禮と謂べからず又媒妁の締のしも在下の執行んも
 締を闕たる事なれば遊佐に譲りて期に暨ばく那人を以て月下翁とすべし屈て這意に任され
 なば正直一家再生の恩人にも一般からんと只管勘解して止ざれば姑摩姫聊沉吟じて奴家の女
 見の事なれば萬愚にしてさる締までを知べきに侍らねば縦計絶交の叔父たりとも父親に當
 りて做る事あらば隨意料理ひ給へかしと道に正直大に愕嘆ひさらば承諾せられしな恚事の

歡喜か是に及ん。さらば這由遊佐へ参りて言稟をまうすべし。那里にもさぞな大慶せん。开に就て一議あり和女郎の義烈勇猛にて上命をもとさく。肩とせせ。是故に若婚姻成就すとも期に暨て阻斷する事あらんも料り回し。されば开照据の與に異國後世の禮あれ。庚帖八字を寫すべきよし。就盛の傳へたり。這是非常の才女なれば。亦是非常の禮を以て。後の狐疑を解んとて也。既納待ありしうへ。此些の事をいふべくもあらね。權家の豪囑辭するに縁なし。希ひくの一筆寫て。那が心地を安くせよ。さて近き程に東西把納めて。先在下が宿所へ移り。然して準備をべき也。此一條の在下が總來一身に關りたれば。怎まれ。怎まれ。道るまに。判妻と商量りて奔走せんと。道ば姑摩姫微笑て。れん宿所へ参らん事。安き程の緯ながら。さりとして這莊院も久しく住馴候へ。所従の奴僕も。落着も。猛可に。料らひ難し。這誼の允させ給ふべし。さて又庚帖八字の緯。我邦の故實の所も。傳へぬ事なるを。孰が引出て。今番の婚儀に行んといへる。ならん一切心得。回れども。推辭まうさば云云に。又紛紜く。聞れん。敷寫んに難き事も。あらぬ。那庚帖の作法あり。先兩尺の紅緞子に金字に製して。其上面に釘て。差す例とし。聞りさやうの東西まで準備ある。敷と問れて。正直原來も。這頭の委曲を知べき。あらねば。开のとばかり。隱口の儘

に頼を拵て。道やう。今日遊佐より直に來れば。さる東西まで。齎せず。翌日快贈來らんからに。必八字を寫て。たべといふに。姑摩姫回答て。いふやう。叔父君萬事父として。準備し給ふ事なれば。事毎に奴家が意を問給ふべき事。に非せ。されば。件の庚帖も。這まで。おこせ給ふ。要あり。金字の工人に。誂屬て。製するよし。唐土にも。恁とる。緯と。所見たれば。自筆に。寫でもよ。かんめり。八字との生れし。本命の年月日時の支干にて。四柱八箇の文字なれば。丁丑丁未辛未巳丑の八箇の文字を。製せ給へ。といへ。正直一議。及ばせ。さる緯にて。好きならば。いへる。儘に。製作せん。と。道つ。矢立の筆を。把出て。質問し。ながら。件の八字と。又其式を。扇の裏面に。委く。記認め。措て。傍邊の刀。搔把て。稍身を。起して。言やう。愚老が。勞の。甲斐ありて。頼の。承允。更是。祝着の。至也。さらば。いよく。那里へ。告て。近き程に。良辰を。擇びて。儀式を行ふべし。努々。違變な。せられ。そ。語を。番ひ。安次に。勞を。謝し。つ。且。の。羞且。の。喜び。勇み。つ。伴當等を。催促して。河備の。宿所へ。回り。けり。安次。これ。を。玄關。まで。看遣り。果て。忙しく。垣衣を。卒て。姑摩姫の前。参りて。稟ける。河備。さまの。疎忽。ある。姫。うへの。御心。を。知。せ。給。ぬ。に。あら。ぬ。もの。を。怎に。權貴の。囑なり。と。命に。換て。愉快。ら。ぬ。御親。事を。苦勸。給。ふ。只是。柔弱の。かん。性質。ゆ。か。甚。以て。所謂。なし。开。今。更に。論。べき。なら。ぬ。と。姫。う。

へん又如何して此婚姻を許諾給へる預てのおん氣質に肖もやらせ最おん心軟きやうに憚り
 ながら存るへ尙僻事に以敷寔に許して赤坂へ嫁ぎ給ふか如何ぞや別に仔細も以敷願ふの示し
 給へかしと怨むる如く問繫れば垣衣も亦語と繼て奴家もおん次席に立懸れて河備さまのお
 ん話説を陰ながら漏承り何に成ゆ事にかと心を冷して侍りよきと念ひせ大息を吐ければ
 姑摩姫の微笑て今又始ぬ備二人が心盡然ぞ有けんされども痛くお物を想ひて吾儕なりと
 て分別もあく漫に承諾べき事かゝ恨のあれども叔父君の愚直に怯弱さおん本性にて權門の
 強囑と固辞かね忍設に稟て來ませるを念慮の儘に宥めれば妾が論し絳由を權ある人に對
 ひての分解よしも無ししまゝに想通りて忽ち自殺せんといひれしに虚嚇鬼にあらず實情
 かんめり這の心小き人のうへに往々にあるべき該也除非父君と絶交の叔父の命を殞さる
 ればとて正成卿より累世の忠義の道を外にして非義の義に隨順ひ巨かり然のありながら
 眼前に妾が與に死んどいひるゝ叔父を放棄て殺しもせべ開の満家們が希ふ處にて開を妾が
 悪名として謀れる事ゝ必あらんと思惟ば靈時推禁めて陽に那意に任せしに後に爲術のわれ
 ば也案ふに今番の婚姻を太上皇の院宜といひ又足利家の内命也などいへども開の搦鬼にて

満家か又就盛が拙策に疑ひまし義持何に暗弱なりとも即今武士の棟梁として憚る胡亂の内
 命を下へくにもあらざるに満家も亦主の前にて冤家の裔を見孫が引婦に配隔せんとの議と
 べきに非を那庚帖の緯までを引出したるを以て按へば生博識の僧か儒か交りて籌策する
 べしされば這首にも開籌策に就て一箇の奇計を構へ箇様々に料らひ那重代の御旗を拿回
 そべき事もあらん又叔父君も死を免れて僥倖となる緯もあるべし計縦満家持永等が怨み怒
 る事ありとも主に訴訟んやうもなければ更に爲方便なかるべし努々秘よと低語ば安次聞て
 頼を拵念のを笑を含みつゝ這の珍奇しき御籌策也現姫うへの神机妙算鬼神も克知る事能
 じ驚入て候也何生にしても御深慮のあるべき事との存じながら甚薄情き河備さまのおん苦
 勸の腹立しさに料らず不敬を稟出て畏入候ひぬ但今般の緯濟とも満家等が懲せまに執念く
 崇る事あらば權威を奮ひて如様の仇を做んも料り難し這証の奈何候べきといへば姑摩姫嗟
 嘆して妾も亦開頭の緯を念ざるにぬらねども然有とて又如何のせん他術を變て謀るあらば
 我も亦差を換て做べきたけの防禦べしさりとも縁故なきに軍兵を搖かし推寄來りて結果を
 ほどの緯あるべからせ任地さる事ありとも其の其時に應じて何ほども方便あるべし若

天命の盡たらば甚麼ある補助ありとて遁るゝに道ありし命一箇を忠孝よ殺して仁義を全
くせん而已今より接ざる事かいと詞涼しく説諭せば安次險不慚愧しつ宣ふ處寔に然なり唯
左も右も天命に任せて義理を失ひぬが肝要にこそ候ゆめさりとて身づから禍害を醸すべき
にもいひねば我々努力の暨んほどの心を配り候ゆんといひつゝ退き出にけり不題再説正直
の案内に姑摩姫が親事の事を會得ければ大に歡び奥頭つゝ當日の既に晩景あれば先我宿所
河備に回り木石苦子を喚出し今日就盛に吩咐し事より八九の莊院に到りし事まで恚様々々
に詳く報て是の這持永が曩に事の就ざりしを本意なく念ひて父親に密訴し上命を借て素懷
を遂んと企たるに疑念なしとの惟へて勿々にも内証とあるからに只御言葉稟して那裡へ
去たるものから那姑摩姫が氣稟にていよも納得のそまじと思ひて酷く辛勞したりしに左や
ら右やら事就て吩咐し儘に八字をも強て語しめたりければ既に心易きに似たり然りあれど
も這後とて萬事ハ我等父に倣へ準備せよとの命あるに又甚麼事をか説出たらん胸易から
ずの想へども這の總來我一家の大事に及ぶべきあれが概畧の他がいふ儘にして違變をい
せぬやうにせざば不測の禍災も出來つべしされば衣服調度の打點も看苦しからを調へる

管領の所思も想かるべし此首の事ハ備等母子に打任すれば甚麼にまれ意を用ひて恰好に沙
汰して誂へ風給へ足ぬ東西ハ風爐八郎に吩咐して買せし明日の詰朝に遊佐許去て尙省示
譚に及ぶべし若風浪なく事整ハ管領父子の權勢もて官途の首尾も宜しからん解道爲給へ
ど己が躬の後の榮華も拿交て私語告れば木石苦子の所つゝ想の吐息を吻きそり又御苦勞
の事に侍り衣裳の事ハ意得侍れど那人の氣に慚ん垂いと覺束なくこそ侍れ其の左も右も
あるべけれど平生に任情任性なる人の猛可屈て會得られし上の御誑の故なるべけれど
危殆きものに侍らずや尙省小心し給へと信だちて諫れば正直類に打領さ其の心得たり心得
たり恚れども今回の箇様々々の事により他が生來の支干の八字を照据に把て回りたればよ
も違約に暨ぶまじとて那扇子を示せければ二人ハ扇子を把擧て若さる事ハ侍らば心安堵
侍りにきと口にいへど心裏に猶も危殆く想ひけり恚而正直ハ其詰朝遊佐の城へ赴きて
就盛に對面し昨日八九へ去刻りて姑摩姫に苦勸したる一五一十を説示して案に錯ハす姪女
が偏氣箇様々々稟截て一切隨順ざりければ在下大に困じ果唯一事の倣と事もなく他が稟
し説の儘に上へ對して復すべくもあらず詮方なくて覺期を究め自裁して分解をせんと

まで做たりしかば姪女もやうく心解て先かん稟の致したりさるからに那庚帖の辞をしも
 稟出て試みしに恁々と稟す故本命ばかりを听得回りぬ。但在下が宅へ曳移んといふ事の一
 條ばかりの期に暨ふまで御免を被るべく稟たり。これをも強てと稟あは他亦必異説を説ん歟。
 這の畢竟小事なれば先喪老に伺ひて後に爲方便もあらんとて。开任にして回りたりとて尙詳
 悉に報しかば就盛听て大に歡喜。上の御誕まわんなれば。かん稟あらん勿論ながら令姪女
 と心探にて。再三辞退もせられんか。案外に只一遍にて庚帖の事まで果されたる。貫所の御
 劬勞查入たり。這旨を以て管領父子に回報稟さば満足あらん。但那庚帖の令姪女の自筆に寫れ
 しかと問へば正直さればとよ目筆に寫けといひしかば。他の云々の作法あれば。在下方まで調
 ふべしとて支干ばかりを示したりといふに。就盛眉を擡り開。聊不審けれど。開り開にて省る
 べし。猶又序次の事もあらば。那名ばかりも令姪女の自筆を染て寫れん事を。哄誘して看られべ
 し。といふに正直詰ひて現に然ぞあらんと想ひたり。正直父道やうの姪女が難論いたし。中に
 在下を父親と做うへ。別に媒妁のあくて。べと稟し故にその期に致らば。貴老に商量して託せ
 んといへり。這の孰人にて。も宜さが如くあれと。原來他十分に在情を稟んか。御煩勞ながら期

に至らば。席に臨み指揮して。賜るべくやと伺へば。就盛も領きて。愚老當國の守護代されば。私
 の縁譚も關るべくもあらぬ。他ならぬ管領家の婚姻にて。且御内証の趣もあれば。不肖ながら
 媒妁の事ばかりの勉むべし。任教彼此の所要をも。儀持媒鳥に吩咐て料理するに。ぞ有べけれ
 ば。萬事の他也。譲り給へといふに。正直意を得て。當日の宿所へ回りけり。就盛はうちも。措き儀持
 媒鳥を喚出して。正直が説し由を委く示して。持永が赤坂の館へ。差し又。譽田鷲九郎を京へ登せ
 て。滿家にも事恁々と報たりけり。持永は是を听て。天へも上心地して。怡悦望外に出しかば。先既
 泰勝等も情由を告て。媒鳥が勞を太く賞し。酒饌を出せて。前祝の酒を。只管打吞つ。那姑摩姫が
 評品の。もに。其日の。莫て翌日の。持永親就盛が城にいゆきて。勞を謝し。又赤坂に迎へ来て。大に酒
 宴の筵を開。就盛を致待つ。猶彼此の進退を商量等しつ。日を千秋の念慮にて。滿家の回答を
 听良辰を撰て。其程の儀を行んと。歡勇ぬ。滿家も亦。譽九郎に縁譚。整ひたる由を。听て。原來預の辭
 議の如く。姑摩姫既に。罷り罷り。心易と歡喜つ。就盛持永に。消息して。萬端其地。まで。脱落なく。料
 理べしとて。許けれ。就盛持永と。商議て。本月二十日を。最上の吉日と。撰定め。采納の物件を。正直
 が。河備の館へ。贈去んと。專其準備を。なし。泰勝媒鳥等に。分付て。先其打點を。做しむ。に。持永只麼

氣を張て締治定りたる五荷七種に。尙更締を増補へ。黄金白銀堆積積上しても猶飽足ねば。親ら
 目録の指揮をし。東西一箇つゝ。檢監しつ中。よも楠家の重寶たる錦の御旗。巳下の東西の舊二重
 箱なる上に。又鳥桐にて外重の箱を。最も花麗よ遣せて。恭しく臺に載せ。煤鳥に懸九郎を相副て。
 奴隸に對の皂被を着せ。名跟隨苛めし。して差さんどを構へける。正直の庚帖を分付し。儘に製
 せんど。工人を召て。件の金字を急忙しく誂へ。囑一日も疾くと捉して。辛うじて整ひ去を。自身
 よ携へて。八九へ去き。姑摩姫に對面して。名所ばかりの自筆に寫て。就盛がいへるよしを。諄回
 して。勤解ければ。姑摩姫。鑿時沈吟して。さまで。に宣ふ事ならば。還來の寫侍らんとて。こまど墨黒
 に寫たりければ。正直大に歡喜て。就直にこれを示せ。就て金字に製しつ。別に摺引出の料にと
 て。金装の大刀一口に。札好き。鏝一傾を。目録の外に。相具して。當日の來るを。等にけり。締の紛雜い
 ふべくも。あらず。新郎岳翁の兩家の。さら也。就盛も。只這件の事に。朝暮奔走したりけり。現室田家
 の。權臣なる。畠山家の。嫁迎され。ば。恚も有べき。該是ながら。又持永が。好色の意に。諂ふ。就盛們が。事
 を。好きて。拿榮と。阿諛面徒の。小人の。情態。這里。よ。想像。し。問話。休憩。恚。而。廿日の。早天に。赤坂。より
 使者と。出して。河備の。館。よ。采級。の。物件。を。贈來。れば。湯淺。敦義。これ。を。稟。採。正直に。披。覽。を。れば。正直



使者に對面して式の如く襷を設け引出物を與ふれば使者の賀を演恩を謝し赤坂の館へ回りたり程もあらせず正直の教義に分付て件の物件を又更に八九の莊院へ差すに教義禮服を粧ひて伴當夥多進物臺を吊せて八九へ行到り安次を喚出て今日しも吉辰あるを以て赤阪殿より采納を贈越れたるにより就ち小可に命せられて直に昇せて参たり這由稟上らるべしとて恭しく懷中より目錄を投出て遞與しければ安次これを披覽したり姑摩姫の看完て安次の令説やう仰の趣承りぬされども今番の婚姻の叔父君よろづ父親として料理給ふ事なれば這等の東西も奴家が方に留措べきやうななし叔父君こそ彼此とおん費用も多かるべければ切てこれだに収め給ひて千の一箇も償ひ給へ但し當家の重寶たる錦の御旗菊水の旗祖先手澤の文書類の原是奴家が東西なれば這件ばかりの稟受てんその回帖の参らすべし這等の由を叔父君に宜く提擧稟をべしと言寡くいふ聲も隠々漏て听けり安次出て教義に右の次第を演説す當下教義道けるの开い宣ひとる事ながら這物件の増替より信の東西にて候へば枉て受収め給ふべしと主人尊々稟れたれば是非とも御受納あるやうに押て稟上られ道徳回らば在下が脱落也とて答められんいかでくといひければ安次再遍内に入て教義が旨を報

けるに姑摩姫重ねて道やうの風爐八郎がいふ所も一理ありて覺ゆれど這些の事の擗日に奴家自から叔父君も稟たる事ありて萬端父親の隨意なれば鎖細の儀まで細々と奴家に報給ふに及ばせと稟措参らせられたれば恚としいへ使者の脱落になるべし情由の更になじ大誼にこそと鷹揚にいへる儘に安次が又外に出て演ければ這うへへとて教義のさらば回りて其由稟さんおん重寶の是也とて件の箱を安次に遞與しにければ受拿て姑摩姫に披露せるを姑摩姫得と查看て故の如く蓋をさせ那外重なる島桐の箱ばかりを臺に載て既に重器の受拿ぬ此箱の回し稟す也復一箇回帖を一筆寫て遞與べしといへば安次意得て次に出つゝ認めて立出て風爐八郎の件の旨を言傳へ箱と回帖を遞與にぞ教義の眉を擧め這箱の這儘に這方に差措給ふべしこれさへ携へ回りなば甚麽とやらん不祥めきて必主公に叱らるべしと推返を安次も又推返していへる趣尤にて候へども知るゝ如く偏箱ある主人の氣質に候へば几番稟候とも決して受納致すまじ一旦回りに河備さまに稟上られ恚るべしといへば教義爲方なく疑念も這里に起れども暇を報て那箱を再伴當に扛荷らせ河備に回りて正直に箇様々々に候といへば正直案に相違し想難ての稟も措れず就て遊佐許去向ひて件の情由を話説が怎

にせましと商量すれば就盛もや、訝りて其の亦奇怪の事ども也然れども這些の小事を云々と論辨せば復もや事の障とあらん詮する所の興入を急に促すこそよかぬれ幸來月朔日の婚禮に最上の吉日としむいふなれば左馬殿は商議りて性急なれども準備を倣へし管領家への在下より達せば故障なかるべし互の混雜查しやれど事遅滞して違變あらば悔とも其甲斐なかるべし貴方は準備整へども對譚のうへの鹿漏といふべからず道旨を以て御令室にも娘婦君にも報られて快々打點せらるべしといへば正直異議に及ばず其の火急の義おれどもいへるゝ所も道理なれば随分料理まうとべし鹿漏の事の後々に補ふにぞ候はん宜く稟入らるべしと言稟して私第に回り木石苦子に這由を告肩に火の着く嫁娶打點に夜もをさく寝と寐ぬまで心を盡して營まつ次日の姑摩姫に事由を自ら報て諄回しつゝ期を約じ口を堅めて回りけり持永の就盛より火速にしたる趣を報れさせれば大に歡喜び獨漫に雀踊して細の事をば糺しも問せ月の桂の枝を折龍の領の珠を得たる心地せしかば只旦夕に泰勝等を急して嫁迎の日の役割をし興の受拿源與まで室町様の故實を調べ紋切形の試業をさせ或は又親迎の打粉の装束調度眼隨の形容よからんどの品定まで此彼となく論ひて烏帽子の當家

の左折狩衣の色は何よけん馬の鬃毛が眼に立て女の物來美麗しと看むいなく黒毛が厚絡の紅色に相應しかるべし鎗の例の片鎌が否ぞれにて片といふ字が禁句なれば十文字の對道具が撮合愛たくいんんさて仲當の凡名を豫て入へて事足せば遊佐に譲りて準備をさせよ眼隨の重役の差稠空の介が役なるぞと听て泰勝沉吟し透巡しつゝ回答るやう仰を背くにいひぬねと齋にも稟上たる如く小可の響持なれば面を露し馬に騎て晴がましきおん仲當の願ひしからず險々迷惑よといひせも果て持永の眼を睜り聲高やかにその空介甚麼とかいふ前番も既にいひたる如く這河内の采地にて我々が仲當と疎忽あらんや況や今番の多勢を率連家格を正してゆく行例に誰か敢て僻事せん其誼の心安かるべし倘开仇敵に撞見たれば追取稠て一人も漏さず結果なれば後日の憂を擲ひて枕の高さにあらせや心強く眼隨すべし和郎が在でり那此と事の不便の多かるらへに那偷看たる美婦人を我事成ての上からの和主が妻に得させでんかたゝ和主も親迎の仲當も外るゝ所謂のなむと窘められて血氣の壯夫有業に否ともいひ難てさらば仰に隨ひておん仲當も立しとて不測の變あらば必看棄給ふなを對へて承諾してければ尙云々と其程の準備を齊し急ぎけり恚間に正月も疾く過

去て二月朔日にありければ正直の姑摩姫を先我方に迎へんとて。晚より湯淺敦義に幾名の伴當を隸て新製りし轎子の金具稠く光るが如きを轎夫六名に擡せつゝ。専女の乗べき限階橋子薙刀蓋傘に至るまで花麗な粧ひて八九の莊院に差したるに雲時ありて敦義の奴隸一名を従へて着忙しく走回り正直に稟けるの仰に任せ莊院へ参り今宵移らせ給ふべき由を申入て候いしに隅屋復一郎立出て豫ての今宵参らんと約諾して候へども姑摩姫の方纔より猛可よ腹痛して候ゆゑ醫師に診察を乞たる處只是時氣に傷られて飲食留滞せしなれば雲時憩ひ候へり就て快くならんと稟さし候へども既にはや今宵の緯は候へり怎れにしても参がたかり平素にも恚る持病われれば快復次第道方より参るに候へんを稟すに依て案に相違しおほ左や右や稟たれども今宵出立るゝ氣色の見白す因ておん指揮を伺はん與伴當をバ那裡に殘し罷回て候といふに正直一驚と吃しそゝ又胸安からぬ緯也他若病病に假託て婚姻の期を延しなば遊佐より必我等を疑ひ等閑也なと譴責べきあり恚れども病氣といふを強て今宵迎んといひ又甚麼事をかいふなるべき道里にて物を想んより我自ら訪ひて強て他に對面し容體を窺ひたるうへ机に應じて料理あるべし備も参れど急忙しく馬に打騎伴當をも隨て敦義

バのりを跟へて驕々地に走り去き安次を喚出て姑摩姫の病氣を問ひ和主も既に知たる如く今宵の婚姻の私の事ならねば確手に病症をも看届されバ日を延す事も做がたし是山いひて是非とも對面せんと稟べし勿論病床の儘にして決して遠慮あるべからずといへば安次畏りて就て姑摩姫に報たりけん雲時して立出つゝ病中の誼に候へバ一室に請じ参らせんが却々無禮に聞へバを阻て拜請すべし道義を允し給へらばいさ道方へといひければ正直恚やか細事を問べきならん案内とせしといひて後に跟て去て見れば便室の紙門を左右に開かせ燈火も明々あらぬ籬を一重繋て在り其外面の小所に毛氈を二重鋪て正直が座を備け太やかある燧燭を燭臺二脚に照したれば内面の動靜の克も所看ねど女童三個ばかり右と左に僂居たる其中央なる蒸裘に姑摩姫の靠りて白綾なるべし襦をはより寝衣の儘にて在り候へども有繋に髪も蓬れたらずとして苦惱さ容もなく端然として在り候へば正直十分に着急つゝ且疑しき限りなければ座すると就て聲を掛て姪女今宵の病たりと恚ばかりの緯にかある既よ約せし日にしあれば大概の所勞ならん押して轎子に乗せんや我家まで遠くもあらぬに醫者の事宿所にて尙又心を用ゐなんいかたくと道ければ姑摩姫をもちうち咳きおもひ律あじ

叔父君の親ら訪せ給へんと、最も長く候へども、病中にて侍れば無禮の尤し給へかし、晩より持病の腹痛起りて、轎子にだま乗べくもわらね、今宵の得しも参らぬ也。縦計奴家が参らせども、御婚禮の妨になるべうも侍らず、就て快く成侍らば、快く参りて言祝稟さん、遅引のさる方に許させ給へといと、外々しく道ければ、正直大は驚駭さて、其の甚麼といふやらん、病體なれば爲術おけれと、疾々我等に報もせて、酷く心を摧せぬ、除非その左まれ右まれ、約せし入興の今宵なるに、和女郎が在らず、誰をか送らん、恚外々しくいふべき事かといへども、姑摩姫空惚して、其の宣へする事ながら、奴家の最初より、持永の妻にならんと、いひたる事なし、萬事儕が父親として計らひ給ふ、婚端なれば、苦子御寮こそ、今宵のうちよ入興し給ふ事と、れもへりざの侍らせやと、知老氣に空囁きて、道を听て、正直の面の色赤く成り、又青く成るまで、駭き怒りて物も言れず、呆るゝ事半响ばかり、睨まへ詰て在けるが、想はず、聲を振立て、原來和女郎の在下を、念慮の儘に欺許しな、恚れども、往日に將軍家の命を傳へて、事明々地に堅約したるに、其後も又采納にとて、錦の御旗已下の東西と、贈りたるを受し、非せや殊に、和女郎が生來の八字を、明し示し、かは、在下金字に、調へて、尙亦自筆に、和女郎が諱を、庚帖に、寫せて、贈りたり、道等の證據あるものを。

今更自から欺んやと、敦固猛く罵れば、姑摩姫吻と打笑ひて、御詫云云とのたまへども、管領への御内書とか、花押だに、なき東西を以て、恚でか寔と思ふべき、又我家の重寶の嚮に、夜稠の草賊等が、盜奪て、かん身の宿所へ、携去たるを、返されたる東西に、しあれば、道是舊主の受べき、理義なり、恚でかこれを音物とせん、道義の既も稟たり、其餘采納の目錄の、備が受納給ひしならずや、然らば、備の女兒御寮、苦子ぬしを、嫁し給ふべき也。さてまた、本命の八字の事、我日本に、聞も傳へぬ、非例の禮にて、あんなれば、公然として、議とべきに、非せ況や、奴家が本命八字を、持永に贈りし事、いなし、日外奴家が、寫たるの、苦子御寮の、代筆ありきといふ、よ正直いよく、怒りいへば、様々いひる、物か、和女郎が、自ら筆把て、こまを、開諱を、寫たるを、女兒が、代筆などいふ、いふ、抑、恚なる、強説ぞや、然れども、那八字の、今も、忘れぬ、應永四年丁丑の年にして、丁未の月辛未日の己丑の時といふ、和女郎が、生來の、稔月、あれ、例令、非例の禮にも、あれ、今更通れん、路いなしといふと、姑摩姫又打笑ひて、恚らば、苦子ぬしの、産れ給へる、月日を、幾時とか、想ひ給ふ、又奴家が、産れたる、月日も、知て、たのしき、試験にいひ、せ給へ、と、道は、正直眼を、睨りて、苦子が、産れし、同稔の、五月廿八日の、曉天の、八鼓なりき、開恚生して、忘るべき、又和女郎が、産れし、兄正元と、絶交にて、我

京洛に在ければ其時、克も知ぬ。後に阿兄に仕へたる侍某甲が我を慕ひて歸降したる事
 所たるに、僅に十月七日といへり。且その稔の十月の朔日、就ち玄猪にてありし、今も覺は
 たり。といふに、姑摩姫安次を喚立して、いふやうに、奴家が手筈に、應永四年の舊曆の有なるを
 快持出て、叔父君に令看まらせよ。といひければ、安次の氣毒貌、言棄しつゝ、曆本を把出、扇子
 に載て、恭しく正直が身邊に掛けば、姑摩姫再び道ける。諺に云、論より證據いざ其曆本を看給
 ひて、疑念を解し給ふべし。這年五月廿八日、小暑六月の節にして、即ち丁未の月也。また廿八日
 は、辛未の日にして、其曉天の八鼓、巳丑の時に當れり。又十月の壬子の月にして、七日の乙巳
 に當り、其朔日、巳亥よてのたまふ所の玄猪也。奴家の七日の且六鼓、生れたり。と、所侍に、聞れば、
 是巳卯の時なり。されば、奴家が本命の丁丑壬子乙巳卯にて、異なる緯を知給。且又奴家が寫
 たるの唯庚帖に、實名をそのたまふ儘に、苦子御寮の代筆せよとの事なるべし。とて、假字にて、と
 まと寫たるを、備のこまと讀誤りて、奴家が名としも、強給ふ。歎この備こそ、強説され、平假字のこ
 の巳字の尊にて、上の畫を結ぶ事なし。と、是止字の草書なれば、上の畫を外に結びて、原來別な
 る字あるを、奴家、恚で、かこまと寫へ、克々辨給ふべし。と、所正直いよく、着急て、他恚にし

て、俺女苦子が八字を讀たるならん。と、訝りながら、濫々に曆本を拿上、彼此と繰返しつゝ、看であ
 れ。と、現も、鏡の伊勢曆餅事としも、論れねば、直と呆れて、物をも得言ず。姑摩姫こそ、と、聲掛て、
 それ看給ひて、奴家が詞の偽詐ならぬの知給らん。恚れば、庚帖の八字も、責給ふとも、持永が
 妻とあるべき所謂のなしと、愛あくも、言斷て、従ふべく、所見ざりけり。

第四十四回

狼狼の岳翁漫に恩愛を售る
 痴情の新郎暗に燕石を抱く

當下正直膝立直し、太やかなる息を吻と接て、原來和女郎の在下を、父が義絶の弟ぞと、執念く怨
 みて、深くも、量り自滅させて、肛を差んと、想ひしにこそ有べからめ。さる怨讐の人と、識で、騙られ
 たるの愚昧なれ。と、恚まで、番ひし言語の結局を、舌長やかに、説講めたる、冤氣を思へ、即今、這裡
 に、和女郎を殺して、正直が肛、秋まで、との念へども、婦女を敵手に、結果さば、弓箭把る、躬の名を、腐
 さん、唯運命の極る所、是非、豈ば、ぬ次第なり。宿所に、飯り自裁して、室町、羅に、罪科を謝せん。さ
 ゐ、なから、這回の、婚姻、和女一名こそ、恚いふとも、管領も、知り、遊佐も、知り、世人も、亦、知れば、
 和女郎、いかほど、分譯、ととも、竟に、其身に、禍災、わらん、暇、稟す、と、氣色、ば、みて、四下、を、睨視、む、遺恨

の眼に泣水を浮めて衝上起り刀を把て去んとするを姑摩姫雲時と推扯り先等給へさばかり
 腹立給ふ緋に侍らす奴家ありとて些少の主意あてて叔父君に禍害を譲んや父と義絶の
 縁由を以て猶怨る歟とのたまへども既に南北兩朝の御合體のうへか唯一名ある叔父君
 と恚で執念く崇るべき徐々に座して奴家が言を聞て尙また尋念し給へ短慮の功を成難しと
 いへば正直やうやくに舊の席に就しかば姑摩姫の貌を端し稟すの畏懼ある事ながら備へ開
 性老實に在る故に満家就盛持永等が相議りて嚇しつ哄しつ駈役ひて奴家を茲に亡さん媒妁
 にととのおぼさずや抑今般の親事の満家就盛等が謀略か但し持永妾に繫想し豪奪せんと
 の企か詳悉にの知ねども前度禰を媒妁として説來せたる事ありし後奴家が母の上墳の路頭
 より奸賊を伏措て轎子を奪んとせしを快く猜して虎口を通れぬされば尙再懲せまに院宣詮意
 と詐りて儂を欺瞞さ威と以て逼り強て奴家と赤阪の居館へ入んと計りたるの必定好意に
 あらし恚るを虚々々の術に乗て那里へ去て恥辱に遇べ奴家一箇が縁由をもて父祖をも汚し
 就ては又叔父君の醜名をも世に露さん本意なきに云々と推辭しを儂の省も思量らで自害せ
 んとまで宣ひし勢ひ扯ひべくも非れば爲方なく陽に先許諾したる面色して儂の命を救ひ

しは併父に連る枝を折じと想へば也然のあれども一言も奴家が嫁て持永の妻よならんと
 鮮明に稟切たる事なきし道に管下の問答を思惟し給ひ明々ならん恚て登時技ふに備へ
 一向足利家の恩を畏み徳を慕ひて忠を盡さん事をのみ思ふとのたまふ其うへに管領父子の
 權威を羨む御心ありと讀たれば苦子御寮を持永の妻室とせし儂へ就ち管領と姪どち也れん
 與悪くも有べからずと思ひにければ奴家が代に苦子御寮を嫁し給へん様をこそ料理めと思
 ひたれども明々地にうちも出なば危殆みて左や右やのたまへんとて故意這期に逼ると等て
 さてこそ露顯し侍りしかれ是嚮に宣ひし所謂權は處するにて更に惡き意に非ぞ人権を以
 て爲る時の我も亦權を以て處せざる事を得ざらんや強ち非禮といふべからぬかさて又生來
 八字の事我邦より神世より絶てあらざる婚儀なるを誰人か案ひ出で奴家が約を違へざる
 照据を采んと巧めるならんそれも又道るさまよく寫て儂に參らせたるの亦是曩に承りし
 非常の禮に對へたる非常の籌策にぞ侍るこれに苦子ぬしの八字を以せし去稔苦子ぬしの
 病痾の時如意寶珠院の地藏菩薩に祈禱させ給ひしを承應に掛たる漆牌に寫たりしを看て
 識たるのみさらば甚摩の故ともて苦子ぬしの本命と奴家が知縁侍らんや恚箇の緋と听僻

めての満家等の誘りて幻術ありなきいはるこそそかけ旁痛事には非ずや約莫幻術といふ
 事ハ西域にて人を教るにその悪俗を敷せんとて神變自在の形相を示せて愚俗を化度とする方
 便あるを神通としも唱へし唯亦尊く号し而已也智者に用ゆる事には非ず然るを怎ぞ婦女
 の身としてさる幻化を克せんや案に他に幻ある者の目から幻の幻たるを悟ずして人を以て
 幻術ありといふにこそあるべけれ任他其の左まれ右まれ己に八字の庚帖も苦子御寮の支干
 を以て赤坂へ贈遺給へれば今宵もまた苦子ぬしを送りて那里へ嫁し給へ儂の館へ采納を贈
 り儂の女を娶んり原是當然の理あれバ異論をいはんやうのなしさりととも危殆く思ひ給り
 猶姑摩姫と喚做て箇様箇様に料らひ給り必成就すべきなりさらば如今自滅せんとのため
 災厄の一轉して却々出身の基本となるべし縦令其事後に至りて發覺たりとも他も亦院宣
 詮意と詐瞞たる大罪あれば聲を吞て決めて咎むる事能ひじ猶までも就盛等が事むづがしく
 論ならバ登時妾儂に代りて差能分解し侍りてん些とも儂のう人にバ懸じ奈何料理給りん歟
 と道れて正直再過呆れて肚裏に想道道姑摩姫の青年十七乳臭の失ざる少女なるに神机妙算
 縦横無盡恣でか恣まで逞しき恐怖の祖父正成卿もどき及ひ給ふまじ現能思惟は院宣御

誕と唱へしは管領父子就盛が虚偽なるべしされども我の他門が下座に立れば假令虚偽あり
 とも發かば崇と受ん而已さりとて今更姑摩姫が謀略の如くせば後に露顯したらんをり要女
 赤がらに失れん歟されども別に思量もなければ懸問詰で危氣なくばさ謀んかと辛うじて
 困せし面を搥ていふやう意表に出たる和女郎が騙計する絆としも初顔より知ば鮮明々に
 故を遊佐に報て假父となる事を辭せん今と做てハ开も及ばずさりて和女郎が策に應
 り發覺せん日に甚度様の禍あらんも料難し且又和女郎の美貌なるを女房苦子の醜きうへ
 に去稔の痘瘡のいと重くて父母だにも厭はるゝを富貴の家も生長たる持永いかで肯んや怒
 り憤怒を起して性命をさへに失ふべしそれも有弊に不儀なり左にも右にも運命懸くて和女
 郎が與に一家舉りて滅亡せん事今宵にありと怒つて姑摩姫推禁めて开頭の用意もなくてや
 侍らん持永の一過も奴家を看たる絆かければ醜を論べくもあらざ除非偷看たる事ありと
 もその私に事にして公然としていふべくもあし但満家に花落にて面を照せし事もあれど
 その去稔の痘瘡に係りて醜く成ぬと宣ひ一度合登したるうへに容貌の故よて去んどの存
 繋に愧ていりざるべし然れども一向に被難如何と彈り給ひ明々に奴家が報計を報給ふと

も異しうのわらぢ。恠て持永一旦の怒るといへども戀すまに奴家と欺んと想ふべければ必定
 苦子ぬしを離別とべからせざらん間に漸々に夫婦の中間も和ぐべし。忙しく回りて苦子ぬし
 に報て如此々々料り給へ。妾が計を猜復て今より寔を吐給ふとも這期に迫りて就盛等儕の罪
 とせざらんや。解道尋思し給へかしと掌も取る如く論ずれば。正直梢沉吟と絆を偽りて危を行
 ふ。原來好ぬ事あれど今宵と成てハ殊更に做べき爲便も別にあり。家に回りて本石等も商量
 して従ふあらば。和女郎が異見に憑べからん歎さるいへ。叔父と騙死せしむる。和女郎が心を恨
 めしきと吐きあがり起上りて河備を投て立回れば。風爐八郎の轎子を徒しく擡げ出させて。注
 と想へば。倒れ腹立しくて會釋もせず。跟方に添て回りけり。姑摩姫の跡目送りて。安次を身邊に
 招き。裏直におひする叔父君に怨恨を受んハ快からぬと身に繋る火を拂ひ難て窘めて回した
 り。恠れハ近きに就盛等が奴家を悪みて爲る事あるべし。登時の尋念もあれど。先赤坂の動靜を
 見て。後に料らる様あるべし。儕ハ心利たる奴隷と甚麼となく。那里へ差て隠々に内外の動靜を
 窺ひするこそ肝要あれといへば。安次承りて其頭の用意を做たりけり。却説正直の回ると就て
 木石苦子を喚出で。先はや頗に歎息すれば。木石苦子の恠なる絆とも思ひ難つ。左右より那

首の首尾の恠なりし。姑摩姫どのの恠にせし。病胸の寔で候かと送代に問かくれば。正直の怨め
 しさに。泣氷を一眼浮べて。道やう酢でも味附でも食難き。姑摩姫が机變の謀略箇様々々と情め
 き告て恠る絆とし。知ならば初發より作麼様の院宣証意たりとて。死力を盡して辞すべかり
 し。鈍くも他に騙られたる冤氣ハ今更悔て復らる然りとて。少女を敵手に刺違へても死がた
 し。只這上ハ正直が命運極まる處なれば。尋常に肛切て違約の罪を謝せんより。外に尋念ハあき
 事也と。听て驚く。木石苦子雲時ハ呆れて物も言れど。泣氷さへも猛可に出ねハ。惘然として在け
 るが。木石の梢湧出る泣氷を抑へて。いひけるやう。今はた論んハ。愚痴に侍れど。那持永が其最初
 儕を媒妁に囑みしを。り。辞み給へと。屢いひしを。儕ハ听で。提持給ふに。果して姑摩姫従ハざり
 し。を持永執念く父に報て。果して如此有難義に及べり。過莫今番ハ上様の御証とあるを。奈何ハ
 せんさる。僧姑摩姫ハ任情に詐偽りて。終ハ儕の大事としたるハ。分兄君と義絶の故もて。さば
 かり。猶念く恨る歎さる。とて。甚の女子なり。這うハ。初發よりの始末を。遊佐へ報給ハ。那人ま
 た。計謀あるべし。今徒よれん。肛召れて。謝給ふとも。這儘にて。ハ。世の胡慮と。あらん。而已。いざ。先遊
 佐へ報給へと。怨み。悲み。諫むるを。正直頭を打掉て。絆適來に通うたれば。赤坂に。準備して。等ん

所へ云云といひて勘解と持永就然必俺を脱落として京へ稟して罰せざるべし。然らば俺
 們が今迄の忠勤も水沫となり又且人の胡慮とならん只潔く自害して赤き心を現さん俺亡後
 にの前母子風爐八郎と商議りて這等の山を訴へて冤恨を雪め給ふべしといふを木石推禁
 めてそのまた益なき絆に侍りさまでに思食ならバ姑摩姫がいへりし如く苦子を惜々に赤坂
 へ送りて今宵の急難を先連れての看給ひせや那姑摩姫の腹黒ある開の腹立しく侍れども人
 を騙りて那邊這邊と絆を脱るゝ手段ばかりの然とて就も及ぶ的なし恚れば他がいふまゝに
 行ひて試給ひの萬に一箇も急難を脱るゝ事の有もやせん開上にての災難のおん身上に係る
 ならバ當下かん所召るとも遅くハ侍らぬ絆ならせやさらバ奴家もかん伴當して冥土より驅
 られたる冤を共に報ひべし遺莫遺兒々容貌の十名並もあらざるに去穢の痘瘡の最重くて
 痲さへ痛く痕たれば那驕誇なる持永ぬしの終身全よ看るべくもあらせ選集守まなし果て物
 をのみや想ひせんと念へば最々差方なく不便に侍りと聲立てよとばかりに俯沈みしが念
 復して苦子を願ひや苦子聞給ひし歎適來爺々公の宣ひしれん身も迫る今宵の災危脱るゝ
 路のなき儘に切てかん身を姑摩姫が代として赤坂へ送らば千の一個にも蓋々公の命を救

べき縁もやあらんと思ふなり任遣かん身を差すとも持氷の好色の性とも所バ大抵の樂て一
 切願みざるか或ハ忽ち離別もせん歎其を識つゝ去けといふ母親が心の腸を断ばかりなる念
 慮なれや爹々公の命にの換難し父母の興にの節義を破り仇讐に従ふ人もわれバ夜發遊女よ
 も做果てさて孝貞を全くせし事相漢に例あさにあらねば儂もさぞな知つらん省聞解て去べ
 さかと道れて苦子の悲しさも亦羞愧じさも十寸鏡移る容貌の俺あがら厭ひよ、躬を漂湯出
 て浮薄たる人の妻とあるとも怎でする野の女郎花花咲く秋に遇べしや徒よ羨折ん衣手の露
 絶ぬ怨の俺のみならで母曾の杜の歎ともなるべき事との識ながら推辞なげ今眼前に父の命
 を夕霜に比へて氷の及に伏んと謂るゝ事の理なくも母親の教諭の切あれバ最上の川に曳と
 いふ船の不の字といふべくも涙の灘の間ぞなきこのそも怎なる因果ぞと只俯伏て居たりし
 が念断ていひけるハ想繫なき姑摩姫どの、猛可の違變に父うへのかん分説立せとてねん脚
 を召れんどまで宣ひするを母うへの扯め参らせ給ふとて奴家を代に赤坂へ差し給ふとの命
 の趣怎か背き侍るべき且のたまひする御教訓の切なる旨の愚痴なる耳にもおろく心得侍
 りさのさりながら奴家が親の姑摩姫どのに紛んはせに生稟てもさふらハ浪風立す事治り

て久後までも父うへのおん興たくの侍るまじきと恚る身をもて参りなば忍丈夫に隠れて復御苦勞を繋やせん开のみ苦しう候なり原來も人並ならぬ躬をば最熟知たれば人に見べく思ひ侍らす縁てより尼法師にもあらんと想立たればさらん折に醫切て姿と變べく思ひ侍りと有無健氣よ言葉とれば木石の涌上る泣水を抑へて背拵捺り开の克所解給ひたすされども絆を急過りて女僧になる事の一事の係ても想ひ給ふなよ怎生醜き女なりとも俗に云相縁奇縁とやらにて我身を賣て克事へなば終是丈夫も感歎して陸じくなる事もあり還り豫てより教へし事を回々も意得給へと道つゝ正直に打向ひ即今听せ給ふ如く苦子も納得して候へば姑且御生害を留り給ひて姑摩姫のいへるまゝに那里へ送りて急難を遠れ給へといひければ正直の黙然たる頭を擡げ彼此を左見右見つゝ嘆息し現傍等が貞操孝烈さもあるべき該かから寔に正直智慮淺くて那里よても道里よても欺騙れたる絆を念へば險不慚愧に堪難し恚れども道儘にして自滅を取んも朽惜けれバ云るゝ儘に隨ひて姑く苦子を送らん歎仕致在下が故を以て僧等母子を苦むるこそ最々本意なく不便なれとて復數回嘆息すれば木石をれを思めて然りとて如何のせん這うへの甚麼絆も奴家に任せ給へかし那里に去ての將爲様

も事發覺ての後の手段も道兒も最能敵ふべし案ふよりの産が易しと鄙言にもしふなれば然バかり想届し給ふな苦子が乳母子うら風の幸に年も長て必伶俐物馴たれば他も萬を意得させて典副に差をべしと豫て定指侍れば猶よく進退を分付なば期に臨みて脱落のあらじいざや苦子よ夜も更なん這方へ來て化粧もし疾々収拾し給へと換立て奥へ入れれば正直これを目送りて千回悔めど又更に謀の知るを知らば故且その旨に任せつゝ只危きとぞ居たりける畢竟苦子が赤阪へ嫁して又什麼なる話説かある开の次回に分解るを听ぬりし

開卷奇驚俠客傳第五集卷二終

開卷奇驚俠客傳第五集卷三

第四十五回

怒を宥めて守護再策を謀す
義を忘れて精神偽使と偽る

話説島山持永の豫ての志願成就して今宵姑摩姫を迎へ拿んと想へば漫に魂懸蕩て鬼狂しきまでに怡悅興頭と只管家人們を急遣し立て仕禮の準備を責促すに原是富たる家なれば怎

足りの東西のあらねば家談の泰勝煤鳥等と幾名の夥兵のみ開除の名もなき奴隸等にて長終の他は侍女どももあらねば事由と父に報て侍婢幾名か京都より美鷹と擇て差下せべく豫て料ひたりけるに就盛が密意もて俄然に期日を縮めたれば有禁に人への事を闕て就盛に商量せしに就盛就ち自家の侍婢等を多く送りて當日婚儀の役に充且又我属に隸られたる畠山家の家人等も白が郎黨をも差加へて玄關向の事を執せければ怎麼に不足もなきやうなれどもさりとして馴たる事あらねば彼此侶よ捫着して鼎の沸が一般なるを持永遠に焦燥て式の如く辛うじて噂言送まを準備したる且赤坂の館の前に轎子稟拿へき假舎を設木造木工介泰勝に畠田九郎を相副て稟拿へき役者とし別に兩名の頭人に夥兵凡個を属へしめて武器嚴しく十字警固をさせ館の前門まで大將を燃連ね中門よりして轎子を納べき地道にハ毛氈を鋪並べ書院の潤色洲演の結構媳婦君の平房侍女の周舎寢殿の打點に至るまで光るが如く經營たる情景宜く想像べし侍女薦の専女の役として長終退を職りて垂髪に粧ひつゝ新に賜ひじ小衣手を着飾り襦衣和よかよ着做る容体有聲に鎌倉の寵臣なりける藤白隼人正俊同が妻の果にて有ければ進退さへ朽惜からむ物就顔にぞ振まひたる其他の遊佐が館より今日しも來れ

る侍女們これぞ這里を晴と打紛られたる人跡希ある片山郷も花と紅葉と一時に咲匂ひたる心地せり閑話不題就盛の職分の重ければとて篠持煤鳥を媒灼の名代として正直が河備の館へ差しのへ自己の黄昏より城を出て赤坂の館に至りて萬事を指揮し甲夜過る比及まで等どもく音もせねば持永の更あり就盛も等詫て且不審も想ひければ人を差して規のするは河備の館も混雜にて詳き光景も知らざれば篠持煤鳥を喚出して怎に〜と催促するに辛うじて夜半過る程に松明の光多く所看て陸續として來にければ遠看に出して奴隸等が次第に報るよぞ持永就盛禮服改め等々間なく新夫人の轎子の假舎よ着河備の家長湯淺政義今一名の侍と作法の如く轎子を廻輿の泰勝九郎立出て局小上臈の轎子まで悉く稟拿てきて新夫人の酒盃を賜ひる式も果ければ敬義の回る姿を猶泰勝等がいふ事ありて館内まで順ひ行ぬ煤鳥の門前遙々下馬して案内立立畠山家の轎夫等の轎子を擡げて徐々に進み入るは浦風の小上臈はて局子を共に引添て歩めば長終等出迎へ豫て構へし平房の内へ案内をすは漸夫人の轎子を上て扶掖れ那袖に入て憩ひたり長終其餘の女房どもも開次々の間に侍りて萬の事を執脂へは浦風の局子桐篋の俱に新夫人の傍に在て準備をすも速かに顔の些少も

雲さぬ進退いしかそがに。武家には生育も振振揃き現も姑塵姫あるべしと思ひければ長総
 等の偷着せんも有繋けて低語だにせで居るなるべし持永の恚にもして先疾透着をせんと念
 へば操側傳ひに竊び来て窓の障子を唾もて濡し密に指にて穴隙を穿ち窺ひ看れども浦風が
 狭くも心を利せつゝ屏風を和ら押詰て障子に引廻らしたりければ看れども看へば徒に靴を
 隔て痒を搔く必地のみして爲術なければ就ても看んを我ながら慙切あく益なかりきと吐き
 なから扱足して退き出んとしてけるに。同じ意心の木造泰勝假合の役の竟ると即て走回りて
 物蔭より那千里鏡の裡に所看たる美人やあると規ひしに被衣に面も省も見へぬと他と無
 比女人と見ておぼつかあき事云べくもあらねば。同じ此裡に竊び来て猶克偷看せんとする撞
 見頭に持永と不豫首を附着せて撥と駭き眼より火の出るまでに覺ゆれど聲をも揚得る偷音
 に空介敷と透し看れば道の令郎君か恚地へ出ます一向に御免を被るべしと平張俯ても眞闇
 中陳謝る聲さへ聞ければ持永の我を忘るゝまでに心花開けし折柄あれは恚でかゝ咎むべき
 痛苦を笑は混らして己が子舎へを退りける去程に就盛の持永を伴ひて威儀を正して立出つ
 へ。煤鳥風爐八郎を喚出して新夫人に恚々と聞へさすれば苦子の長総等も侶れ浦風を引て

主位に若持永の容位は坐して互の口誼言穿に室町様の三々九度浦風が酌に立て儀の如く
 覺ければ其次の席を更て持永就盛に勞を謝し酒肴を換て管待ば就盛も祝言を陳て煤鳥泰勝
 風爐八郎等を召出て各勞を慰めつゝ聲も稍高くなるまで酒を吃せて恰好に遊佐の城へ回り
 去り風爐八郎教義も河備の館へ還りつゝ正直に今宵の首尾を脱かく注進したりけり却説持
 永の衣服を換侍女等に扶扱れて新夫の閨房に入て看るに赫々たりし蠟燭も悉く消柴て壁に
 背ける孤燈の下に小上臈の浦風が畏りて侍りたるを持永の願りて道に不意に因縁にて儂等
 にも親くなりぬと會尺しながら手を拍鳴して噫仄暗き所也快疾燭火を拿來れと大音に罵る
 を浦風の推禁の姫うへにおん所勞坐せしを今宵の御佳禮然りとる稟難く押て出立給へれば
 願のく郎君の御意もて聊おん儀式を畧かせ給ひ唯疾腰り給ひ夜や最大人びての所見給へ
 ども女子の執も裏慚しきものに侍れば開いえに御所勞も出しにこそと笑を含みていひしか
 ば持永も打笑ひ和女郎が然いひば道理也俺も少所勞氣なりさらば床上の献酬の和女郎と這
 にて果さん歎と醉たる儘に俺を遺忘て不覺に戯れつゝ長総に酌を把せて又四五盃を傾けた
 り苦子の教侮られたる如く袂衣の中に歸りて息をも做で居たりしを持永の差覗き恚てや然

世俗の婚禮に床盃といふ事すなる例なきに古に俗儀あり伊勢主の雜記に今應永中の禮に只

ばかり物愧し給ふ道首へ出て唯一つ吃給ひせやと舌疾にいへと回答をもせで在しかば腹裏
よ思ふやう現姑摩姫の智勇も秀し婦女といへと男女の情の未得知ぬ未通女子なれば羞愧た
るにこそあらめと思へば強ても世誘さず恰似にして長総等を次胎へ出せば立て去とて長総
の酔たる儘にヤヨ令郎さま年來のおん所勞も遺漏なく今宵の嗣させ給ひなんお羨しやと高
らかに戯弄で出るを持永の聞ぬ態して打咲つゝ袴を脱ぎ蒲風が押疊む開間に和ら屏風を曳
開て入んとしつゝ躊躇傍の行燈を挑んとすればうら風快く意得て開り又妾に任給へと史
あふ様にて搖消げ噫やと鼠鳴する持永を箭庭に手を把推遣て竊やかに打笑ひ間の紙門を押
開て疾く外面へ出にけり持永の搔搜寄て同じ衾も入て看れば汗も沾々に臥居たるを只姑摩
姫と思ひしかば醉に任せ愧を忘れて年來日來の繋想の限をいと長々と説運けて恰も瘡物に
障るが一般漸々に慰めければ苦子も時に暨びたる婦女なれば忌すがに愛憐を聞知る節も有
に豫て姑摩姫を誘さんとして那蒙袁が授けたる隨喜破貞香を薰せれば慾火連に發動して堪
ぬばかりに覺れど只覺られじと物をば言せ徐々に身を委まれば持永頻に遣を操て雲となり
雨となり終に夫婦と成にけり持永の晝間よりの心勞さへに立添て酒の酔酔く上りければ前

滑稽の爲のみ也看官幸に答ひる事勿れ

后も知老寝たりしが不圖夢寤て四下を看れば窓に朝陽の差登りて辰の半刻も過ぬと看ゆ
に急忙しく身を起し但見ば新婦の前夜の儘に傍に臥て在けるを卒と差覗きて現へば這のそ
も如何姑摩姫と只麼念ひて借老の合巻を結びし新嫁婦の額大く口方にして頬さへ高き谷の
はな咲ふ山下風は吹散す田の山の紅葉を看ゆるばかりの痘瘡の癩間なくあるに白粉を施
したる光景の譬喩つゞくもなき形容なれば呆了こと半時ばかり物も言れで居たりしが忽地
涙吐ひまでも怒氣憤然と湧上れば苛疾さ聲を掉送り這奴抑甚麼的かれは我這便室にの偷入
たる快々起よと罵りて背を確と打たりければ駭きながら起直るを猶克をれば去稔の多河備
の館にて酌に立たる黒暗天女か巨隠山の鬼女かど念ひし正直の女兒苦子でありければ持永
再遍肝を消し和主の恚の緣故と以て我寢所に在やらんといへども苦子の只羞らひて回答
をだませざりしかば屢噴て止ざりし物音を聴て蒲風の紙門をやをら推開て徐々と持永が身
邊に衝居て手を束ね郎君かん眼を寤させ給ふか姫うへにも起させ給ふかと空知ぬ貌にいふ
を見て持長急に眷顧つゝヤヨ女此是姑摩姫ならず怎にしてかゝる醜女を吾閨房にの率もて
來りし這の正直が料理か但し誰が吩咐たるを快姑摩姫を出させやと敦固猛々罵れど蒲風

の騒ぐ氣色も亦く姑摩姫殿に非ずとの恚にして知せ給ふぞといひせも果す持永の筆を握り
 眼を睜り這女奴が大膽なる嚮に正直が山亭より千里馳以て慥に看若し姑摩姫の沈魚浴雁閉
 月羞花の美人なるに。かく醜惡き女を送りて誰かの开を實とせん。此是正直が宿所にて一遍會
 たる他が息女の苦姫なるを恚にして闇夜にも見混んやといふに浦風些とも怯ます姑摩姫を
 の非るよしを既に知せ給ふならば更に奴家に誰人ぞと問せ給はんやうもなしと半分論せ
 ず持永の可憐女が辱くも院宣御説の故を以て持永が妻に賜へる補姑摩姫を暗々に換て恚る
 無愆の白痴を來せたりとて這儘に絳濟事と思ふよや抑誰が較計て這企をバ做けるぞ眞直に
 白狀せよ稟すバ目に鬼見せんと搦勢稠で責詰るを浦風の尙も慥せお开のたまはるとる事な
 から河備れまの御息女を娶らせ給はん奥にてと河備さまのれん宿所へ納采を贈り給ひし上
 の河備さまの御息女を嫁し給はんの當然の理也さると今更醜惡じとて罪なみ給ふの畏憚な
 から仰せられたば侍らせと听て持永怒に堪え任他餘の緯の左まれ右まれ院宣御説を蔑如に
 せし罪科と礼さば正直一家滅亡せし事疑なければその响想講べき也婦人と敵手に論辨する
 の却也無益の至也快々出て去べしと爰を蹴立て踊り出蝶鳥やあると換立れば孫持蝶鳥の甚



昆一夜
 度と
 確と

麼事やらんと出て來つるを持永の具と等しく聲を屬せし想ふ邊ひし大變あり快々馬を牽
 むて來れ遊佐の城へ赴きて今急過に事を諱せん和郎の夥兵に戒具させて俺若長も牽持せ疾
 く那里へ趨くべし委曲の情由の那里よて説も聞せん急げくと連に屬く下知すれば媒鳥の
 甚麼とも辨へねと推回して問べき擬勢ならねばいゝる、隨に馬に鞍指さ快楯前に牽立たり
 持永の刀をおつ把跡より續けといふまゝに、一鞭くれて蕪々地は遊佐の城へと馳驅出れば媒
 鳥の猛可に着急慌忙めさ夥兵十名に腹巻させて持永が鎧櫃を奴隸等に當擲せその身も鎧
 把て投懸喘ぎくぞ追たりける就盛の恚とも知れ日高く起て徐に朝嗣を果せし頃接待の若
 黨が赤阪さまの火急なる御用ありとて來ましたりと報るに就盛不審ながら容殿に請じて忙
 しく袴を着て出會たるに座にも未着ぬ程に持永聲響ていかに貴老の持永を什麼の與に詐か
 りて恥辱を與へられたるぞと氣色を變て罵るに就盛の思ひも係ねば驚きて在下不肖の身な
 れども御恩を彼る管領家の御令息に對し奉り恚で賄略を存すべき開の又何等の事あるよか
 包藏す仰らるべしといふに持永息接取す流る汗を推拭ひて楠姑摩姫を娶んとて貴老媒妁
 せられたるに恚にして正直が女兒の醜婦と送來りて恥辱を與へらるゝやらん持永愚昧なり

と雖ども恚を昆玉と燕石とを辨へざらん技に貴老も正直と膝合せて睨るゝか回答に因て存
 る旨あり如何ぞやと膝を前めて端と睨みし無念の顔色打も果さん光景に就盛も大に驚き開
 の又意外の椿事也儂も知せ給ふ如く在下も此属より意を盡して御婚姻の全く成就すべきや
 うに奔走せしを恚にしてさる騙計を構んや省惟ひても見給へかし。父祖代々御被官として什
 麼事も御蔭に依ぬ事ひなき在下が恚にして然様の不忠を致すべき按に姑摩姫が机變にて正
 直を欺詐りて恚る詭計を構しならん欺且御心を鎮め給ひて事の始末を詳に听し後には又
 愚案なきにも候はずといへば持永幸じて面と些少和らげて有し序次を話説りかく欺かるゝ
 上からの快々河備へ押寄て正直が白髪首と傘でやの措るべき貴老倘他と同意ならずの加勢
 して後を詰られよ既に媒鳥に戎具させて門邊に等せ措たれば直に那重に赴くべくと立んど
 するを就盛の着忙しく推禁おん腹立の理あがら正直の小身たれども御直參の的なるを伺ひ
 きて私に誅し給ひおん身上疎忽の祟の遣れ給ひじされば且正直を喚寄て仔細を問ひ
 開うへにて思看に任むるとも運きよ非せ倘さる駒に就盛も恚でかの外に看ん必おん先
 隊仕るべし絆を糺しも問せして結果んの宜しからせ只管在下に任せ給へと頼に諫めて止せ

れバ持永漸々怒氣を押へ然らば目今正直を道首へ喚て純明し給へ在下の家に戻るをも面白
 からねば這里に在始終の事を窺へん倘正直が詭計あらば即時に死し稟さじといふに就盛稍
 安堵して就て獨九郎を喚出して河備へ差て正直を喚しめ持永に別室にて朝餉を出して管
 待けり却説楠正直の苦子を出じ遣たる後も心もとなき限なけれど今更策の出るを知ぬ
 ば只得木石と相對ひて回らぬ悔の樽のみ爲つ居たるに曉天候敦義が回來で那里の首尾の
 好りし事を云々と報しかば些の心安堵たれど尙亦露顯したらんをり持永が怎にいんと念
 へばいと安からで枕に着ても熟睡ならず既に今夜の明果たれば快起出て朝餉を果し又
 木石と同絆を論出のみも得在は近侍的に傍附て赤坂の方へ出差つ那首の動靜規に雲時して
 立回赤坂さまの只一騎馬を飛てた方僅遊佐の城へ出給ひぬと報に正直さればこそと猛可
 事出来如く心を冷て居たる處へ就盛が使者譽田譽九郎と名告對面せんといひ入しかば驚
 破想心を靜て出て是に會けるに譽九郎の就盛が口狀を述且夜前の婚姻を祝さて火急御商量
 の旨われを目今在下が方へ來らるべしといへば正直の驚駭と去で止べき勢ならねば就開へ
 参るべしとて譽九郎を回し差伴當を備してさて木石に恚々と暗々に告て怎れにしても就盛

が火急に喚へ好意にわらト時宜は依ての大變は變ばん事も計がたしさりとして今將如何せん
 さらば能意得給へといひ棄て出去ば木石も今更に危殆き物と念へども差での事の落着とべ
 き勢ならねば禁めも得せき念難たる頼に手を滑正直が後影を雲時目送て居たりけり正直の
 馬を疾めて遊佐の城へ去て看れば玄關の傍邊に篠持媒鳥が夥兵ども小手脚當に腹巻して各
 々戎器を携へつ今事有んといふ容体なれば十分に鬼胎を抱き原來持永就盛等前夜の事を
 憤りて殺さんとこそ量りしならぬ苦子の既に死たる歎きも知らば怎にもして明々に陳謝
 とべかりしを悔しき事を爲てけりと歎けど今爲術なれば眼隨に立たる敦義に事の意を
 心得させて案内をさせてければ接待の若黨出迎へて疾く客舎へ通したり正直の適來も討て
 出るのやあると眼を睨れど殊更に奇異しき様体も見へざれば右見左見つ惟ひ難て尋思よ
 心と惱す折から就盛出て對面し正直を近く招き今且持永がいひつる山と箇様々々と説出て
 貴方へ什麼と念ひれて斯様の事を謀られしと説でも著き事ながら合番の婚姻の私一家の事
 ならん院宣誑意の故を以て不肖なれども在下が媒妁を勤めたるに脱落ありての上へ對して
 稟解へさ由もなしされば左馬殿の貴方と打も果さんとて立腹ありしを辛うじて在下が推止

め一回貴方に仔細を問て開うへはて思生とも進退せんと宥め措たり接ま是の姑摩姫の姦計なるか抑又貴方の詐偽か知ねども回答又依ての自他一家の滅亡をさる緋あるべしと面色變りて見ゆければ正直の是と听て面の色土の如く膝さへ戦慄かれて預ての右いん左いん。と惟ひし緋すら一句も出ねバ唯一向に頭を下げ左馬介殿の立腹も貴老のねん難難も一箇として理ならずといふ事なし。それ想ひぬにあらねども如何せん我姪女の前夜猛可に約を違へて箇様々々にいひしかが争ひしかども爲方あく在下も自殺して分解せんとしたりしを姪女が又推禁めて恚做べしと誨へたるを刑妻が諾ひ料りて女兒を以て赤坂の館へ嫁し遣したりと首より尾まで些も藏さず姑摩姫に脱れし由も庚帖を把換られたる緋由も愈推出て明々に演盡しつゝ只管も怠状ざる外なかりしがバ就盛の熟听て驚呆れて舌を振ひ腹裏に思惟やう意外に出たる姑摩姫が神出鬼没の謀略の豪衰などが及ぶべくもわらず那庚帖と豪衰の只麼姑摩姫が本命と思ひて是を調伏し且その合巻を祈りしかが法験なきにあらねども案に違ひし苦姫を祈る伏て持永が妻にの定られたるならぬ。さるにても姑摩姫の恚ある故に院宣御詔を矯たる緋を知たるあらん。是を接へば現他の神變不測の幻術ありけり。然而正直が罪を私

して京都へ訴出んにも院宣御詔を偽りたる罪の道方へも係るべく且の嚮に滿家に諾ひ置たる緋もあれば露顯なき悉く我身上に繋るべし奈何のせんと種々に案廻らし辛うじて一計を念得たりしかは。面を和らげて正直にいふやう案に相違の令姪女の机變命愛を以て換たる手段一驚に餘あり。さる事ならば怎殊く我等の報もせで却也。其謀を助けて共、在下までにかゝる危難を係られたる這貴方の罪といふべし恚れども事道首に及びて縦計貴方と就盛と刺交へて死をもども管領父子も欺れて恥辱を奪れし事漏て世の人口も膾炙しあバ大じ家の瑕瑾とさるべし。されば目今京都へ稟して貴方の罪を糺すべきなれど何にもし令姪女を囹引出して一日たりとも赤坂の館へ迎入さバ違勅違詔の罪ともあるまじ。尙遣うへい左馬殿に商量して料理んといふも正直手を捺て昨夜姪女が違灼せし時刺殺じて晩生も腹を截んと思ひしかども原來管領並に貴老のおん面皮にも係らんと思ひ且貴老の赤坂へ既に到りて等れたれば勢何生とも備なく終つて恚の料ひし世いかで姪女に荷擔して詭意と蔑如と事あるべき尙遣うへにも然るべし。御商議の候に何なる事も辞すべからず。と只管勸解て止ざりければ就盛も打領然らば左馬殿に商議らん暫く道里にて等るべしとて奥に入て持永

に會ひ件の由を告示して。謀ていひけるやう正直が蠢愚の罪免すべきよの候らぬと他
 豫ても知給ふ如く痴呆たる人なれば。熟く姑摩姫に詐偽れて寔は途方に莫にけん我女兒をも
 て獲たるほどの鳥乎の白痴で候へば敵手にせん無益あり勿論這回の院宣御詔の老候と
 生と暗々に議りて爲し事なれば訴へ出なす却也。這方の脱落となるべきなり。然有とて今急
 速に結果し給ひなす。他も柳營に御先代より昵近の的あり。妄に殺して罪の過れをば枉
 て免し給ひて。尙那女兒苦子をば雲時御館に留め措て。睦じき様に款待給へ。さらば又姑摩姫も
 心と放して這方の機密を窺ふ事なかるべし。約莫他の幻術ありて。毎もこの這方の機密を前知
 するから先を超れて謀略の敗るゝなれば。他が不意の响に起りて。謀略を施さぬ。復又他に欺
 瞞るべし。且他が院宣詔意と猜ふ故に。其勅書御下文のなき故なれば。今般の北島俊雅を太上皇
 の御使と号して。院宣を把持せ。詔意の晩生事を執て。俊雅と諸俱に立並んで。當城へ他を召出
 傳ふべし。恁箇する响の公法なれば。假令假托と知たりとも。誰に向ひて訴へ出べき。然らば屈て
 承允せし。尙また強て拒まなば。道路に奇兵を伏措て。擲拿て御館へ送らん。開はた手強くて。擲
 難く。結果て。錦の御旗以下の東西を再遍把出し。五十堆龍次が古轡の如く。兵を集る廻文を

價せて老候より披露し給ひ。いん答の有べからず。されども恁まで。に絆煩累く。いあるべから
 せ。十に八九の成就すべければ。甚くな物を念ひ給ひ。とされ。且正直の許して。さり氣なく對面
 し給ひ。後に到りて。他をして謀略を行はせし。必急過給ふなど。回々いひければ。持永遊々に會
 得ひつゝ。さまで。いひるゝ事なら。今番の屈て。免ん歟。後日の絆も。賢束なければ。俊雅をも喚
 下し。豪袁阿闍梨も。請じ來て。時は。臨みて。拿擲な。豪奪る事難くも。有まじ。さらば。正直に對面せ
 んか。といへば。就盛領きて。猶も。机密を耳爾示し。舊の客殿に立出て。正直に持永を曳會すれば。正
 直の一味地に頭を叩きて。勸解る。而已別に。いふ由なかりけり。持永も。又面を和らげ。絆の情由を
 承りて。執念く。貴翁を怨ぶくも。わらず。併作那姑摩姫と。這儘よして。止べくも。わらず。且上の
 おん旨。されば。爾後。齊一に。商謀りて。我等が。方へ。送られんや。さらば。苦子の。晩生が。嫡妻として。久
 後。秦晋の。好意を。結び。貴翁を。泰山と。仰ぐべし。といふに。正直。怡悦て。向後の。難義の。知が。だけれ
 ば。先適。來りて。浪風。立ぬ。否む。べきや。うも。なく。説る。任に。言察。されば。就盛も。取繕ひて。尙云々
 に。盤策を。正直に。示し。か。是亦。推辭。し。事を得。阿面。々々と。諾ひて。暇を。告て。宿所。より。回り。妻木
 石を。喚出て。箇様。々々と。告示。せば。木石の。覺束。あけれ。先當。難の。遁れたれ。丈夫の。恙なき。と。祝

しつゝ稍安心を爲たりける。持永も爲方なく、赤阪に回來て、後の籌策の典と念へ、強て然り氣なく紛ひし其夜艾も勉強して苦子が臥房に到りしかば、苦子も蒲風も持永が今朝の氣色に肝を冷し向來怎になる事やらんと密やかに譚合て心を痛めて在ける。案外に持永が心解て來にければ、怎に爲る歎を旁に、恐懼しくも思へども先開心をとり、に管待で、大く歡喜び、暗々よ河備へ消息して、正直夫婦に、絆由をを細々報遣ぬ、恚りしうば就盛の、櫻田器九郎は机密を言含め、消息を齎して、有し次第を脱も、亦く滿家に注進し、又自己が計策をも委く、報差たりければ、滿家、听て大に驚き、或の怒れを爲、術なければ、急ぎ豪衰俊雅を喚集へて、件の次第を囁き告れば、俊雅の、听く事毎に驚歎じ、さて逞しき女か、あどて不慮吐息を吻ければ、有繫の豪衰も呆れ果約、莫愚僧が調伏の法、凡僧の爲る所と同じからず、龍樹菩薩より傳りたる眞言秘密の奥妙に、役優婆塞の神呪を加へて、傳來せる修法なれば、祈れば必然應驗ある事、一遍も恚り候ぬを甚慮にして、かゝ姑摩姫、那庚帖を掠換けん、這の正直が疎漏なり、されば只管合の香儀の整ひて候へども、庚帖の本命、錯ひたれば、竟に苦子を合郎君に祈り、諫參らせらるゝ案外なれど、併法験なきにも、候ぬ敷、道上の貧道も、那里へ立越ぬ外ながら、遊佐氏を幫助けて、他が幻術を折ぐべし。

されども、既よ貧道の、嚮日那宿所に去て會たる事も、候へば、面を對せん、妙なら、道の遊佐氏の計議の如く、今番の北畠殿御勅勞ながら、御下向ありて、恚るべしといへば、俊雅一語に及ばず。其の安き程の事、あがら、出仕に間暇あらざれば、といふを、滿家引取て、その究竟の事こそあれ、遣屬將軍家住吉へ、御代參を立られんとのおん事にて、御使の人を選ぶべしと、仰出されたる、あれ幸貴所の、緒紳家の、おん事なれば、指參らせん、尚仰附られなば、塚浪華遊覽の事を、序次に願はるべし、十日十五日の、かん暇の、故障あるべき事ならねば、其間に、河内へ立越へ、事恚々と料はるべし、さるまでも、姑摩姫の、少女なれども、侮りがたし、必尋思し給ひて、他に、雌伏し給ふ事といふに、俊雅領掌し、その心得て候也、恚らば、件の上意を聞ば、急遣し、出立すべしといへば、又豪衰も、其頃、に貧道も、必那由へ、參會て、姑摩姫が、術を破るべし、といふに、滿家歡喜て、猶その計策の、概畧を、數刻密談よ、及びて、後各辭して、回りけり、滿家の、その翌日、器九郎と喚出して、就盛への、回帖を、遞與し、猶恚々と、事の意を得させて、回し差しぬ。

第四十六回

一鐵を飛して賢婢強人を捉ふ
奇選を感じて忠士既往を語る



備の手練日數も経ぬに上達し今宵快も初技に狂かる賊を拿しと思ふ倍ていと憑しと言は垣
 衣畏みて想係なき今宵の危難賊の手術のあるものならんと豫て誨させ給ひたる賊摠技のな
 りせば争か脱れ侍りなん御蔭に依て助りし怪我の功名に候を復一郎が時よく撞見て促へ
 しの幸に候と言は姑摩姫うち照頭き技に誇らぬ儕の謙讓然而こそいよく看上たれ嚮に五
 十日樵隆光們が夜稠せしその時の蟲聲に殺氣ありし故に快くも前知したりけるに今夜の賊
 に入さる祥なし案に吾儕がうへまでよの拘らぬ的なる賊先疾仔細を問べしとて那押居たる
 便室の障子を開かせて尙克看るに件の賊の左眼に鍼を擲れて昏々と半死半生の休なれば安
 次の鍼を抜取り又腕先に立たりける銀の笄を抜て這奴の脆くも弱りたれば打棄措ば死もや
 せんさて支黨の穿鑿も仕がたく事の仔細も知がたければ嚮に賜りたる神草を以て今一番
 活し候なり如何あらんと規へば姑摩姫听てうち照頭さ餌の料簡最佳し然れどもさる愚漢に
 神仙の靈藥を費さん勿体なし只开莖を水よ浸して其水を塗て得させよさても奇妙の驗あ
 りて开奴が眼の潰れぬなるべし垣衣开首にも持有かといふに垣衣意得て守護符袋に収めた
 る活人草を把出し茶碗に清き水を汲て那神草を二遍三遍押浸せば安次の賊が頭巾を搔投棄

て熱と看てをるに年紀の四十に近かるべし色黒く頬骨荒て處々に蓄癩の癩あり一癖あるべ
 き面頬なるに不思議や頼に金印ありて二字の形を露せり痛瘡に張りて頭を低たる頭を引擧
 て燈の下よ善照れば垣衣の甲斐々々しく流るゝ血泣を紙以て拭ひ件の水を塗り塗んとし
 つゝ賊が顔と照視する事半時ばかり徐々よして那靈水を臂と眼に塗りそれバ神草の奇特擲
 馮く立剋も痛苦を忘れしよや那賊の己に復りて頭を擡げて人々を左見右見るを安次の聲と
 刷まじ破と脱視て這草賊奴が大膽なる去秋五日樵隆光が多勢を率めて夜稠せしにも姫上
 のかん武勇にて一個も漏さず誅せられたる开由知ざる事ありとと怎か來りて虎の鬚を曳
 んぞのあしけるぞ但しの人に懸まれたる賊真直に稟をべし白狀せすやと責問れて件の賊の
 阿面れる色なく慙なるうへの甚度をか匿ん這莊院に前番小倉をより賜りたる一千金の有
 とし听ば其を隠んと竊入て候處にその美婦人の只獨則舎に去を看若しかば立地にはを換て
 搔擾ひて娼妓に賣んと思ひし外の候の走候這地に參りしに纒に四五日以前なれば争か人に
 囁れん願くぬねん慈悲もて命を助け給へかしと勸解るを安次肯のすさる厩廐なる暗詰まで
 免れんと思ふの愚昧なり看れば武具に身を固めてれん便室近く入たるさへあるにこの垣衣

女を捕んとしたるも財寶にのみ眼を掛る草賊と等しからず好々何時までも白状のそまじき
 にこゝ僞ても寢を吐せやと腰の鏡扇抜把て立籠んとしてけるを姑摩姫の雲時と推禁め儂の
 料簡さる事ながら夜中の叫聲高くして聊不姓の處あり奴家直に問んどて那賊に打向ひ
 詞を和らげていひけるのやをれ盜賊儘に聞け和郎の必囑れたる人あらんに疑ひなし事の始
 末を包むとなく眞直に稟せしさらば命を助けもそべし倘又偽り陳じなば今立剋も斬て棄
 ん快々棄せといふ間に垣衣も詞を係て和郎の奴家を見識ぬならぬを奴家の和郎を見識たり
 今より十三年前の秋九月の某日に陸奥白川の關と渡瀬との間なる楫鎖といへる支村の産
 王神祭の試樂の日七才になりし女子を拐かして越後國へ賣んとしたる事あるべしといふ
 に件の盜賊の泉るゝまで大に駭き現のたまへばさる事ありき其を恚にして知給へると問
 へ垣衣さればとよ當下越後の不手山の麓に到りて和郎を欺ら樹杪に攀登りたるの奴家也登
 時旅の士人の伴信野多踰隨たるに奴家が難義を報しかば和郎の云々を陳せしかども尙許さ
 せて退挿稠拳へんとせられしかば和郎の逃んどしたりしが葛藤は足脚を賺れて千尋の谷に
 墜たるならずや爾來ハ又恚にして命助り道頭わたりに來つゝ今猶惡行の改らざして道かん

館へ竊入しハ甚麼事を群に稟上よ奴家の和郎が故に依て生做給ひし父母にハ會奉る事もな
 く尙種々の災危を脱れて這里に御座す姫うへに奉仕せぬらせ殊なる御恩を被りて身ハ今安
 きに肖たれども心の愁ハ一日片時も絶る事なき根源ハといへば愈是和郎が爲し業なり當下
 若識し和郎が顔面ハ年紀やく老て瘵さへあれを見紛ふべくハあら老かじといふハ件の盜賊
 ハ酷く慚愧たる色見わて頭を低て默然と回答も得せで居たりけり事の奇遇ハ姑摩姫ハいふ
 も更也安次さへもうち駭きて垣衣も向ひ原來儂ハ這草賊に幼き時拐かされて陸奥より伊勢
 路まで來れる人歟とハ今宵まで在下も知ざりき況て姫うへハ知食んやうもなし苦しからせ
 ハ絆由を委曲に告てねん疑慮を先晴させ奉らせやといへば姑摩姫も訝りて去稔の夏復一が
 歸來りし开折に垣衣和女郎を伴ひて故郷ハ伊勢にて遊れざる伴侶とのみいひしかば然有ハ
 養家の石倉氏にて結髪之妻なるべく當時維盈夫妻の斃死に忌服を重ねて受たればその謹愼
 にて呈愼にもさりとい道ぬなるべしと思ひにければ更に又故憲素生を問も糺させ一稔の後
 復一が服の明あバ煤灼して婚姻の義を結せんと暗にその期を等たりしに思繋さや復一も詳
 く得知ハ儂の素生陸奥白川の人ならんとい數百里の山海を隔たるに這惡漢に拐されし絆あ

赴んとて阿虞將曹が鎌倉へ年始の佳禮の使者にゆく。便船して養母老樹庶吉等と諸共取志摩國鳥羽港より出帆せし事の一五一十を細々と話説しかば、姑摩姫の聞く聲毎に感概大かたならせして話切なる處に至れば、或は怒り或は悲しみ或は悼みて嗟嘆の聲を絶ざりけり。安次も船に嗟嘆し捉へし賊が索端を傍の樞樹に繫禁め姑摩姫に一揖して椽側に前み上り、垣衣に向ひて道やら原來傳の稻城主の産子よ、あらせして脇屋殿の老臣たる館氏の女子ありける。歎這の今始めて承りぬ、那館氏の新田の一族大館主の庶流にて脇屋殿の御内にさる人ありと、我て伊勢にて听たる事あり、現江湖上の榮枯盛衰想ふにも背ぬ湖命こそ回すくも勵しけれ。さて這後の話説の在下代りて稟上てん在下の既に稟し如く養母が携子の弟に家を嗣せん。とぞる色を見て身を退んと惟ふものから別に驛卒に召出されて未一稔も立ぬ間に寸功だにもわらざれば、這儘にして退んも素養の罪のあさに非ずと案煩ひたりし比隊長ある阿虞將曹の國司滿泰卿の命よて、鎌倉の管領家持へ年始の嘉儀を演らるゝ使者を被りたりければ、在下も夥兵なるをもて晋物の韓櫃の宰領に隸られて同僚の者五六名と那韓櫃を護りつゝ、鳥羽の港より船に乗ぬ。此餘英虞氏の家禮も六七名あり。然るにこれなる垣衣女の母の老樹と楯取庶



吉と申候。彼は那津氏の恩徳と共に這船に便船せられぬ。勿論男女并別われは這人々の體の方なる一帯を繋りて在ければ正可に面へ照せねど那へ稻城の母女也と疾くも這首に隠候ひ。抑這稻城有勝ぬしの一隊の長ありしかば在下が養父石倉蜂六太和の宇陀より弓輕卒より召出されて伊勢の多氣へ移住し當下より稻城大人の影兵に黠罵られたれ。蜂六の平講に那家へ立入て内外の緯まで裏心なくせられ就て在下が七才なりけるを時々誘て去しかば守延夫婦甚く恨之這垣衣の信天女が在下と同稔なるに遊戯敵にせられつゝ色聲字の始より時をも誘へ露をも讀しめ晝夜習はせられしかば形の儼くに蜚蜋を記懸て候也。さて爾後在下が生長するに隨ひて馬槍刀の藝を教へ或は六船三響の一輪をも贈贈されて只子の一般最まされぬ。恠れども垣衣といふ十歳計の時よりして男女の別を正されて相見事許されず疎々しく候ひしに思係なく稻城大人の忠告耳に逆いつゝ國司の勘察を蒙りて五柳村へ退隠し多氣に在在なられしかば蜂六も亦他の隊長に属られて自然に疎遠に成候。恠れども在下の父母に等しき大恩ある官長也。且師也。恠でか辱を存せざる況て多氣より隠れぬ。ねば問暇ある折ごとく必五柳の橋筋を訪て露水の要事を傾じ傍に又所漏せる文武の教

此回安次が中事に往つた。序次をば自れ處を難言に如く己の如く出難言なるも其筆を省ける小説の法を看るに情態の盡さぬを答むる事勿れと云

諭を乞しかば守延酷く志をや感せられけん。或日在下を開室に招き想ふに和主が人品骨法輕卒の兒に似るべくも非ず又其才の睿敏なる今世に多々得難し是以多氣に在し日より文學武藝を學ばせしに程もあく上達して殆俺們も及びがたかり。然ればいよく最愛をて往々世話を探り聞しに蜂六に實子にあらで楠家の浪人隅屋某甲が落胤なりといふ者あり原來俺們が眼力の大々違へる事もなし楠木にて隅屋といへるの素より一族の長臣也とい既に聞たる事有き然らば家系も卑しからせと思ふよ着て一議あり和主も豫て知る如く俺に一個の女子あれと未さるべき婚もなし己に嫁すべき期なれば這首よりも那首よりも嫁にせん。婿に成んといふ者なきよ非れど今世の薄情なる文武忠孝兼備して二心なき莊夫の一個だに未着たる事なし和主の今こそ輕卒なれ這戰國の世も生れて類少なる老實人あれ。竟より名を學家を興し君父に忠孝を盡さん事鏡に照して看るが像し然れば女兒信夫をば和主が妻に娶せんと刺妻老樹にも商量せしに他も和主が幾年の志を感せしかば異議にも暨ばず諾ひたり。約莫婚姻の人間一生の大事なれば只赤心の賢愚を撰びて強て良賤を論せべからせ況や俺の退隱して蕪蕪に侶ふ庶人となれば和主が職役をいふまでもあし恠て承引ものあらば蜂六に示

譚して。近きに此議を料理んと道れしかば在下の思ひも依ぬ師の存念に呆るゝ事半時ばかり。條にして稟とやう物數ならぬ小可を七才の歳よりかん眼を掛られ文學武藝大小となく示教を賜へるうへも聊手足の勞を以て志を看へまらざればとて令愛を賜りて婿とせんとまで仰らるゝの骨に刻みて辱く九の世を更るとも忘遺奉るべく非老有難くこそ候なれ然れども此議ばかりの一向に御免を蒙るべし。开故の知せ給ふ條く小可が二才の時とやらん實父の託孤の命を受けて忠義の與に小可を襁褓の中より看放ちて所縁に着て蜂六許差したりと小可も頃日仄に聞知たり恚れども蜂六の些もこれを現さき多年小可を慈愛みて養ひたる恩義深く實の父母にも勝りたれば恚で孝養を尽さんと想ふ處に去回さ内事の碍ある故をもて小可を疎んじたり。然れば小可が身の浮沈の明日の緯も計り回し縦計普通の縁譚たりとも固辞すべき時候なるを况や大恩一方ならぬ名家の息女を賜ればとて此患難の中にして勞苦を係んハ勿體なきに極めて共に住難き一條もあり且世間の人口に繋りて名家の殿様になる事あらば恩を替もて報ゆるに同じされば此義のかん旨に違ひて假令御勘當と被るとも決して領掌致し難し許し給ひ候へと推辞しかども稻城大人の頭を左右に打掉てその又和主

遠慮に過たり縦令内事に障碍ありて怎なる辛苦に及ぶとも夫となり妻とならば开を厭ふべき事にのわらず信夫も往々教訓したれば艱難に克堪つべし。且又縁を結ぶとも必稻城の名跡を繼て異姓を名告れといふでいなしこの又別に仔細もあれば枉て道意に従ふべしと再三再四説れしかども在下強面肯のを強て過辭して回り七の分解がたき繼母の意味を猜して身を退んと想ひし事のあれば也との知せして稻城大人の尙さまに説れし間に料らざる泰勝が非道の毒手に身と亡れぬ當下在下悲憤に堪え葬送の事甲乙と力を合せて營みつゝ熱と案ぞるに稻城大人の横災の全く盜賊の所爲にあらせ往日豪奪せられたる信夫との在處を知て訟んとて大河内へ出立れたる折からあれば仇讐をば外に求るに及ばせ併照据なくして愁に手をも下し難し。什麼にもして照驗を得ば在下國司に訴へて信夫とのを拿復し助大刀して仇讐の事を願ん除非中流に船横のりて徒しく聞も容られぬ師恩の與に單身なりとも泰勝を狙撃て運拙くば斬死せんと想ひつゝありければ仕の途の我にもあらで鈍や月日を過す間に立刻達生の義侠にて泰勝の捉へられ信夫とのの還されたれど猶仇讐の一條の免されどと聞て本意なく想ひ折を得て身退く時至らば他郷へ出て泰勝を捜出し先討捕て師の大恩

を報せべし。と此首に想ひの立ながら。身をも心に任せ兼て稻城一家の達生が指揮に因て。東の方へ旋立る。由も英虞氏の話説に既く聞しか。在る下も旅装は暇なれば。五柳の宿所に去て。一臂の力を盡し事だも得ざりける本意あさを查し給ふべし。恚いふ情由で候へば。那船中にも他見を憚り過着倚て落着の地名も聞まほしけれ。折もわらんと不知顔にて。船先の方に候ひぬ。作者云此話説未盡ぬ。とも楮數の定限已に充れば。巻を更て第四卷四十七回の發端に分解るを聞ねかし。

開卷奇驚俠客傳第五集卷之三終

開卷奇驚俠客傳第五集卷之四

第四十七回

遠江の洋中。奸黨良善を溺し。難波の港口に老僧未來を示す。時候の四月の初旬。霞靄く海の面遙。船を漕出。そに當下順風。徐々に吹ければ。揖子帆を揚走らるるに。波を凌ぐ音。潔くして。船の去く事。箭の像くあれ。と倒疊席に坐するが如く。島々浦々の迭

此回の前回の終安次が話中の語より續きたる文なり看官さる意し讀べ

り往く形容繪に畫まほしき景色なるに。衆人興を催して。險不憂苦も忘る。までに或は睡り。或は又各々の話譚をもして。伊良古が崎を後に。なし新居の澳も快過て。遠江國御前の澳まで。來にける頃。夕陽西に光。燭て黃昏。近く倣にけり。英虞氏の海上を望め遣の。暮果ぬ間にと。準備したる酒肴を拿出て。稻城母子に勸め。なごし在下等を初めて。伴當楯子の者まで。各酒を呑しめければ。僉歡喜で順風を祝し。下戸の序次に。夕飯を吃べ。なごる間に。英虞氏の一聲叫びて。後さまに仰反つ。涎沫を吐く事夥しく。現心もなき容あれば。大家譁然と駭き。噪ぎ介抱せんとて起んと。とるに。齊一足痿腰麻痺。て毫も働く事。慙ひす。此抑甚麼といふ處に。一人倒れ。二人倒れて。一箇も涎沫を吐ぬ。のち。舟中。在下の平素より酒を嗜ねば。多く吃ざりける故に。や雲時。那此を助起。そに垣衣の信夫も。楫取庶吉も。亦是幼年なる故に。酔くも吃ぬ。故なるべし。其偈に立。噪ぎて。看病せんと。做けれども。竟に。同じく痿痺。れて。船中。に。臥たりける。任放心地。の甚くも。違ひ。せ。只手脚の運動と。物言事。の。慙ひぬ。而。巴なれ。向も。規ひ。居たり。し。に。枕柄。把たる。船長。一人。嚮より。酒を。吃ざり。しが。人々の。倒れ。果たる。を。看て。暗號。と思して。衝立。上り。て。脚を。揚つ。舟。答を。踏。と。履。鳴。せば。底より。簀。板。を。撥。反。して。現。れ。出。る。癖。者。四。五。個。先。此。那。の。衆。人。の。倒。れ。たる。光。景。を。看。て。

齊一呵々どちら笑ひ我老主公の謀略の如く此奴們の一名も残らず蒙汗藥を呑たれば死人に等しき的と做ぬいざ一端より結果けて陝海中へ投棄ねどいへば愈一答へて道やう如此せしうへん殺さん事の宿鳥を刺より容易けれども然爲ての船の血に塗れて港口へ着く候面倒なり刀劍衣類什麼にまれ金錢に成べき東西を奪て這儘水葬も好るべし縦令河童を欺く程の水練ありとも這様にてハ活復るべきやうになしと商量しつゝ先英虞氏の兩刀を奪奪て衣服までハ刺もせず凄たる骸を二名して擡起して柩の上より千尋の海と望みて水入と投入たりければ憐むべし槍刀弓馬の技にハ譲らぬ壯士も蒙汗藥を吃たる故に怎の術もなく押投られて當下西に落去く汐と共に流れて彌陀の在と御國に去れたりけなかし原來木造親政が开子の仇讐を報いんとて道船長に分付て稻城母女と英虞氏さへに失れんと巧みしにこそ悪さも憎し這奴等が百會微塵に所破て恩師の妻子を救いんと心意の彌猛に急吃れども眼を睜るのみ物だに言れを況て手足ハ働かねば甚麼とも爲術なく看るゝ十餘名の仲當を海に投没られたる心地怎ばかりとや思ひ給ふ宜く查し給へかしその中ハ庶吉ハ猶も手足の動けや這光景に堪へ難て踉蹌く脚を踏直し健氣にも小腰刀を辛うじて抜持つゝ前より立たる一箇の賊

が肩の邊を鋒外れに斬着たれば那奴ハ大に怒を起し這小豎子奴怎にかするを刀を下と打落せハ愈共侶に立籠りて這那ハ酒を吃ざりし賊殆かりきと喧響つゝ手把り足捕り拽張て亦復海に投んとせしを中より一個が禁めていふやうやヨ雲時等て道治郎ハ年紀より膝の太やかなるに生色皎く愛敬あり我老主公の日属より男色を好み給ひてさるべき龍陽を求め給へど未かん心ハ慍ひし者なし這小豎子と拿へ去て尙御意に叶ひなば我等が功を賞せられて褒美の望次第あらん縦令おん意に叶はずとも畢竟一個の小豎子なれば登時殺せども活せども料理よろハ許多あるべし這誼の如何と悄語ハ大家一齊諾ふ中に淺猿負たる一個の賊のみ猶殺さんとて怒りしを愈一勘解て納得させ帆綱と把て庶吉を舞々ど細めて船底へ撞と押入たり偕开次ハ老樹の刀自又垣次が事なるべし這術妻こそ今番の令郎君の敵手なれば這奴も拿へて大主公に奉らば奈何あらんといふを一個が諾はず否その女ハ拿へ去とも令郎君に従ふべくもなし仇敵を撃んなどいひし強情的と聞ゆれば過失なしともいふべからず尙事あらば我々が服落にならんも料り難し然れば可惜美婦人なれど只打稠て海龍王の后にさるこそ可なれといへば然なりと回答つゝ同じく水入と投没たる音を聞たる开折ハ腸を斷心地せし這



遠江の海中
親政然
行を復へに

比までも在下の最初倒れたりける時、燈有たる帆の下へ不意も轉落ければ、快く賊等に看咎められ、夢の如くに這光景を看つゝ、記臆て候ひし也。然間に御前の方より高尾舳一艘漕出し、這船を投て寄來るに、一瞬く間に漕近づきて、三反許に成たる頃、晝より明く押照たる夕月の光に附て、但見船前に立たる人、在りその打扮、亮然に所見ね、細鎖の甲手、鷹盾、腹巻もしたるなるべし。息を吹き、夾衣を被りたる胸に、金具、晃めき出て、月に光映を競ひたり。身材六尺有餘に見へて、色赤く、肉肥きに、月額長く、生伸たるが、黒漆の太刀、鷹尻に佩、做し、掌より一條の棒を把たる。赤檀木にやわらん、すらん、筋鐵繫く打たるが、丈八尺許あるを、最も輕げに、掉廻して、其船等と聲を掛け、寄よ寄よと、指揮する光景、名告で著き、海賊の大將軍と、所見たりけり。艦の方への部下と見へたる、一個の漢子が、半月に片手、箭挾て眼を配れ、バ楫取、兩個の汗を流して、喘々艦と推ほせに、艦方へ、寄んとしたる威風、烈しき形勢と、看て、奸賊等の着急、忙噪ぎ、手爾々々、艦楫を取も、されバ、猛可に帆を捲、通れんと、力を盡せて、曳揚るも、在下が不造化に、一、遍毒手を脱れたりしも、再這、胸は張上る帆に、撥れて、敢無くも、遙に那方へ、抛飛されて、眞倒に海底に入ぬと思ひし、其後の快くも、死入たるに、ぞ、わらん、毫も覺へ、せ、做にけり。已にして、人の喚聲の、忽然耳に入れれば、不圖

眼を開きて、是を看るも、年老て、瘦癯ひたる一箇の沙門が、耳に附て、こや、喃々と呼に、ぞ、有ける原未甦たりと思て、心を静て、四下看るに、乗合船とおぼし、く、貴賤老若、凡名が、取圍て、在けるに、垣衣も、再甦生して、沾たる衣の、儘ながら、开旁に、臥て、をり、那沙門の、在下が、魅るを見て、大に、怡悦ひ如何、心下の、儘に、做し、歎、且、這、藥、吃べしと、甚麼にか、あらん、丸劑を、一粒、投出、て、給ければ、在下、是を受、戴きて、即服したりけるに、香氣、馥郁と、臍下に、通て、汐を、吐事、夥く、心地、忽、清亮に、成ぬ、在下、やうく、起上、先、那沙門に、稽首して、再生の、鴻恩を、謝し、衆人をも、慰勞て、有し、次第を、尋に、那沙門、いられけるに、是ハ、伊豆の下田より、難波津に、去く、乗各船なり、貧道の、所、要在、て、土佐國へ、去として、這船に、便船つゝ、昨夜、遠江洋を、過たりしに、順風にも、非ければ、バ、汐を、等とて、澳中、は、碇を、下して、在けるに、但見、人死骸と、おぼし、く、流寓たる、東西あるを、蓬庫より、照火に、透て、看ば、最弱、男女、那、這二箇あるが、溺て、間も、無所、看、汐、膨脹、ても、非バ、貧道、酷く、可憐に、覺て、先、船頭、に、情由を、告、船中の、衆人にも、人命の、得難事、語急、く、説示、しいか、で、助る、的、あらば、這、若、男女を、助けて、贖ん、といふに、齊一同心せられて、力を、盡て、女の、死體を、先、曳揚て、看、めれば、猶、中、腕に、温氣あり、原來、男も、仔細、あらじと、亦、復、和主を、曳揚るに、同く、温氣あり、ければ、衆人、寄て、汐を、吐し、め、菘、菘を、火に、燒て、身、を、煖め、かど

するも何れも幽に呼吸出たりさて、蘇生に疑なしとて猶捕なく、馳る程、漸々氣息も確乎に
 做ぬさ、いと彼耳邊に附て呼生たれば、果して斯誕生られたるの寔に天幸といふべき也。宿
 世愛たき人々あるべし。抑和主の何處の人よて、什麼なる故に女と共に海に溺れ、せられけん。
 乗合の衆客の只是情死ならんといへり、奈何ぞやと問る、に在下の慚愧に堪ねど然氣なく紛
 りして否、這女中の在下と縁ある人への候、唯唯同船の伴侶也。今日しも鳥羽湊より鎌倉に去
 んと發船せしに、料ら走も海賊の奸謀に、酌り蒙汗藥を吃せられて、身體自由を得ざりしを、開儘
 海に投入られたる以後の事、毫も記へず、猶十餘名の乗合あり、且這女中の母もあり、伴當もあ
 り、擔物もあり、其等の人の無りし歎と問ば、老僧慰めて、その亦意外の災危なりき。四月初旬の夕
 月の已に入にし、後あれば海上に最闊くて、さる人々の看も留まらず、二ツばかりに追風に、倣て、汝
 さへ宜ひたりければ、碇を手繰、真帆を揚、又凡十里來なければ、今の悔とも暨び難かり、案に和主
 等二名の人の神佛の冥助ありて、運命強き人なればこそ、さる枉難の中を脱れて、這船に流れ
 寓れ、けめ甚麼、縁も愈前世よりの定業なるを如何いせん、さりとて、酷く莫歎かれ、那溺没せる
 人々も運ある、又斯箇様に命活たるも有ぬべしと、慰められても、垣衣の母のうへ、又庶吉がう

へさへ什麼成果けん。と惟難つ、右に左に去かん、未もたら涙の回らぬ人と、做給へる歎と思、蓋
 折て、只管に泣沈みてありけるを、在下、酷く屬して、恚りとも今更、道首にて、歎く、要なき事也。
 泊べき所に去泊たらば、在下も、共侶に、儕の所縁を訪ぬべし、心強く思ひ給へ、恚とも、神佛の冥
 鑑、竟、錯誤、老の悪人の手に失われ給ふやう、あるべからせといふ、間に、乗合の甲乙が異しき
 衣を、那、這脱て、假に、在下、門二名、著せ、薄たる衣服を、絞りつ、火に干なん、と、その程に、夜、黎明
 と、明去て、紀伊國熊野の澳に、來にけり、登時、船頭、在下に、いふやう、鳥羽より、出船し給ひしならば、
 又、那港へ、回らましく、想ひ給ふべけれ、と、去向を、急ぐ、快船なれば、儕、二位の、所以をもて、那里
 へ、漕回し難し、又、這、磯頭、に、寄んにも、巖石、巖々、荒磯、あれば、開も、亦、協ひがたし、されば、難波へ
 着ん、ま、で、辛抱、して、その、上、に、左も、右も、し給ひ、といふ、に、是、亦、推辞、べくも、あらぬ、心、得たりと
 回答、をしつ、盤費、の、腰に、纏たる、儘に、十四、五兩、齎りしかば、五兩、筋を、把出、て、先、船頭、と、與へつ、
 補助、られたる、謝禮、を、演れば、垣衣、も、亦、小六、が、分ちし、盤纏、を、失ひ、さりければ、是も、亦、五兩、を支、ち
 て、同じく、船頭、に、與へつ、向くれの、雜費、に、充るに、辞み、ながら、も、歡喜、受て、款持、初に、彌増、つ、垣
 衣を、親切に、勵り、粥を、煮て、進め、な、と、恚、而、又、老僧、にも、五兩、づ、十兩、を、呈、して、助命、の、恩、謝、を、想

けるに那僧些もこれを受き。その又益なき謝物也。旅の盤纏の夥からざれば。心細きものあるを
 思めて費に充られよ。人を救ふの出家の道なり。報を受ん。與に非せ。腹立しげに誓めて一切
 看顧もせざりしかば。在下又いひける。仰さる事に候へども。俺身に差當りて。做さき忠孝の
 勤あり。恠るを興腹に辨られて。只一事の做と事なくば。不忠不孝の奴となりて。黄泉は怨恨を遺
 とべき。よ幸にして。聖僧の慈悲に。命助られ。參らせたる。恩。今此三熊野の渾よりも。尙深かるに
 只些少の報も得せ。き。這儘徒しく別れな。恠の日。まか在下が心の安堵る。响あらん。屈て許容し
 給へかし。と。敷乞て止ざりければ。那僧僅らう。ち。點頭さ。さ。まで。に。云る。辭ならば。這船中の衆客
 も。同く苦勞せられたれ。酒にまれ飯にまれ。調じて。饗せらる。も。宜らん。愚僧の雲水に伴ひて
 且暮の露霜に。起臥し。艱難を。積て。功德と。する。行脚修行の者なれば。財ありて。却に佛意に背く
 處わが。されば。決して。受が。たし。といふ。と。在下。推回して。衆客に。東西。參らせん。と。豫て。心に。存じ
 たり。その難波にて。留別の時に。こそ。參らせり。這の。猶収め。給へかし。と。説き。も。更に。取敢ねば。爲べ
 きやうなく。い。なる。儘に。難波へ。泊。ば。衆客に。東西。饗ひて。謝せん。と思ひて。止に。けり。既に。して。其
 翌日の。亭午。少し。過たる。比船の。難波に。泊。しかば。乗。合の。衆客と。共に。船宿に。入。た。と。する。に。那老僧
 在下を。旁に。招き。我の。これより。船を。乗替。士佐國へ。下。る。也。就。て。和主を。相。する。に。忠信に。して。節操

あり。然れども。今までの。親族の。與に。辛勞して。志を得ざりし。なるべし。自今以後の。好き。主を得て。
 名を。擧。家を。起。と。べ。けれ。猶。い。ま。雲。時の。風。雲。あ。らん。且。亦。火。急に。災。厄。あり。て。終。身の。哭。喪。あり。是
 前因の。縁。る。所。な。れ。ば。甚。麼。と。も。爲。術。な。し。さ。い。あり。な。が。ら。所。親。の。人。に。必。一。度。遇。こ。と。わ。らん。开。後
 の。意。外。に。心。勞。も。少。か。る。べ。し。偈。ひ。たる。女。人。は。し。も。和。主。と。通。れ。ぬ。宿。縁。あり。這。等。の。事。の。後。に。必。思
 ひ。當。る。事。あ。る。べ。し。先。快。近。き。所。縁。の。方。へ。其。婦。人。を。偈。ひ。て。明日の。詰。と。赴。く。べ。し。好。せ。ま。さ。ら。ば。と。
 道。棄。て。飄。然。と。して。港口の。方。へ。去。ま。く。を。る。を。在。下。の。急。忙。く。推。扯。め。聖。僧。の。示。教。謹。で。承。り。候。ひ。ぬ。
 言。愈。身。上。に。的。中。した。れ。ば。向。來。も。必。然。ら。て。いと。辱。く。候。に。つ。さ。て。り。只。一。飯。の。齋。食。を。だ。に。進。ら。せ
 た。く。候。へ。ば。屈。て。姑。且。杖。を。駐。め。て。尙。御。教。諭。を。希。ふ。而。已。且。の。備。の。何。方。に。住。職。し。給。ふ。大。徳。に。て。法
 諱。の。甚。麼。と。稟。す。や。らん。願。く。の。示。し。給。へ。かし。と。謹。で。演。げ。れば。那。僧。の。立。駐。り。否。と。よ。葷。肉。を。喫。ふ
 なる。俗。男。俗。女。に。交。り。て。佛。餉。を。受。ん。や。う。い。なく。煩。累。さん。も。無。益。也。沙。門。の。本。來。無。東。西。何。處。か。投
 て。屋。處。あ。る。べ。し。和。主。が。主。君。と。懇。む。べ。き。人。に。の。舊。縁。な。さ。し。も。あ。ら。ね。と。今。更。告。て。甚。麼。よ。か。せ
 ん。只。忠。精。だ。に。怠。惰。せ。の。後。に。再。遍。會。こ。と。あ。ら。ん。と。袖。を。拂。う。て。悠。然。と。眷。顧。も。せ。ず。去。な。が。ら
 一。花。の。み。あ。ち。り。し。吉。野。の。夏。か。げ。に。な。ほ。た。ど。り。よ。る。人。も。こ。そ。あ。れ

と一首の歌を吟じつゝ、港の方へ下り去く。西を落々たる風骨に再び駐ん、有繫よて小雲時の
 开方を看送りて、イみたりしが、さても有ね、那船宿にて酒饌を設け、乗相の男女を厚く款待し
 金百匹充を支與へて、助命の勞を謝せしかば、大家大に歡喜て、舞み調ひ、酒を盡して、當夜の
 處に宿りけり。恁而人定まりて、後在下熟惟思やう、那旅僧の凡庸からぬ、甚麼なる人よて有ける
 か、既住を指たる一言に、未然もさぞ查せられぬ、火急、災厄出來りて、終身の災喪といわれし
 の、そも何事にてあるやらん、所親の人に遇んといひしも、誰が絆なるか、知がたければ、明日の
 且道里を出べし、但所縁の方へ去けと示されたるの、故里へ回れの事なるべし、歎きりて、歸り
 去たりとも、那仇なしたる親政の、目今第一の權臣にて、その奸黨充満たれば、訴るとも絆成るべ
 から、必然有とて、私に、擊果さんにも、那の所従多ければ、單身にて、本意を遂がたし、恁くて、日數
 を經るならば、忍に、搜索され、殉死とるよも、至るべし、除非、それの、朕の、ねど、思義ある、養父、蜂六
 を、連累せん、の、不孝なり、左やせん、右や、做まし、と思ふに、屬て、想ひ出る、河内の、所生の、父母を、訪に
 の、道首より、最過かり、忠義の、典に、思ひ、棄て、眷顧も、せぬ、親なりとも、適ば、去とも、いひ、るまじ、先快
 那里へ、訪去て、便宜に、因て、進退を、定め、ん、伊勢を、ば、嫁て、立退て、養父、養母の、素意の、如く、二郎を、世

嗣に立ん事、の、原是、希ふ、所也、さて、又、國司の、おん、典にも、一臂の、功を、奏と、べく、思ひ、たれども、是も
 亦、出役の、途にして、既に、命を、殞されて、一遍、死したる、一般なれば、後に、親政が、罪惡を、露顯し、訴へ
 て、勸解奉らば、全く、不忠とも、做べから、せと、念ひ、決めたり、ければ、垣衣を、惜々、地に、招きて、道首に
 初て、船中の、艱難を、訪も、し、訪れもし、つ、幼少の時より、して、迭に、認め、間あら、ねど、父守延の、庭訓、正
 しく、一柳村に、退きて、も、親く、對面する、事なければ、未見の人に、會るが、如く、互に、言寡きもの、から
 父の、横難母の、災厄、苦々に、問慰めて、さて、在下が、胸中を、簡様々々と、詳く、語り、かゝる、情由にて、有
 なれば、一旦、河内へ、偕ひて、實の、父母に、對面し、其うへにて、相摸に、まれ、伊勢に、まれ、送着て、所縁の
 方へ、届くべし、といふに、垣衣異議に、及ば、老妾の、婦女の、事なれば、いかに、思ふとも、只、獨逸け、逆
 旅に、去べきなら、ね、好も、悪くも、然るべき、様、料理ひ、給へるべし、如此なるうへ、何處の、人の
 手にも、渡りて、甚麼なら、ん、辛苦、目をも、見すべき、を、亡父の、所縁ある、備に、俱せられ、參ら、れば、
 猶、道上也にも、心強し、さるに、ても、我母親の、怎にか、做せ、給ひ、けん、その、み、適來の、憂苦に、侍れ、と、さ
 り、とて、何處を、極處と、索ね、ん、恁あるべし、と、知も、せば、我身も、共に、白浪の、底の、蕩屑と、成果て、這、悲
 哀の見、まじ、さを、現、江湖上の、憂苦といふ、憂苦の、妾が、うへ、一箇に、集寄たる、心地、して、命、活べくも

侍らせと。又潜然と泣沈しを在下酷く諫つゝ悔て回らぬ。尊言の千萬言も要無事也。自から念願して身と全して父母の體を報んどの思ひれどや。さりとも志願折せり。縦計念なる強敵なりども討果さずや。惜くべき不肖なれども在下も大恩稟たる師の仇也。共侶に幫助と也。て必稟せ稟とべし。と言に聊慰みたる。面色を看て心を安くし然ども若き男女二箇。共に走らば。季下の冠瓜田の靴の詭譎の免れ。原來先師の恩義に背けり。さればとて又在下ならで。誰か備を俱して去ん進退谷る心地のすれ。と那嫂の瀕に手を以すと云事有。明日一日の權に處して在下俱して參とべし。河内へ到らば。父母は絆由を惜々に告て爲術の幾個も有んと云て。當夜の紙戸を阻て那乗相の人の中へ在下の去て寝たりき。其詰日那衆人は早く別て一個の老實成僕を。央て道里へ來る案内者としつ。難波を出て參とて。路にて垣衣に情に言様。今世を忍ぶ備成は舊名を呼ん。小心無に似り。左も右も尚日に名を更られて。如何ぞや。と言は垣衣領て。妻も。とそ思ひたれ。什麼と成共念慮の隨に名着て喚べし。と言は。儘に在下漫の考へけらく。信夫の陸奥の郡名成を思慕と云に。懸の好は詠歌者流の斷て名高く。倣ぬと云成。又那信夫も。ずり。と詠し。垣衣と云草の葉を亂て衣は摺着たる也。と伊勢物語の一説に。言りし事も。听たれば。垣衣

を开儘訓換て加支々奴とせば。什麼あらんと。言は垣衣會得て。就て信夫を更めて。道首へ。參て候也。這より以降の絆も。日に知せ給ふが如し。思係ぬに。父母に對面したれども。絆の阻。離ひて。兩親共。不日及に伏たる。諸旅僧の言に。錯はず。終身の哭喪なりけれ。又不意實父の遺跡を續て。姫うへに傳さ。稟せば。亡父母の遺訓に。愜ひて。在下が身の安きに似たり。恚れば。伴の老僧。の回す。凡夫なら。佛菩薩の化現か。とまで。思はれて。候也。亦那洋中の海賊と。所見たる。高尾舸の壯夫の。甚麼なる者で。候ひけん。庶吉も。又如何ありけん。いと。听まほしく。覺束。あし。借垣衣のかん。身邊に。召仕。あるべき。せん。姁娘。だに。不自由の候なれば。幸にして。參らせたるに。心隈なく。御意に。愜ひて。一日も。無て。宜かぬ。やうに。今で。候へば。垣衣女が。心下の。憂苦。の。さ。こと。と。査し。候へ。と。在下。と。ても。無て。得。在。ぬ。目。今。の。身。と。なり。た。れば。稟。出。た。る。有。樂。にて。一日。二。日。と。猶。豫。ひ。つ。今日。まで。稟。上。さ。り。し。也。恚。箇。と。知。し。食。れ。ね。ば。姫。う。へ。も。亡。父。母。も。人。の。女。兒。を。扱。ひ。て。走。り。たる。なら。ん。な。と。偷。や。思。食。れ。ん。か。と。影。護。く。想。ひ。し。に。果。して。さ。る。御。推。量。あり。し。の。面。目。も。な。き。絆。に。こ。ぞ。候。へ。又。稻。城。大。人。に。説。れ。し。絆。も。垣。衣。の。听。れ。し。か。知。ぬ。と。も。當。下。に。と。ら。固。辞。じ。たる。絆。を。今。更。復。さ。ん。や。此。是。稟。上。べ。き。ま。ら。ね。と。那。人。の。鴻。恩。の。二。方。なら。ぬ。縁。故。を。顯。さん。與。ば。かり。也。恚

れば少しく間暇あらば垣衣女の藤澤へ送り去て野上氏に遞與させしめて在下が信義も立離
 ければ好黨等の間なく時なく隙と窺ふ目今の片時もおん側を立離るべきに非れば垣衣女に
 も恚々として稟听せ候ひしよ去方定めぬ躬一箇に垣衣への御慈愛を蒙りて未甚慮ばかりの御奉
 公もせぬバ今藤澤へいはずともよし假令那里へ到れりとも猛可に所要ある身ならねば尙何
 時までも垣衣へに奉仕て大恩の一端をも報い奉らんと稟とよ心安堵つゝさて過し候ひぬと
 首より尾まで漏さき脱さき述ければ姑摩姫倍々感歎し現様々の人身を听ハ念へハ聚散離合
 喜怒哀樂の迭代る江湖上の光景こそ不定なれさいふ情由との知ざれば備二人を夫婦ぞと念
 ひし絆ハ悪かりければさて前世の宿縁ありと那老僧の道れしならば後來必せざる所由あ
 るべし奴家も想ふ旨われと開い今議すべき絆にハ非ず原來危殆さ船中の賊難を辛うじて脱
 れたるハ希有なれと忠魂義胆貞操孝烈兼も備へし儼然なれば神明佛陀も見放給ハ老向來愛
 たく榮ゆべし然れども垣衣ハ母に別れて便なからん心中さこそと查したれども是も亦天也命
 也蓋命運盡せざる再會怎か其期なからん嘆かて時の至るを等ね然ハあれども藤澤へ去べき
 人を情なく奴家が故に駐めたるハいと無情なる絆なれば復一ならでもさるべき人に俱して

送るハ勢ければ今靈時道里に在て時を等あば悦喜の必あらんと思ふ所由ありされバ故人に
 邂逅て幫助を得る事多かるべければ急忙ハ要あさ事なるべし就て件の旅僧ハ摩甚ある人の
 果なりけん最々心愛さ人かな歌の意を以て案ふに南朝に忠志深かる人の容を變たるにハ猜
 ちければ然とてさばかり賢さ人の公家にも武家にも多くの听ハ公家ハ萬里小路中納言
 藤房卿武家ハ兒島備後三郎高德なごこそ文學和漢の有識と听しが終りしハ憊ならせ尙く
 ハム等の人ならん歎然れども高德ハ武士にて有ければ後に出家ハしたれどもいふ甲斐なく
 顔折て雲水に迹と斷べからずさらば吉野の先帝を諫難て身退れし藤房卿にもおハすべきか
 さハありあがら那卿の出家遁世せられしハ建武元年の絆としいへハ今より八十年去前の事
 也されバ百歳にも餘るべければ世に在さんハ覺束なけれと道徳兼備せしませば長生せらる
 まじきにも非ず是も亦後に至りて思議る事有なるべし又高尾船の壯夫ハ東西と掠むる海賊
 賊或ハ英虞將曹の難義を救んと來れる人歎考ふべき所由ハ無れと威風を示して漕舟たるハ
 那親政が阿蘇とハ決めて仇讐の人なるべければ那道戰爭ひたるにぞ有ん依て案に庶吉ハ何
 れましても一命を斷るゝまでよハ至らざるべし是亦道世に活命て天縁盡すハ會期有べし酷

く莫物を想ひと。道は安次垣衣も俱に然也と感歎して。開明斷を稱じけり。長話説に夜も更て。前裁に措く霜色も皎々倍りて所看たるに。葛城山の夜嵐風に吹る。燈火盡んとして。一番鶴の聲へとる。丑三ツも稍過しなるべし。安次佐と貌を更め。噫我ながら怠慢あり。這癖者を乳しも問で。机密多かる話説を犯し。最過失あり。乞や這奴が今宵の顛末白狀させんと庭へ飛下り。細の索拿詰てやをれ。盗人かん眼前にて。一事も漏さず。稟上べし。僞らば今立剋に斬て棄ん。奈何ぞやと烈しく。謝問むたりけり。

第四十八回

義に感じて騙賊昨非を知る
計を授けて勇婦偷兒と免す

件の賊の神草の奇特に憑て。被りたる手痕の痛苦も忘れしにや。頭を低て衆人の忠魂義胆の長話説を首より尾まで。熱聴て酔るが像く。黙々として居たりしが。今安次に。噴問れて。頭を擡げて。吐息と。憤き。連に歎息して。道や。比類少なる。備前の艱苦に。怯まぬ。豪俠義烈。揃ひも揃ひし。英傑のおん話説を。料ら。せも。承りて。三十八年造り。七罪事の。天恐し。さと。徐く。慮議候へ。始めて。夢の醒たる像く。最愧差しく。堪難けれ。快々首を。刻らるべし。されども。今宵這里に。参りし。緯の由を。

知食をいれん大事になる事も。わらめ。且小可が。身上の。懺悔話を。首として。かん災難の。繋るべ。仔細を。稟て。誅せられん。是併。僧侶の。忠孝。撓ぬ。御心に。感じて。只半時。も。善心に。立復りたる。報恩。なれば。緯長く。とも。所し。召せ。抑小的。も。祖よりの。騙局。盗賊にも。候はず。陸奥國。信夫郡。平田の。里に。棄四郎。を。まう。と。莊客の子に。荷二郎。と。喚做す。者で。候が。父の。農業の。間隙に。牧師。をも。して。けれ。バ。悪馬。を。自由に。飼ふ。を。以て。新田少將。義隆。朝臣。陸奥の。國司に。任せ。られて。下向し。給ひし。最初。より。かん馬の。鑣。取。召出。されて。身近く。役。せ。給ひ。け。され。バ。父。棄四郎。の。只管。主。君に。従ひ。参ら。せ。這處。那處の。戦争。にも。れん。跟隨。せ。せ。といふ。事なく。家。に。い。を。さ。く。回。來。ぬ。バ。小的。の。郷里。に。在。て。母親。一名。に。育。られ。し。に。打。懲。さ。る。ハ。人。も。無。れ。バ。成長。する。に。隨。ひ。て。懶惰。放。母。親。を。説。破。め。悪。き。遊。技。の。一。箇。と。して。記。隠。す。といふ。事。も。なく。年。紀。十二。三。の。比。より。の。酒。を。も。嗜。み。女。を。挑。み。從。ひ。さ。る。ハ。強。姦。し。賭。博。に。さ。へ。耽。り。しか。ば。只。惡。黨。に。交。會。ひ。て。書。と。なく。夜。と。なく。家。に。い。回。ら。ず。近。里。比。隣。の。憎。まれ。的。に。て。他人。の。訴訟。止。時。な。けれ。バ。母親。の。これ。を。や。苦。に。病。け。ん。小的。が。十四。の。春。竟。に。黄。泉。の。客。と。做。れ。る。當。下。の。小的。も。有。業。に。悲。し。かり。しか。ば。形。容。が。かり。の。葬。禮。を。營。み。五。日。十日。に。頭痛。を。して。外。く。も。出。ず。在。し。が。さ。も。咽。喉。過。て。熱。を。忘。る。ハ。譬。喻。に。漏。せ。惡。棍。夥。詐。を。再。哄。誘。され。

激勵されて就て四邊を徘徊し誰に憚る者も無れば悪行日々増長せしかば村長も持餘し父
 親に這由報ければ奉仕の暇も回來て屢折檻したれども馬の耳吹く東風と听流して寄謀ねば
 葉四郎も爲方なく小的が十五の年、村里の戸籍を削り棄て永く勘當せられたり恚りし後の
 回るべき家もわらねばいよ倍悪事に慣ふ身の因果然有とて勢力の人並に些の超たる所も
 ある、天稟自得の騙局を竊偷簞を飛び壁を走り他を瞞き東西を掠奪る本事の往昔の袴垂に
 もをさく譲るべくもおぼへねば自ら放と不良の賊心這首に初發て那邊此邊となく駆巡り
 て他人の東西を竊する時の夜發倡妓に交りて戯樂を締としつ鼎を陳ねて飽く事を知す尙
 又賭鈔に幸なれば縋紳一重に肌膚を覆ひ疵を被りて臥す夜もあれを些も怯まぬ腰胆勇竟
 に故郷を追却せられて或は出羽越後越中或は常陸下野上野五七箇國に横行して得たる騙
 賊を生活としつ然れども悪黨の中にての小辨口も利て慈ある俠氣も有しかば夥計の奴等に
 崇られてをさく此伏もせざりしに今より十三年前の春造化の最悪とてイむべき方もなけ
 れば竊に故郷へ立回り此首那首に躬を潜めて父親が便を仄聞ば去々稔の秋義隆貞方二名の
 相公の勢力没て陸奥と落させ給ふ折主君に従ひ参らせて出て往方も知さざりしが几程もあ

く義隆朝臣の底倉にて撃れ給ひぬと听にじからり葉四郎も殺されたるにどあらんぞといふ
 者ありしが身術なさに竟も助すてさて止たり恚て夏初より秋未まで陸奥に竊躲れて
 在しかど面識る者の夥ければ倒に江湖客とてさせる手段も出来ねば立去んとせし時に關の
 道方の楫銷邑の土産神祭の試樂也とて入賑ひしく立雄ふに往會せければ何にもあれ攫ひて
 些の路費を得ばやと思ふに七才許の女兒の愛々しきが里盡所に立て有しかば切ては是を扱
 して越後の新瀨へ買做バ路費ばかり有べしと猛可に動く恚心にて此して侶ひ去たりし
 さては儕で有つるよな又登時に小可を捕んとせられし伊勢の國司の殿人にて箱城殿とい
 ふ人あるが儕の開人に觀ひれ竟る災厄の基となりて听が如き艱難を受給ひたる勳しよ
 儕の父君館大人の少將さまの御近衆の首長であらせしり小的が父親葉四郎もおん部下に
 屬られて平素に参りておん恩顧を蒙りぬとの所知にささる人さまの女兒御とも知で扱ひ参
 らせたる遺憾は今更悔て回らす思のまに、斯罪あみて冤念を晴させ給ふべしさて小的の
 不毛山よて稻城ぬしに捕縛られ擽められんとしたる折不慮萬藤に脚を捉れて千仞の谷へ轉
 墮しに幸にして甦りたる其後の事恚々也箇様々々に候ひさて東海道にて長総と小夜二

郎を騙局に繋て盤費を奪ひし事よりして四老村の鈍梅藤松門が事また曾根川の鎌倉を騙て長総を助けし事それより這河内へ來りて五十日樅電次が若黨に做りし事又那夜稠の混雜に乗じて楠家の重寶を偷みし事より隆光を訴へて却て長総に訴へられ首を刎らるべかりしを就盛に放免せられて遊佐の城に在し事まで一五二十を詳く説て那長総の少將さまを底倉にて擧奉りし藤白隼人安同が妻なる由をも知ずして假にも妻よ夫よと喚れし絳の羞しさよさらずとも那奴の既に變心して小的を訴へたる冤恨あるに豪袁といふ老僧に通じたり情景あれ近日に慮知せんと計りたる事もあるを那儘にして死な事の有擧に遺恨にいへども廻將未練の諄言されば今稟ともその甲斐なし只等閑に做がたき木造泰勝が絳に候未知し食れずや那泰勝の伊勢を連れて今の赤坂の館なる持永主に昵近して現在那里に候りといふに駭く垣衣安次その亦甚麼にと訝り問へば荷二郎の泰勝が父親政より俊雅を想みて密に花洛へ上せし事それより滿家が料理にて偽使の與に泰勝を乞て道莊院へ差し事持永姑摩姫に繋想して齊天行者が幻術を頼み畧奪んとしたりし絳山積の荒出てその計の徒しかりし事どもを詳明に惜き告さて往る元日に泰勝遊佐へ使に去て就盛主に小的を乞ひ携りて持永主に

も前科を勘解て所従とし常に那身に隨へて仇を防がん事を課せ且長総が虚實を探りて小的が鬱胸をも散させんと道に依て小的大に便宜を得て稟とまに許諾しつ那達の小六さまの父親が主君の令郎也とい絶て知ぬバ這頭へ來か聞討にして泰勝が愛を艾んと約したり。恚るに嚮に泰勝が小的を携て回りし路にて伊勢にて使役ひ草履奴敵介と喚做たる的令郎不九郎と名を換て非人と做てぬたるに撞見し開夜小的を差して件の敵介に金を與へ身を裝へせて入稠せ同く駐めて隸ひたりさて或日泰勝の敵介と小的に酒を吃せて悄悄地に譚ふやう今番館の令郎の箇様々々謀り給ひて姑摩姫を得んとせられしに又姑摩姫に裏を透れて。齟齬ひたるのみならず正直の女苦子を以て換玉に爲たりしかば郎君大に憤られしを遊佐主様々に是を勘解て再謀らる旨あるに依件の事の差錯の秘て人に漏れぬと和郎に悄悄々に所る也必お他に漏れしそ俺も奮勵正直の庭の山より千里鏡もて八九の莊院を覗看し時別に一箇の美人を看たるに伊勢にて畧奪せたる稻城の信夫に最能肖たりさる故に郎君の御婚禮整ひたらば稟請んと約し措しにいと遺憾じと云ふを聞て敵介の不九郎の駭きて原來信夫を看給ひしか小可も擧日に如意寶珠院の門外にて信夫が上墳の代參に去たるを儘に見た

りといふ泰勝語りて什麼といふ開信夫が正可に那處に在んどの思も繁ぬ事ぞかし他の我を父の仇として狙撃んといふ由なれば前番父に告て他が東に去んとする船中よ人を伏て蒙汗薬を呑せつゝ結果給へといひしを父親の許諾し給ひし也其後我の花浴を出て道處へ下りてあるうへよ父親との表向絶交なれば便悪くておん回答の未儘に听ねども那謀行のれば這世に信夫が在んやうなし見錯へたるに非ずやといふに不九郎頭を掉て伊勢にて他を奪ひし折も三十日の別荘に在し頃も面を包みて看せざりしかば他の小可を知ねども小可の他を看錯ふべくもなし那上墳の回路よ小可鈔を乞しかば伴當の男が拿出て所來んとしたるに財布の紐の腋刀の柄に纏まれたるを解とて躊躇とる間に他の開頭よ行みたれば左の耳の黒子で脱なく認得て候いと道に泰勝大に駭き然りとて又這國への怎よして來りけん最精しき事あれば尙克眞偽を看決てんとてその日の他譚に移りしが昨日泰勝着急しく小可を喚て悄語やう明後日の郎河備の館へ婿入にとて出立給ふ其後乗のおん伴當の豫て我等に分付られたり恠れども那信夫が這頭居に由断のならせ依て屢推辞しかども郎君一切允され當惑道首に逼りたり就ての和郎に憑ひ事あり開の別の緯にもあらせ和郎の簷を飛壁を走る竊偷

の術の得たりといふに膂力も人に越たればいかばもして八九の莊院に竊び入て那信夫とればしき女を播擧ひて得せよかしさらば我その面を看て寔と信夫よ非りせば口説落て妾女すべく若又信夫に決らば殺して患の根を断べし萬に一箇も慥び難くば那女の出所來歴具に聞知て回るべし那姑摩姫の武勇剛桃丈夫に掙りしその上に隅屋某甲と喚做たる若黨ありて是亦萬夫不當の本事ありと聞ての唐々馬に乗て明後日の伴當に立のたかり和郎も其頭に小心して只願道義を憑む也といふよ小可の推辭難て成か否か知ぬも然迄にのたまふ事あらば一稼して驗むべし任地那姑摩姫の神に通せし術あれば竊に竊入て首を失ふ事もやあらん況や東西を奪にも非ず活たる人を奪するの甚難き業なれば褒美の奈何と期を推て泰勝に會得せ就て昨夜も道處に参りて那道と規びたれども内外の小心御堅固なれば隙を得せして徒く回り尙又今宵も夕闇を幸にして紛れ入宵より躲れて窺ひしに垣衣の、厠に去とて獨外面かたに出給ふを看て天の賜たへと走しり竊り矢庭に拿らへて走しらんとおもひの外なる剽業に立ち眼を傷ふられて恠く阿面々々と捕られ奉りの道地よ稟うすべき事として候ハ老快々首を刎られて那泰勝等が謀略よ乗ぬ御小必候べしと道よ大家聞竟て意外の

念慮を做たる中に垣衣の愁然たる面を擡て歎息し姑摩姫の前に額突て那木工介泰勝の妾が
 養父を害したる警敵で候へば軟弱き婦女の身あれどもいかで一太刀宛んと豫てより思ひ侍
 れど在家を知らば黙上たりしを廻くもあらぬ赤坂に在りし打も措れど然れどもさる權
 威ある宅内よ包護れて居んにハ輒く撃るべくもあらねど幸にして這賊人が妾を奪へて泰勝
 に贈んとして捕へられ今善心に復りしと自ら稟すに偽なくバ姑且這奴を免させ給へ妾の他
 に奪へられ去て泰勝に詐り寄宛を復し侍らまし假分仇をバ撃たりとも生て再遍回らん事ハ
 いと兇東なくこと候へ海より深く山より高き御慈恩を被りたる身のさせるかん役に立もせ
 で這儘に別れ奉らんハ最も可畏き業に侍れど誠之餘義なき絆なれば願ひくバ目今よりおだ
 暇と賜ひるべりもや候んんと日属ハ萬箇柔順にて風に靡る青柳のいとも沈静き小女子が父
 親の冤家の今眼前に在りし聴てハ恚をがに憤怨に堪ず魂緒を絶て撃んと言累ひ羞らふ色に赤
 心所看て有撃に脇屋の宰臣なりける館大六英直が女兒を所知て健氣也姑摩姫ハ那這を看つ
 ハ听つハ感歎して通徹妙き侍の孝義弓箭把る家に生れん者ハ婦人なりとて死を伯れんや誰
 も恚こそ有べけれハありながら難難き冤家を急よ撃んとして仇の刺客を案内よ立絆逐さ

るを知つハ开身を費に龍の住む淵に入まきする志の孝烈のさる事乍ら謀略の短きに似たり
 心を諍め時を等て尋常に勝負を決み常下撃とも撃るハとも只運命に任そべく只今絆を急可
 して竊に仇を撃たり共却て奸人の手に死バ世にハ孤孝を知る人もなく狗死せしに類せん歎
 さりとも忠孝の名聞にそる事ハ在りぬと武士ハ家名を惜みて祖先の恥を顧さぬが惣來皇
 朝の風俗なれば死をのみ忙ハ要なき事也道誼ハ奴家に任て惜ね遠からせして本意を達する
 籌策ハ几箇も有ん登時ハ復一も恩義の與に助太刀して那這共に兩全の美名を天下に揚さす
 べし遮真眼前の仇敵に威勢あればとて看つハ通して月日を過すハ俺身を擡て胸中の憂苦
 さこそと查したれど奴家も獲に仙媛の遺教よ背き奉りて單身にして義持を撃まくしたる錯
 誤より維盈夫婦を徒よ刃に伏しめたる折ハ千悔开首に及難く殆臍を噬たりさされバ前車の
 覆りし蹤ハ遠も有ぬ物を儂も後車の誠を愛時忍てわらばやと説諭されて垣衣ハ始て夢の塵
 が像く數回額突つハ諸神々しき姫うハの御明辨ハ蠢愚ある妾が耳にも最克入て御教誨の旨
 一々に肝入銘じてさむらふ也仰に從ひ時を等て尋常に名告係け勝負を天に任侍らん冤家の
 在所を聞たる儘に不覺に過り侍りしハ甚しき誤に候と言稟しつハ歡喜べば姑摩姫ハ打領さ

荷二郎を眷顧て荷二郎をやらん儘に聞け和郎が做たる年来の悪事の次第の神明佛陀も免し給ひぬ所成は只今首を刎可成ども幸にして垣衣を傷せ又衆侠の信義を听て心を更めたりと言れば今夜より一個の善人として云可なれ然れば今番の科を免して命を助け差さべし目今言し一念を翻さずして後々の人を幫助て功を樹今迄作し悪行を補ふ事のみかきせり天地の神明和郎が身を必罰し給ふべし意得たるかと告知せて復一开奴が索を解て快後門より逐出しねと言に安次眉を蹙め仰にて候へども道奴の几遍か人を騙り或は殺しあしをして大累机變に長たれば今一命を助らんとて前非を悔たる面色のそれを放たば復や悪念を發起せ可も料難し且乗人の机密をさへ聞識て候へば持永泰勝等と商議りて甚麼様の災を懸出さんも知可らば只快他が望に任て誅戮し候ひやと言は姑摩姫微笑て解の遠慮へさる事乍ら他衆人の忠孝に感て自ら开非を知り今宵よりして善心に立回りたりと云めれば除非开言詐偽成とも是を殺し善人を傷ふ也又人を殺者の必殺て免さるる古今變ぬ法曹成を嚮に他に殺れたるの慳貪不貞开身を遠て天誅殆及不可者共成べ訴すして殺たるも姑く免を事あらんか借亦衆人の行状を白地に聞知たるの辞の不便に似たれども約莫英雄豪傑の隠れたるを行

いせ其事青史に載られて千載の下に傳とふも美譚と做るべし節操を立おは天地に亂して羞ることなしされば即今听たりし野上著演達助則英直夫妻維盈夫婦債二名いふも更也守延の忠目四郎が俠楫取庶吉に至るまで怎れか志士の所爲ならずとせんされば开緯室町家へ听へたりとも異うのわらせ抑民の父母としていさる善を揚惡を懲し縦計怨敵たりとて開忠信を賞してこそ國家の治り果べきを義持心窄くして南朝舊臣の裔といへば根を絶葉をも枯さんとするの寔に薄情事ども也されば新田楠木の餘流と知ば害心なしともいひ難けれ是亦天なり時運なり君御聖運幸からは开方さまの人々の性命も全かるべし倘又御聖運傾かば誰と侶にか活命て仇讐を共に白日を見んこの助則も同志なるべし又持永泰勝們の斗屑の小人們なれば怎様謀るとも丈尺の知れたる辞どもあり機に臨み變に應じて遺有にもよらじんとするべし但し垣衣の荷二郎にふるさ怨みもあるなれば殺さましくも思ふべけれど今また冤家のありかを報たるす功なしともいふべからねば放ち遣ん賊甚麼とやと听て垣衣いかに背かん宣まふやうも荷二郎の妾のわかれわかしたる者なれとて殺したるにも非らば今の忠告に想もひ換て怨みを遣へば侍らざといふに姑摩姫領事とてさらば復



九百三十一



九百三十一

快回しね。天明に程もなりぬるに奴共々に知れて、又妙ならぬ處もあり快くせよと着急す
 れば安次殆ど感心し現姫への御明論今に始ぬ事ながら寛仁大度のかん料理の感伏の外候
 のぞたすくろを荷二郎とて索を續きて俺腰に差たる他が腋刀をいざとて選與せ、荷二郎の
 只平伏て頭を地へ着、四十年來一滴の泣水を知ぬ暴夫も、絆の始末に感激して聲と放ちて哭居
 たりしが念ひ難てや、腋刺の刀をとりと引拵て自ら咽を刺んとするを安次透させ、踏落して
 狼唄たるか荷二郎よ、恚辱き姫への理義を諭して許させ給ふに今更目害せんとする、未悟
 らせや醒すやと罵り懲せば、荷二郎の徐くに泣水を拂ひ、愚鈍の耳にも理通たる御教訓の趣の
 をさく、辨へ候へば狼唄たるにのらねとも熟思うても看給へかし、比年日属几番か他の難
 義と看も願らで財を奪ひ人を售り父母妻子は、歎悲を係たる哀を這首に感知り悟りて見れば
 是だにも活永經て在れんや、ざるを況や俺父親の恩を棄たる館大人の令愛を拐して、盡ぬ枉難
 を繋參らせ、知ぬ事といひながら、主君少將さまの公子たる小六殿を仇として、狙撃んとした
 るおど、死とも罪を贖ひがたかり、恚るを今宵這御館へ、竊入つ、垣衣ののど、捉へんとせし
 罪をも問れと首を接れたればとて、遁れて赤坂へ回らるべきか、かん身の猜ひ給ふ處、悉く开理

あるを、侍姫への御心長く、机密を聞たる、小的をみ放ちて、願み給へばとの御心、廣きかん料理
 の大丈夫だに、做得難き御胆容を想ふも、若ても只差愧べき、我身のみ、且就盛泰勝們に、譚相れ
 しの過差なれと、就盛に、助命の恩あり、泰勝も亦、小的を知たる好意なき、よわらぬを、遺憾にし
 て、北も走らば、亦是人といふべから、老怎れにして、今宵に限りし、小的の運命なれば、只快允し
 て、死しめ給へや、と、喃々とうち、勸解て、啣首がまし、口説く聲も、曇りて、小亂る、泣水の雨、
 悪念を、洗ひ流し、つ色見へて、誠實の自然と、現れた、り、姑摩姫聞て、感嘆し、通微妙、和主が、覺悟今
 宵よりして、善心に、立も、回りし、羞惡の、端感、さ、餘あり、現惡に、強き、善にも、亦強しと、云俗
 の、諺も、和郎が、身に、今宵首めて、看る事を得たり、然らば、和郎に、踏ま、べき、一件の、机密あり、這方へ
 倚ねと、喚近着て、目今、死る命を、存在へ、罪を、贖ふ事あるを、克爲べきかと、問撃れ、荷二郎思ひす
 うち、咲て、死を、のみ、急ぐに、候は、ねども、唯道理の、差急て、自殺せんとし、候を、倘存命で、ね、與に
 做る、絆、わら、頭を、碎かれ、骨を、刻まれ、候とも、辞す、べし、候、す、と、不覺に、勇ひ、聲高、やかに、意氣
 憤然として、けるを、姑摩姫の、噫、莫、喧と、推禁、めて、聲を、惜め、和郎が、心底、さ、ぞ、有らん、那、歌、店の、目、四
 郎が、野上、史の、高義に、感、上、善、心と、更めて、藤、白、隼、人を、撃、たる、よ、操、ら、ぶ、を、ね、の、非、ね、ども、那、泰、勝、の、

特永が庇陰に倚たる大政成は垣衣一個が力にて即今撃るべきもあらぬを和郎幸に立回りて
 幫助て仇を撃しめなば主君にも亦官長も恩を報する一端なるべし開計策の恁々也箇様々
 々と事詳悉に囁き示せば荷二郎の耳を傾け感心して仰承り候ひぬ現も美じきおん料理也さ
 らば暇を賜りて赤阪の宿所へ回るべし但遣儀回りて他小的を猜ん欺希くは恁東西にま
 れ竊入たる証と做るべし東西一箇借給へといふに姑摩姫領きて開頃の用意決めて佳も垣
 衣を願て儂の衣服を一個出しねと分付て荷二郎に運與させ遣小袖を以て恁々道は泰勝必猜
 ひし又豪衰とかいふ悪僧の聊の幻術わりて甚摩をも前知する由なれば開奴に知れぬ様ころ
 われとて嚮に垣衣が水に浸し、神草を乾すまで机上に措るを奪てこの神仙の賜ひたる人間
 にあき靈草されど姑且和郎に貸借べし遣草を身に属たるならは豪衰恁なる術わりとも和郎
 が意衰を知る事能ひ目今痛瘻の頰に痊しも全遣草の功驗なれば勢々鹿齒に思ふべからそ
 と説諭して與ふれば荷二郎の雀躍して酷く歡喜び體符靈を解開きて件の神草を受取めさら
 ばとばかり身を起し三拜しつゝ那小袖を閃りと肩に打懸て後門の方へ出さばいゝと頻る
 鶏の聲に紫だちたる横雲の色も東の空に所看て奴隷が咳く庖漏の後を那離時の薄闇霧に

紛れて回りけり。

作者云此回の次に北島俊雅河内へ來りて再遍姑摩姫の婚姻を促す事又荷二郎が赤坂へ
 回りての所爲垣衣が復讐の事豪衰長総們が頼末と著とべく思ひしかども然而小六が
 出現を話とるに聊妙あらぬ所あれば赤坂の一條の姑且後集へ譲りて次回より小
 六が事よ及べり看客請事の治定せぬと忍び給へかし

開卷奇驚俠客傳第五集卷之四終

開卷奇驚俠客傳第五集卷之五

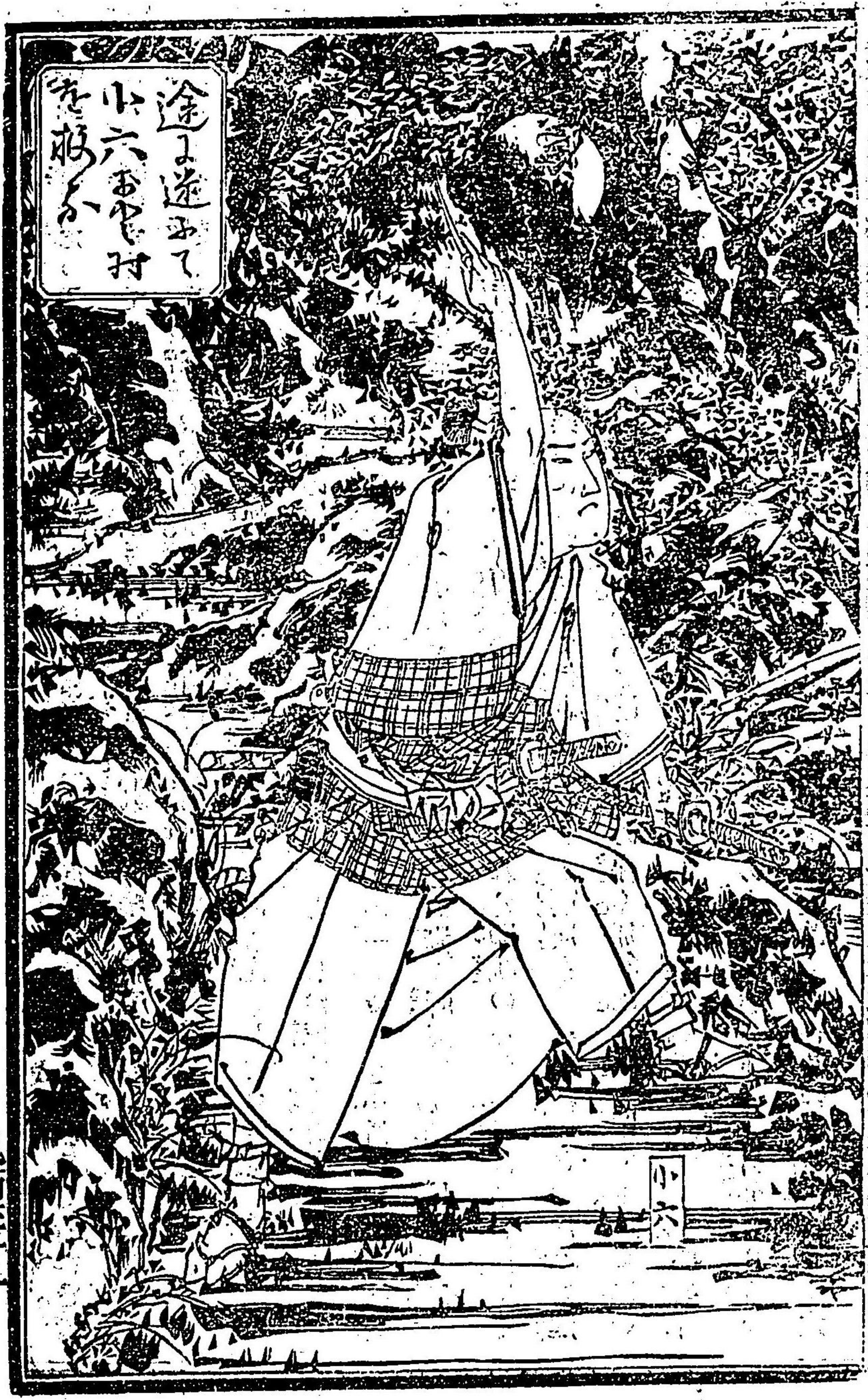
第四十九回

鬼窟越に豪俠妖物を斬る
 柳原宅に莊官勇士を誘ふ

前話休題却説達小六助則の志摩國鳥羽の港にて老樹信夫庶吉們に別れてより太神宮へ參詣
 して五柳村へ回去き稻城守延が墓碑を建追薦の法廷を開きて林客等を饗應し果つ遊る處も
 あかりしかば今ひとて暇告て五柳村を立出つゝ先攝河泉三州より和伊國に至り熊野の奥

を一見して。開後に四國鎮西までも編歴せんと。慮ひしかば。今番の伊賀越を河内へ出んと。志し立出けるに。其朝の村客等が送來て。離別を惜みたりけれ。井頭の日誼は。時刻轉りて。午下る比五柳を出しかば。春の日なれを程なく暮て。垣内の坂に掛る頃。既に快無昏に近かりしかども。今日這山を越んと。豫て慮し。緯るれば。四月初旬の夕月を。便に山徑に入る程に。怎よしてか。の踏錯へけん。鬼窟越の山路に。横さに迷ひ去にけり。抑這鬼窟越といふ。伊勢國一志郡神原の一坂より。伊賀國山田郡坂下村へ出る路にて。程の三里に足ねども。極めて嶮岨の九折にて。山中に支徑多く。惑ひ易かる所なるを。小六什麼の心もなく。脚に任せて分入るに。月を遮る樹下闇にて。樵夫の通入徑路より。山腹山に迷ひしかば。去きもく。人家はなく。月も殆雲隠れて。没方の空になりける。一徑の末の漸々絶て。巖石岨々。峙ちたる崖の上にて。出たりける。原來道路踏錯へてけり。恚とし。知バ山口にて。委く訪て來べかりけるを。脱落まけり。と悔めども。今更に立回るとも。人家まで出るも。容易からねば。除非今夜の道首は。明して翌朝徑を覚め。まづ人跡絶たる處よも。あらず。樵夫等にも。遇ぬべけれ。然而。この去向と問へけれ。と既く。思慮を決めければ。傍邊の樹陰に。紫拆敷て行囊を。解下し。茂る新葉の露打拂ひて。膽太くも。睡んとするに。肛裏冠空て

おぼはしか。晝食の割籠の。猶重かるを。拿出して。吃めつゝ。熟四下の景迹を。看るに。絶壁の下方に。の谷水ありと思しく。漲る水聲。滔々と響き。松の嵐に。咽び會たり。四方の。嶺青山にして。恚地を開處とも。看分ぬに。春の餘波の。微霞。霧さ立て。朦々なるに。月へますく。暗くなりて。只杜鵑の。朋喚。公聲のみ。那邊這邊に。所听たり。歸るに。如じと。啼といふ。事を想へば。是も亦。慰め難て。離別に。し。信夫老樹。庶吉等が。うへさへ。漫に。幕かれて。悵然として。イみけるが。水を飲んと。溪に。下る。往を。覚めて。不覺に。一町ばかり。立回り。小篠が。本を。搔分て。下んと。せしに。怪しむべし。谷の。底は。物音し。て。人の。私語。く聲の。像し。恚小夜。更たる。山中に。人在るべく。の。所思。ぬを。山豪。などの。迹を。跟て。窺ふ。緯も。あらん。賦と。想へば。些ども。由。斷せず。茂林の。間に。躬を。潜めて。徐くに。近着。寄り。尙光。景を。看究んと。て。脚を。駐めて。覘ふ。間。一。稍。山。端に。没んと。する。月の。前なる。霞雲の。儘に。露に。斜に。射たる。光。暉に。开方。を。屹と。瞻。遣れ。バ。這。谷。水。の。巾。丈。餘。にて。奇。巖。岨。ち。老。樹。覆。へる。前。向。の。岸。に。平。面。なる。大。石。あり。る。そ。が。上。に。年。紀。猶。弱。き。一。個。の。婦。女。を。脛。も。顯。露。に。押。伏。居。て。什。麼。とも。得。知。ぬ。妖。物。の。丈。五。六。尺。も。あ。ら。ん。と。看。ゆる。が。匍。匐。繋。り。て。犯。す。也。け。り。小。六。の。最。も。不。審。く。て。心。を。靜。めて。尙。克。看。る。に。婦。女。の。酷。く。魅。せ。られ。けん。さ。し。も。怕。たる。色。も。なく。件。の。妖。怪。が。頭。を。抱。き。て。身。を。委。せ。たる。景。迹。な。れ。ど。黒



途に迷ひて
小六の村
を極ふ



大石

髪長く蓬れ懸りて正可まことにとも解わかがたければ尙なほくの這怪物このばいぶつの唯ただにやめると我われもて看れど着きたる衣裳いしやうの色までも人に紛まぎひの無なりければ義侠ぎぎやくの心怒頭しんどかづを衝つて這畜生このらくせうり奴やつが不敵ふてきある萬物ばんぶつの靈たまたる人を魅まして恚いか恚いかに舉動きうどうふ事憎にくても尙飽足あはれたりず咄嗟とつさ剛才ごうさい這奴このやつを擊殺うちころして這婦女このおんなを救すくずの竟つひにの命いのちを喪しふべしと念ねんへば快はやく谷水やみづの邊へに徐々じゆじゆ下立くだりて渡去わたんとしたれども水邊みづべの倍暗いせうくらくして水聲みづなま高く激ありたれば底そこの深ふかさを測量そくりやうかねて聊猶いさうかう豫よしたりしが忽たちまち屹きつと意い着ちて刀かたなを着つけたる小刀子こがたなを抽出しゆしゆして鉞せき劍けんに狙撃そくげきんと近着ちかづ寄り間程まはらさき椎樹しゆじゆの一幹ひとこ立たるを小盾こたてに把とて那妖物このあやぶつを覘看うかがるに快樂くわらくも餘念よねんなければにや小六せうろくが寄よるを知しざりしが漸しゆくしりが漸しゆくしり所ところを外はずれたればにや岸然がしぜんと起おげに看顧くわんごる處ところを看得みして丁ちやうと打出うちす刀子かたなの的めの些せう外はずたれど咽喉のどの左ひだりの盡處げんじゆに柄口へがくち逼せめてぞ擊うち稠ちゆうたる不意ふいを擊うちれて奇異あやし氣きに一聲ひとこゑ叫よびて倒たれんとせしが窮所きゆうじよを外はずれたればにや岸然がしぜんと起おて婦人めづを打棄うちすて立たたる小刀子こがたな搔拐かたがひ棄すて小六せうろくを認みて飛鳥とびの像さかく那谷溪なやせきを跳とり踰こりて椎樹しゆじゆを阻へちがらに搦なみ若わんどじてけるを小六せうろくの腫はれが身みを反ひし快はやくも刀かたなを曳ひ拙ちやくて透すさせ斬きるを那奴このやつも亦また眼疾めは疾はやく左ひだりへ引外ひきはずして躍なり躡なるを搔潜かひこり沈しづんで擊うちたる二ふたの太刀たちに腿ひざの上うへより鉞せき外はずれに斬下きりくだられて妖物あやぶつの協あひしとや慮あひけん一聲ひとこゑ高く吼ほんけり那溪水なせきを飛踰とり方往かたへも知しぞ逃亡にげけり小六

の猶なほも擊止うちとんとて眼まなこを追おんとしたれども那溪水なせきの激浪げきろうに阻へられて擊漏うちらし齒嚼はをせて立たりしが恚いかも飛捷ひせつの物ものとし知しら組伏くみふて刺さべかりしを脫落だつらくにけりに悔くめども今いま及び及び難がたければ刀かたなを拭ぬひて刀室かたなむらに収おめ傍かたはの水邊みづべに投出なしたる掬かの樹枝じゆしを拽寄ひきよ携せりて身みと輕かろやかに反撥はんぱたりければ難がたなく前向まへむの岸かたに渡わたりつと且かつ快件かいけんの觸ふり上ありて那婦女なおんなを看みてあれば酷いたく魅ませられたりとおはしく听きに得堪たぬ膽膽たんたんを吐はつと現心げんしんもなき容体ようたいなれば看みるに忍しのびせ腰こしに着つたる藥籠やくろうより藥やくを投出なして谷水やみづを掬かひ上あり口くちに含くめて鉞せき劍けんに雲時うんじありて漸しゆくに俺おれに歸かへりしにやあらん起上ありつと四下よつたを見廻みまわし只呆あれたる情景けいけいをれば小六せうろくの詞ことばを和ならげてやよ婦人めづ心下こころの慥たしかに做なたる歎抑なげ和わ女郎やうらうの何處どこの人ひとぞ這處このところの伊賀越いげえの山中やまなかにて人跡ひとあと希まれなる處ところなるに和女わおんなが妖物あやぶつに魅まされて危殆あやうき景迹けいせきを看みるに忍しのびず开妖物あやぶつを擊うちんとしるに那奴このやつの痛痕いたでを負おながら疾はやく走はりて逃亡にげたりといひれて婦女おんなの淺痕あやまく又また恐おそしく羞はじさにや袂たもとを顔面かほに推覆おしあて只潜然さめと泣なのみなれば小六せうろくの然しかとぞ慰なぐさめて現悲哀げんひあきの理ことわりあれど既に命いのちに救すくひたれば家かに回かへるも難がたくの非あを静めて仔細さいしゆと説話せつわぬ身み中に怪我けがのなかりしら俺おれの伊勢いせより伊賀いげへ越こる旅人たびびとあるが路みちに迷まよひて料はからず道頭みちづかへ來きるに往まり徑みちの絶たれば今夜このよを這首このこぶしに曉あさんと思おもひ決きめたりけれども和女わおんな

郎が家の遠からずば剛才より送り得させてん甚麽ぞやと問けるに婦人の辛うじて泣水を押へ。怎地の御方か知す侍れどさる厄難を不料も救ひ給へる御鴻恩の生々世々忘却侍らじ。奴家の伊勢の榊原なる莊官與六作が侍妾にて名をば小鶴と喚れさふらぬ這熏昏ま主人の外孫の奴家が子房に來給ひて這方へ來れといわれしを甚麽意なく隨ひて出ると念ひし爾來の我にもわらで家宅を出開處とも知ぬ山中に侶れて去と所思しよりの夢幻とも解がたく唯絶息てや侍りけん毫末の絆も知侍らざらね妖物とのたまふの什麼ある物で候ひしかといへば小六の黙頭て原來那畜生奴の和女が主公の外孫と化つて此誘し出て念慮の儘に慾を遂んとせしにぞわらん恁没候の月夜にて形體の決に看留ねども頭髪を亂せる像く最長き毛の生累り眼の光凄しく吼たる聲の山彦に響きていと太やかなりも最初小柄刀の銚劍を咽喉の傍に撃刺たりしを衝立て掻爪棄跳り落れる身體の輕やのさの年經る彌猴も彷彿たり彌猴千歳を歷る時の業通を得て人語を解し克身體と化して人と變り人家よ入て東西を偷み且又开性多淫よして美婦人を看て拐し犯して後に殺して喫ふ是を狒々と名若る由唐山の書に看たる事あり亦本朝にもさる絆あり美作國中山の神の彌猴磨にて每年少女の生賢を供せしむしを東

人の武勇ある者欺き捕へて其暴戻を治めし事載て中古の譚籍に見ゆ案ふよ件の妖怪のその彌猴磨の獅々が類敷道頭に傳へし話談のなま敷といふに婦人の般に懼れ身毛も彌立ばかりにて戰慄さたりけるが徐くにして對へていふやう恁宣へばさる事を夜話の序に所し事侍り這伊賀伊勢の境の山へ東西のさばかり長からねど南方の幽邃くして吉野の奥なる臺原巴が淵より紀伊國の熊野迄も接されれば凡十里といふ際限を識ずされば異形の獸物も種々來り往む中に最老大なる彌猴有てをりをり道頭へ來渡りつゝ村里に入來て東西を喰ふ婦幼を扛攫ひて携去といふ噂の侍れど看認し的の侍らざるとされども數年の間に三人五人去方を知せ成にし人の必ある故國司よりも嚴しく令せて獵人どもに賞錢を募り普く狩せ給へども影だに看せと稟すなるを却也柴樵る山人ども不意て那老彌猴を看たる者も甲乙われど男子に會て仇を做せと稟傳る由なれど奴家の近屬榊原へ來りし者にて候へば委さ事知す侍りさらば件の妖怪の必開彌猴疑ひなし今こそ君がぬん武勇に逃走りて侍れども开春風等を率連て再び來なば甚麽せん噫伯しと轟け小六の所て打笑ひ开邊の事心安かれ假令那奴が徒類を凡個率連て來るとも我にも亦手段あれば酷く怖畏る事勿れ原來その云傳へ

たる老獺奴にてありけんを撃殺して里人の後の思を除きし。いと不便なる事ども也。されども脚に瘡を負せれば再遍那奴の来るまじ。といひつゝ、腰の燧石を拿出て用意の火繩に火を移し四下の枯柴拾集めて松明四五把造り出し。火を吹付て嚮に投たる小刀を索るに那妖怪が抽棄たる時旁の松樹に立たりしを抽取て血を洗ひ袖に拭ひて刀室より着け這溪水と熱視る。水は却也淺くして二尺に過じと見ゆるに。小六の四下の大石を輕やかに更穿ちて二個三個並べたれば俄然石走出來りて渡るに累ひなかりしかば又前向へ超去て那稚樹の下を看るに斫たる時の獸が血を草さへ朱に染てあるを猶火を照して着てあれば那妖怪の指にやあらん。薄黒き毛の生たるに白銀の像き尖瓜あるを二本まで斬落して有ければ取上て猶熱視るに。毛の強きこと鐵の像く瓜の利き事刀鋒に似て寔に希代の異物なれば棄て措んも有弊にて谷水に血を流し懷紙を拿出て彌重に包めて腰より着れば件の婦人も渡來て怖る。差覗きて舌を振ひて俯伏くを小六のやをら眷顧て空うち仰ぎていふやうに。恁夕月の没果たる闇き山徑を遙なる榊原まで出ん事。最も難義の事なれど未年若き和女郎と三個這山中は曉して心も愧る所ありされ。剛才より打照して宿所に送り届くべし。とてその疲れたるらめを這

理を听解て我に跟ひ來るべしとて嚮も憩ひし所に去て行囊を収拾め松明振て前面に立ば。婦人ひいかで背くべき。只唯々を應答つゝ跡に跟て喘々去ど。いそれ。疲果て樹根蟻根を踰難る。を勵め慰め扶け曳て原來し路へ立回る中に小六の遠慮を廻らして懷紙を引裂つゝ。這首那首の樹枝に結着て棄としつ。後よ人の猜忌ん折の照鑿の爲も。殘したる火速の準備感さべし。恁箇這支徑を峯より上り谷に下り約莫二里許も來つらんと思ゆる。比去向の方に火の光隱々として所看初て漸人の近着く。聲齒に所听たりければ。小六の耳を敲て近寄るまじく。熟々听ば。這婦人を索るなるべし。數人の聲として小鷄も啼とぞ叫ぶ。されば振顧て女に向ひ。那前面ある人聲の正可に和女郎を搜索る人也。近着に問ひ有まじければ。我の這首より袂を分ちて伊賀路を投て踰去べし。我今件の衆人は會て儘に和女と憑與すべけれど。那這等しき男女二個が夜の山路を伴ひたれば。後に尙人猜ひ。和女が與にも妙ならず。我も亦影護さ事なきよし。も非れば。故意這首より別るゝ。と道棄て去んとするを婦人の慌忙しく。拽扯めてのたまふ所理。されど奴家の已に妖怪に供誘し出されて命活べくも。あらざりしを。君の御武勇の補助に依て。再び家に還る御恩の譬ふるに。物もなし。とるを儘に一片の報酬も。做で別れな。獸に等しき者なるべし。風

柳原まで來給へかし最羞愧しき事ながら奴家為主翁の六十に餘りて愚は直なる人なれば猜
 ひ奉る事のあらじ若恩人を偪りず倒酷く叱られて猜忌を受る緯もあるべし必一遍來給ひ
 て又餘義もなく道けれと小六の一切肯の老嚮に和女郎を救ひし酬を受ん與にあらす
 只妖物に人の命を殺れん事を看に忍びど一臂の力を盡しのみ憊て和女郎の婦女の身にて
 夜の山路に得堪ざれば一坂まで送り去て立選んと慮ひし也恩を係べき事にあらざり愛も
 なくいひ切て袂を拂ひて去んとするを婦人の猶も推扯めさまでに宜ふ事ならバ又爲方も侍
 らねど君の本國御姓名を憚ながら名告せ給へ主公に報て二言の恩謝を他日稟まほしといふ
 に小六の冷笑ひ我の東の浪人にて諸國を經歷りて文武の執行を主とする一處不住の者なれ
 ば今の家も亦く國もなし謝禮を受ん事ある一切思ひも係けされバ名告んも亦益なき緯
 り只管放ち還せべしといへども更に會得の云云に争ひて言果べくもあらざる内に追捕の
 人の近着て火光を見て走り來れば小六も今の爲方なくさらば這衆人に婦人と混與して辞し
 去んとてこや喃々と呼立れば莊官が近隣の者等なるべし山嶽打切の莊客等一隊約莫十名許
 手に松明を把るあり竹槍を提斧を擔げ鉄炮を持たるもあり各腰に一口の山刀を横たへて麻

草の編たる山崎頭巾を被たるも那這所看たるが迭に甚麼とか叫語て左右なくの密も來ぬを
 小六の找みて婦人を指示む汝等の這婦人を索ぬる人より非ずやといへども回答の措きて後
 邊の婦人を認めつゝ小六の這首に在り原來の這奴が偷み出して娼妓に售んとせしなる
 べし逃しなせぞと動響つゝ快薙々と捕稠みて打も蒐らた光景なれと腕氣看はぬ武士の腰の
 刀に躊躇ひて只黙々と罵るのみ有繫に找み難たるを小六の看听て礮と疾視へ推參なる莊客
 們無禮を做ば後悔あらん先靜りていふ情由を听け俺の路行逆旅人なるが是なる婦人が狒々
 といふ獸に扣櫻れて既よ命を隕さんとせしを俺その獸を逐走らせて這首まで送り來れる也
 といへば小六も聲を係け人々疎忽の事なせと這人位に宣ふ如く奴家が命の親あるを急憚て
 失差し給ふなどいへども蠢愚の莊客等争でか信容べき原來小六も心を合せて這奴と偪に
 走んどせしに途に迷ひて這頭も伶仃ひ我等に搜し出されて爲術あく出て來れるからん童兒
 が昔々話にこそ狒々の妖怪の緯も听け今更にさる虚言を听べき耳の持すかし四も五もいら
 せ开奴を縛りて小六を畧の返させやと一個がいへば其偪に多勢を恃む醜猛者能愈尤といふ
 より疾く左右等しく棒振上げて撃んと競ふを小六の驟が差違ひして打落せば透さず突出と

竹鎗を身を反じて手下より跟入り開奴が項髪引搦めて根條の上より投着るを猶憚るまに斧山刀
 手にく兵器を打振つ、齊一撃んと立薙れど小六の刀は手も掛るものしくしやといふ儘に
 掻潜りての打落し引被ぎての投退け或の賜介し揉居れば一個も残らざ打仆されて敵しがた
 くや思ひけんその鉄炮の甚廖の與ど快疾搏て救すやといひれて猛可に心着く件の男の鉄炮
 の火薬を切て押向るを小六の看るより鷲鳥の像く走薙りて一個を捉へ小楯を拿れば狼唄て
 躊躇ふ所を得たりやねうと捉へし男を曳被ぎて力に任せて投棄ければ鉄炮狙たる筒口に礮
 と礮りて二個齊一轉ぶ激勢に火蓋の落て投着られたる漢子が肩を挫と打抜き旁に立たる一
 個が小鬘をかそりて丸の遙に飛散たれば生死の知を這那侶に一聲叫びて仆れたりこれにぞ
 駭く莊客等勢折け肝を消してやよお侍助け給へ鹿忍の我等が誤失也免させ給へと異口同音
 に哀み乞て止ざれば小六の怒れる聲振絞りて玉石を分ぬ愚人に向ひて問答せん無益也盛
 にすべし奴等なれを已に煉忍の罪を知らば姑且命を預け措くべし叮嚀に陪語稟して這婦人を
 その主人に慥に送り届くべし聊にても疎畧よせば我其時の決して免さじ心得たる歎と答あ
 めつ、怖畏を傲り戦き居たる小楯をやら眷顧て、然和女が留めし故に雲時なりとも這奴



等に疑れし遺憾也されば俺の這首より去て和女郎を送り行べからずといふに小鷗も爲衛
 なく僅も开意に任せつゝ猶も盡せぬ恩謝を演るに果ぞなかりける當下小六の銃炮に中りて
 仆れし三個の漢子を曳起させて熟視るに一個の最も淺疾なれば已に快俺と起つゝ手巾にて
 鉢巻してをり今一個の肩さきを搏拔れたりければ悶絶したるを引立て痰を捲せ藥を與へ開
 名を呼せたりければ僕伴にして甦り死に至るべく所見ざりければ莊客等に向ひていふや
 う已等慈も猜忌を生して俺を撃んとしたるを以て止む事を得ず殺懲しゝに飛道具をさへ携
 有ければ自業自得の疾を負たりされば這奴が死たりとも嗚論のそまじきを僕伴にして死ざ
 れば論ふべき辭のなかるべし後に至りて些少も世人も疑れて俺武士道の段とされば久後
 仔細あるまじきとの證書を記て得させよさらせの決して免し難しと理を詰ていひければ莊
 客等の面を看合せ一齊畏りて答るやう仰の趣理に承り候へば違背とべく候のねを俺々の
 農業と山獵をのみ辭とする水飲莊客で候へば甚麼なる事を記くものやらん知たる的も候の
 ぬに浪速津をだに果處々々しく效ひし者この道中より一個も居す候へば道義ばかり免させ
 給へと語詞齊一いふ處處に餘義なく見へければ小六の雲時沉吟して甚麼せましと思ふ所に

思繫かき樹陰よりその照文の在下が調へて參らせんと聲を係つゝ立出る者あり大家駭きて
 これを看れば是就ち別人ならぬ榊原の莊官與六作也登時與六作の恭しく小六に對ひて一揖
 をなし在下の其婦女が主ある榊原の莊官に破垣與六作と喚るゝ者にて候この黄昏に開女が
 出て回走といふによりて近隣の者を集め部を分て四方の途へ索にとて差したれど猶も心の
 安堵難くて在下も亦一兩個の農夫等を跟隨て那首這首となく索るに一坂のあたりにて婦人
 の怪しき人に拽れて這山にしも入たるを看たりなといふ者あれは覺束なく思へども還り
 もやらす這山路に攀登るに續松漸々尽果て代を覚めん由なかりし折衝に出し、這的等が火
 の光輝を認得しからに迹を慕ひて來て看れば思ひも依ぬ這場の騷動婦人の既に恙もあくて
 救へれ奉りし恩人の猜忌を蒙り給ひ酷く无禮に及びしを武藝に長させ給ひしかば幸にして
 過失なく免され難き里人等が罪科を恩赦ありし事の一五十一の那樹陰にて快承り候へども
 出後れてのしかすがに。出ん期あくて躊躇ひつゝ徒にイみしを。今此照書を記べき的のなにと
 いふまで罷出たり現も此頭に在る者ども。一文不通の徒なれば照書の下代筆して爪押を
 取て奉らんに。と云ながら懷紙を拿出て腰の矢立の筆抽出し走筆に書竟り莊客等を眷

願て酷くその无禮を著め一個づゝ呼出て。矢立の墨に指を染させ爪押を捻させていざとばかりに小六に遞與し恚仕て候へば。異日に聊申すべき事あり在下就ち証人にて候。といふ間に小六の熟道老人が打扮を看るに。年の六十に餘るべし。人品有繫に卑しからず立着といふ袴を着て縮織の單衣の上に褐色に紋附たる羽織を着たるが腰は短き兩刀と柄下りに帯たりける。小六のこれを听つゝも。肛裏に思ふやう原來這老翁の年紀にも似氣なく色に耽りて這婦人を愛する餘に恚甚々しく追手を出して猶飽足ねば自己まで這山路に來しならんぞ微笑るゝを色よの見せず原來和丈の是も女中小鴉女郎が御主人よな緯の次第を听れしうへ。今更めて報るに及ばず危急を見るよ忍ずして一臂の力を盡したるよ這衆客が縁故を克も思ひで在下を猜ひ刺理不盡に狼籍に及びし故見らるゝ如く投懲したれば薄蕩を負たるものもあれど。僥倖にして死に至らば這事後日に疑論もあらぬば足下に屹と預くる也療養を加へ勸りて宿所に送り差とべし。且又所証の一札の鑑に受拿せたり和丈が証に立るゝ止り稟すべき所なしさらば暇を稟す也と立去んとするを見て與六作慌忙て立罷り且等給へその性急也抑備へ何國の殿の御家臣にておのすれば唯一個這山路を夜を犯しての越給ふらん看參らするに

ねん年紀も猶幼弱き程なるに武藝勇敢古今に秀で人力に及ば妖物物を輒く制へ給ふ事驚嘆に餘あり希いとは名乗給へかし。この婦人の小可が側室にて候あるがその妖物に殺れなばいかばかり不便に候んを御庇に憑て甦生りしその怡悦の稟とも更にて最有難く辱しさを清儘に争でかり別れ參らせ候ん這處より宿所へ遠くもあらねば是非よん伴稟べし。いざさせ給へと苦々よ乞ふと小六の听敢せその歡ばしき事なれども去向も急ぐ所要もあれ復こそ見參に入るべけれ在下の東國の浪人にて諸國を遊歴し文武の修行をせる者なれば名告たりとも何かせん放ちて去せらるべしといへとも與六作一切許さず尙さまに詞を馳して最速天明に問もなければ空腹にこそねのすべけれ切ての田舎鹽梅の雜炊をだに參らせんとて放つべくもあらざれば小六も剛才の推辞かねてやうくその意を任せければ與六作主従大に歡喜び農夫等に吩咐て疲負と扶けて踵より走ませ自ら小六が前に立て籠の方へ回り去に短夜間なく明去て十坂に至る頃に彼誰候に成にけり。开處より榊原まで僅の行程ありければ就て宿所に還り着ぬ這箇の事案のしければ畧さて這處に記さぬを看官宜く猜すべし。

第五十回

思を受けて忽ち思を忘る
禍を救て却て禍を得たり

話表莊官與六作の急ぐ中門を開かせて小六を書院の庭より迎へ恭しく上座に乞進めて且快茶菓を管待す中に小六も前夜の疲勞を厭はず白酒の指揮なぞして間なく朝飯と羞むるよ小六の履楯讓して徐く箸を把たるにさる山家の事あれハ鮮魚とてもあらざれど主人の富りとおぼしくて膳棧調度も看苦しからせ羹は干魚を用ぬ菜蔬にも意を配りて早熟の茄子の小さも誠を表す心のはしり理無く盛てしひ茸や乾たる海老ハ伊勢の海に腰の屈みし老叟も色に深く染たる蕪蓏の梅蘇酒茶漬に迄も意を稠て迭代に奔走するハ珠にも代じの想像婦が命の恩を報ゆるなるべし小六の快からぬや他の好意を辭ハも敢て辛くして吃竟れば東道の貌を改めて僻地の便なき口誼を演べ麻糍をも分付たれど猶今雲時洲難たれハ率旦那の首離會で徐に疲勞を憩いせ給へ前夜の終宵眠り給いよさこそハ草臥給ひけり小可等も姑且ハ身の暇を賜りて休息するにぞ候んぬいのでくど苦愁にいふをも有禁に辭み難て那離會に入て見れば清静なる釜を鋪て挽水の枕さへ有ければ旅の調度を开處に取納れ就て眠に就たれど

も心類に焦燥て歸去んと思ふを以て熟睡せらるにも至らねば雲時ありて起出るに巳刻の既過たるなるべし噉する氣色を聴て與六作ハ疾く出來りつこの最早も寤給へりな水風爐も恰好候なればいざ浴させ給へかしとて婢女を呼て浴衣を携せ浴室に案内させければ小六のこれを推辭せしてその御馳走は預りたり怒らば允され候べしとて浴室に去て湯を浴竟り就て出來るその間に與六作ハ衣服を更め袴と着て書院に出入り小六を請じて夜來の事を猶云云に歡び謝し早環盤を措排へ小とみに酌を把せつゝ連りに羞めて止ざりしかば小六ハ酒を嗜めども自ら戒めて多く用ぬ風辭するに下戸を以てして宵寡に舉動たれども與六作ハ所容を前夜央ひつる里人の甲乙をも喚來らして无禮の罪を猶も陪させ迭代に獻醬して只願強て勸めければ料らす數盃を傾けて不覺に時刻をぞ移しける與六作ハ興を添とて小とみを強て促して筑紫琴と彈するに辭を難つゝ琴拿出て想ひあり磯の伊勢の海深き緑しを折反し謠ふも鄙に珍らかにて谷の戸出る黄鳥の初音より異に听ゆるあるべし東道より先聲立てやいと譽るに興醒ければ小六ハ心中に爪弾して辛くして酒杯を辭し夕饌を果せる時候に夕陽既傾きて哺時下りに倣にけり恁ても這首をば立出んと心焦燥のしてければ履暇を報れ

とも與六作一切肯いせ。又さまぐに扯られて心あらずも今宵ばかりの這里に宿るに決めた
 り。抑這小とみと云婦人を怎麼なる者ぞと索るに前編第三集に現したる遠江國曾根川の獄舎
 長塚見木免八が女兒よて同郷の某甲と婚姻の約を倣ける頃木免六の不意も木綿張荷二郎が
 謀に的りて不覺の死を遂しかば領主曾根川權守高春事情を弄鑿せられしに木免六日屬囚獄
 人を酷罰して賄賂を貪り法を私にしける事ども餘盡なく露顯れしかば高春の憤深くして家
 財を沒收せられしうへその干共を追放とべしと嚴く令せ付けられ小とみは嫁を可約われど
 も快く訴出ざるまよりて竟に通る事能のぞ領分境を退出されぬ兄某甲の日屬より放逸無
 懲の者なりしかば恠る折にも些も怯ます妹が姿色あるを以て疾く妓女を售たりしかば伊勢
 の白子に渡されて开處にて一年有餘を過しぬ然るに這與六作の去々歳妻を失ひけるに年老
 に似げもなく好色の心遣方あくして寢覺徒然なりければ大神宮へ詣し還路白子の青樓に
 旅宿して件の小とみに相馴けるに最も心に慍しかば若干の金を投じ他が身を購ひて宿所の
 花とせしなりけりされども小とみは心操極て多淫なるうへに廓の習俗の虚言を實言と思
 ひ錯りて年古びたる山里人に購ひ出されたりしか心生平に不満の意を抱きて風不義の締む

れども與六作の只管に他が色香に感ひければ些少もこれを惜らせ唯いふ任に隨ひて更に餘
 念ぞなかりける素より這與六作に男女二個の子ありけるに弟の不幸にして身亡ける頃他
 に嫁したる姉女の夫に厭れて歸來り程もなく死失たれども忘像見の外孫ありしを幸に家督
 と定め與六九郎と名告せける今茲に既に十七に倣ぬ容貌もさばかり醜からぬを小とみの
 やをら哄誘して他目を竊て會はせに竟に膠漆の中となりしに阿漕が浦の網ならぎくに度累
 なれば伊勢人の非談交りに壁訴訟して主も悟すも有ければ與六作もや、所知てさの非じと
 の思ふものから通路に關を置て些も由斷せざりしかと二個の鬼胞を抱きつ、暗々に言合せ
 て他郷へ亡命せん事を約し已に出んとしたりし夜斐恚にしてか知たりけん那老彌猴の妖
 怪が與六九郎に身を變じて術もなく盗出ししければ小とみは小六に醒さるゝ迄の只管與六
 九郎も侶ひて家を奔ると思ひしにぞ有ける恠て家に回りしものから身の妖怪に犯されて
 面目を失ひたるに俺を救ひし小六と看れば玉を欺く少年にて那與六九郎に比れば雲泥萬里
 の風流男なれば恠火忽ち動き出て希で這人に譚らひ寄て想ふ意を所聞つ、侶に他郷に奔り
 ならば這頭に在て古老爺の机嫌を執て兪人に猜れんより遙く勝りて寔に一事兩用也と己が任

意の心算計を快くも定めたりければ、與六作を哄騙して小六を拘留せん事を意を盡して策りけり。間話休題小六の初更の時候より又那離舎に入て別に做べき事もなければ、快く枕に就たりけるに、晝間よりの酔甚く登しておもひを雲時ハ寝入りたりけん。夜半過る頃枕方ハ人の形氣するよ蒸きて不圖眼を開て看ておれハ薄暗き孤燈の下に、女人一個ぞ立有ける。そも甚麼的ぞと熟視れば、亦是侍妾小とみなれば、訝き事限なれど、怎にぞと歎と騒がてら猶熟睡せる面色して、覗ひをるとも他の知すや和ら我を推開きて入んどしつゝ、有繋に得入せ聲を情めて耳根に寄りや、願おん眼ハ寤給のせや、一大事侍るを告奉らん與來りたり。といふに小六ハうち驚き起直りて容貌を端し、その甚麼事のあるやらん快々目今報らるべしとありながら男子の獨寝たる處へ夜を肩して和女郎が自ら來りてハ、前夜駐客等に猜忌れたる虚名を雪ぎ難かるべし、急要ならざる明日詰且明々地に听べきや唯疾回り去るべしと言雄しく窘れば、怨めし氣に秋波せつゝ、その又甚に好意なし前夜命を助け給ひし恩ある君と想ふより、疎略ならじと崇めつゝ、看れば想へハ、儂の容貌這世に比類あら携の衣のつまの紫ねじの理知ぬにも、おらされと唯躬に染て苟且も忘れ交野の夕紅葉赫し、さも怎麼あらど、怎にもして留めなハ、這一條の魂

緒に繋し想を听に參らせさて、左も右も、おら坂や兒掌柏の外、面裏繋さ他眼を辛く計りて、婦女子の大胆にも、這首まで參り侍りしを、選れとのたまふ曲なとよ、御恩に報へ參らすべし。一大事の侍れど、卒爾にハ、争か裏さんや、唯雲時ハ、傍側に臥せて想ひを散らせ給へといひつゝ、被袵引揚て、鑽入んとしたりけり。聲色に深れぬ大丈夫争か、これに靡くべし。小六ハ怒に堪て、して不慮も聲を苛らけ、這街妻奴がほざきたり抑我を誰と思て、さる飽言を吐散す。昨夜踏べき山往にて、備が獸類に犯さるゝを看るに、忍びぞ救ひたれど、夜の山中に、嫌忌を避て、屢去んといひつるを、儂が興に抑留せられて、年紀にも愧ぬ、聲色人の家に一夜を明し事ハ、千歳を経ること所、思る處に、怎ぞや恩を警もて、報い天地に、慚ぬ我潔白を、付して不義ハ、陥んとや、人面獸心とハ、儂等とこそいへ、恠ても懲すやと、拳を向上げ粗に任せて、頬ニツ三ツ照若て、小脇把て、曳立てつゝ、雨戸の外へ、突出し、快くも引闔鎖したれば、吐嗟とばかり、竊ひ音に、泣入る聲の、隠々に所听て、怎處へか去まけん、其後の音もせずなりぬ。小六ハ、さても怒氣収ら、益あさ、奴に繋累ひて、瓜田に靴を結ばんとし、さいでや、剛才より、出去べしとて、行囊を曳寄て、刀を提て、立上りしが、又熟考れば、道家主與六作とやらん、色に耽るハ、無慚なれども、我に對して、冤恨もなし、さるを、婦女の故

を以て報せして去る時の訝りて跟をや逐ん。それも倒面倒ちりまた那婦女も那儘に猜れなば。後竟に汚名を被る端ともあらん歎如じ天の明るを等てさりげなく立出んよへと徐くに想回し。自己と怒を宥めつゝ奮の如くに枕に就て寝んとすれど心治らで既往將來の絆なぞ案ひ續けて徐に算へ果さぬ五更の鬪も耳と傾けたる當下忽ち外面より人聲有て常に非る數名の足音這方を投て密るに似たり原來盜賊の入來るか但又別に縁故あるか由問とべきに非ぞと思へば刀を把て腰に帯び行裏を引着て脚場を鞠る火速の身構燈火ふつと吹消て音をも倣で規ひをるに焦松提燈晃々と雨戸の透間に影所見て追緝稠る多勢の緝捕使の頭人めきたる馬上の一個鞍頭に衝立起りて癖者の這處に在とぞいふ快稠入れといふまゝに承りぬといふより疾く兩戸四五枚打碎きて着れども内に火をだに燃せし隙于一枚縋り明て辭りかへりて音もせねば逃亡たるとか訝りながら焦松を振照し找上りて見てわれハ威風凜凜然き一個の壯士を振立て儕們的是甚麼なる者ぞ人の睡眠を驚して怎絆をせんとかざる仔細あらば徐にいへ案に盜賊なるべしといへせも果す馬上の士人物ないいせと快拿へせやと烈しき下知に夥兵

等思ひ回して多兵を憑み御説ごふと呼りり。手ごと十手を閃めかして競ひ蒐りて撃んとするを引外して揉仆せ。透さず打稠む十手の電光腕首丁と蹴揚る際に敢なく落して躊躇たり。これも懲す左右より袒んと蒐るを組せも敢て右に挂へ左に拂ひて手練を盡と柔術の精妙精神まそく加りて怯むを那這項髮掴み齊一撞と投飛す再方に避易して株より下へ激と退くをいふ甲斐なしと馬上の頭人身を揉て下知するにぞ再も齊一群がり蒐りて矢場を掴み着んとするを物々しやといふ任に前より找みし一個を拿へて狗の加く提げ横たへ競て稠入る七八個に門の如く押着て一聲吼りて押出せば愈共侶兵兵さて椽頬より押落され將某倒をする像く打累りて蠢動さたり。小六ハ勝負を好まぬば嚇して絆を鎖めんと思ひ腰の刀を晃りと引抽き小腋に側めて呵々と笑ひ推參ある該死的奴才ども凡百個にて向ふとも搦捕る。我にのわらず所望ならば太刀撃して現世の暇をとらせてん。そも奴才等が頬骨と這黃銅の淨手盤と何れ堅硬きと惟ふぞや。自ら力を眷て過失すなと飽までに罵り散して軒端に吊せし龍頭より水を吹べく造れる般大なる淨手盤を刀を揮ひて潑失と听る拳の牙を欠ず滯らす。然しも大じき黃銅二重を瓜を二個に破たる像く見絆に斬て落したれば那方這方へ捲と轉びて

水ハ蠅とぞ飛散たる事ノ氣色と本事ハ怖畏吐噎とばかり駭き呆れて誰か一名も近着くべ
 き兪々人を盾にしつ裏崩して中門の外まで逃るも多うりけり小六ハさこそと冷笑ハ刀をバ
 鞘ハ収めて那頭人を着招き抑和殿ハ誰人なれば在下が宿りたる中門の内に馬を乗入れ刺理
 不盡に搦緝んとせらるゝやらん大人氣なき夜稍の景迹盜賊等と案ハの外看れば故ある武
 士ハ肖たり除非在下罪あるにもせよ一言の仔細をも演老雜人們に搦させんと指揮せらるゝ
 ハ怎麼なる故ぞ武士の作法を恐れぬ故歟況や犯せる罪條なければ索に掛らんやうもあし然
 とも只得拿へんとならん雜人們ハいふ甲斐なし且快和殿と勝負と決せんいかにくと詰問
 ふ理の當然にや急促りけん那頭人ハ愧らひて慌忙しく馬より飛下り進み向ひて一揖しいは
 るゝ趣尤なり在下ハ掛橋和多六とて垣内殿の家臣なるが今日しも道家の主與六作代人を以
 て訴る旨あるにより和殿を促へて緯の子細を糺明せん與垣内殿の命を以て長臣より在下に
 傳へしかば在下其職なるを以て即ち夥兵を引率て恚ハ推參したる也勿論罪條の委曲をば在
 下ハ熟も知ねど畢竟騙局盜賊の類と所做たる故を以て敢て一言の間答に及ばず形の像くに
 押寄て搦拿んとしたりし也然るに和殿の武藝勇敢決めて草賊の類あらぬにいはるゝ所も理

あるに似たり先來歴を告られよ品差によりてハ緝捕の沙汰を宥めて料理ふ旨あるべしと聞
 て小六ハ不審散す那與六作奴が怎の與ハ我を盜賊と訴へけん方儘小富が光景といひ意得回
 き事のみなれど今更問んやうも無れば怒を押へて答るやう在下ハ東國の浪人にて昨夜伊賀
 國へ險んとしたる山中の徑に迷ひて料らすも道家の東人が侍妾の必死の難を救ひ得させて
 宿所に送んとしたる途にて與六作に撞見ければ婦人を連與して去んとせしを強て留めて管
 待すゆゑに所爲なくて今宵ハ夜這りに宿せるばかり也怎の罪料かあるべからん唯訝しきハ
 與六作がさばかり存下を警として踪迹なき事を作りて訴出しハ案外にて回すゝも奇怪な
 り快く與六作を呼出されよ歐きて仔細を鞠問せんと冤氣を含める勇士の辨論詐偽としも所
 えねハ和多六も訝りながら所が如きハ和殿の災難寔に氣毒千萬池然れども在下ハ訴訟を听
 べき職分ならねハ私にハ料らひ難し左まれ右まれ垣内の城まで來りて陳謝せられよ即ち亭
 主與六作も那里へ召率去べき也世の評にも所及られけん我主君俊泰卿ハ明斷光敏捷にて當
 世の賢者といはるゝなればさうも冤實の悔みハあらじ但し囚人の法なれば兩刀をば遞與
 されよ索ハ和殿の武勇に免じて決して掛る事あらじ是在下ハ寸志也と好意ありげにいひけ

れ。小六の呵々ど打笑ひ。潔白なる在下を囚人といへるゝの意符がたし。除非召れて垣内殿へ参る事のあらんにも。武士たる者が兩刀を他に遞興して阿面々々と手を束ねてや参るべきこと。其殿の御家臣なを罪被らば。さも有べき歎俺の他國の浪人なれば。垣内殿を甚麽ぞか思はん。和殿の一國の内へのみ居て内外の差別も知れぬなるべし。さる面倒なる事ならば。参らせども何とかせん。と最荒らか。言懲せば。和多六險不迷惑して。失言の罪を只管謝し。只左も右も在下と共に一遍垣内へ至りて。陳謝せられんやうを頼み稟すと。啣言がましくいふに。小六の徐く會得ひ。明日の伊賀路へ踏んとすれば。垣内へ去の好ましからぬ。盜賊騙局と猜れて。この道儘にも棄置がたし。さらば直ちに参らんと。行裏を搔把て。様より下て草鞋を着れば。和多六の指揮して。兵們與六作も。照驗の條あり。家内の男女を。殘らせ捉へて。後に限て参るべし。快くせよといひ。繫て小六に屹と一揖して。馬に閃りと乗移れば。夥兵の唯々と。言稟しつゝ。過半小六を圍繞み。護りながらに引連て。垣内を投て。回りけり。

明治十九年二月十五日翻刻御届

同 十九年四月 出版

原著者

曲亭馬琴

神奈川縣平民

出版人

市川路周

東京日本橋區橫山町
二丁目十四番地

發兌

文事堂

東京日本橋區橫山町
二丁目十四番地

大賣捌書肆

辻岡文助

橫山町三丁目

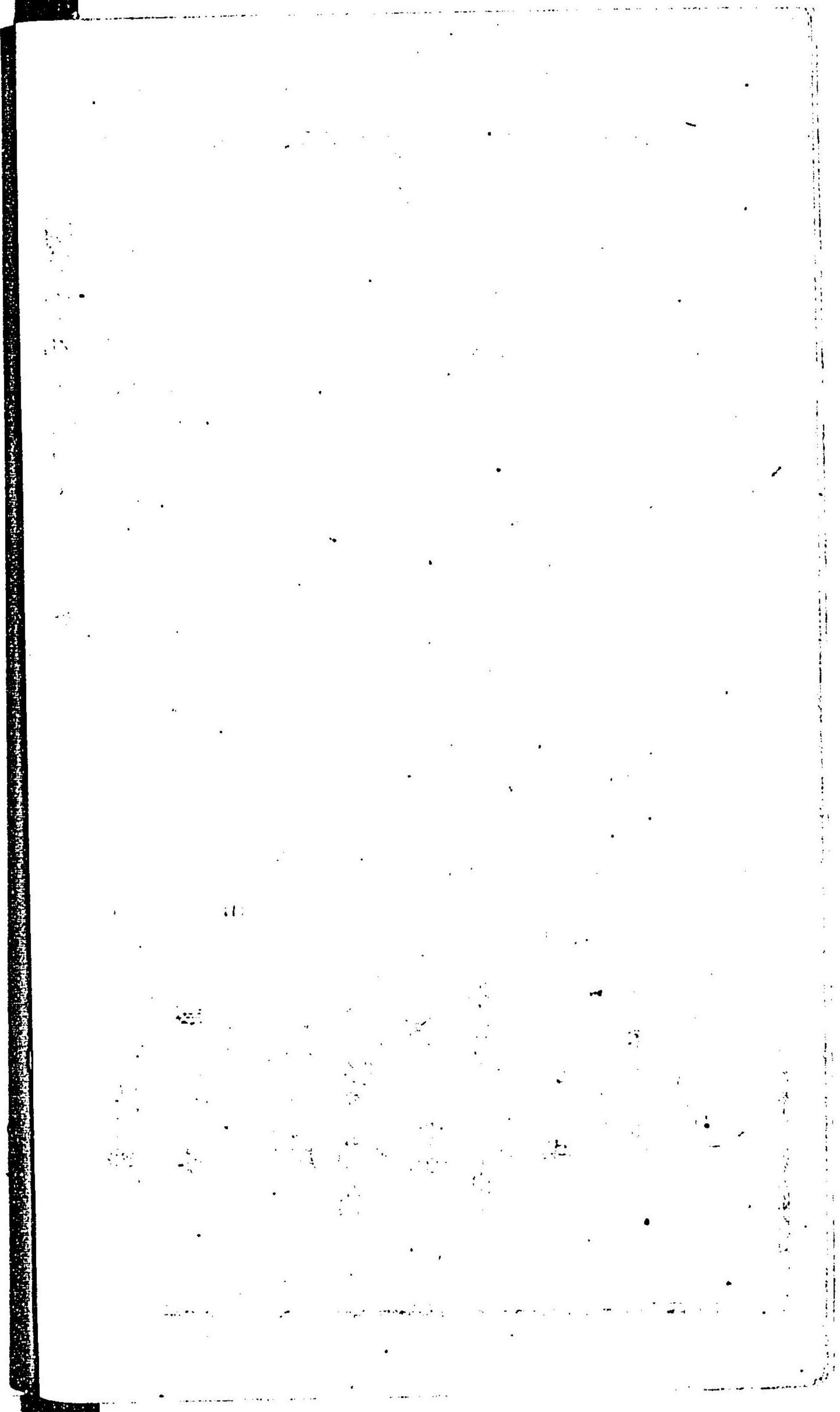
同

鶴聲社

橫山町二丁目

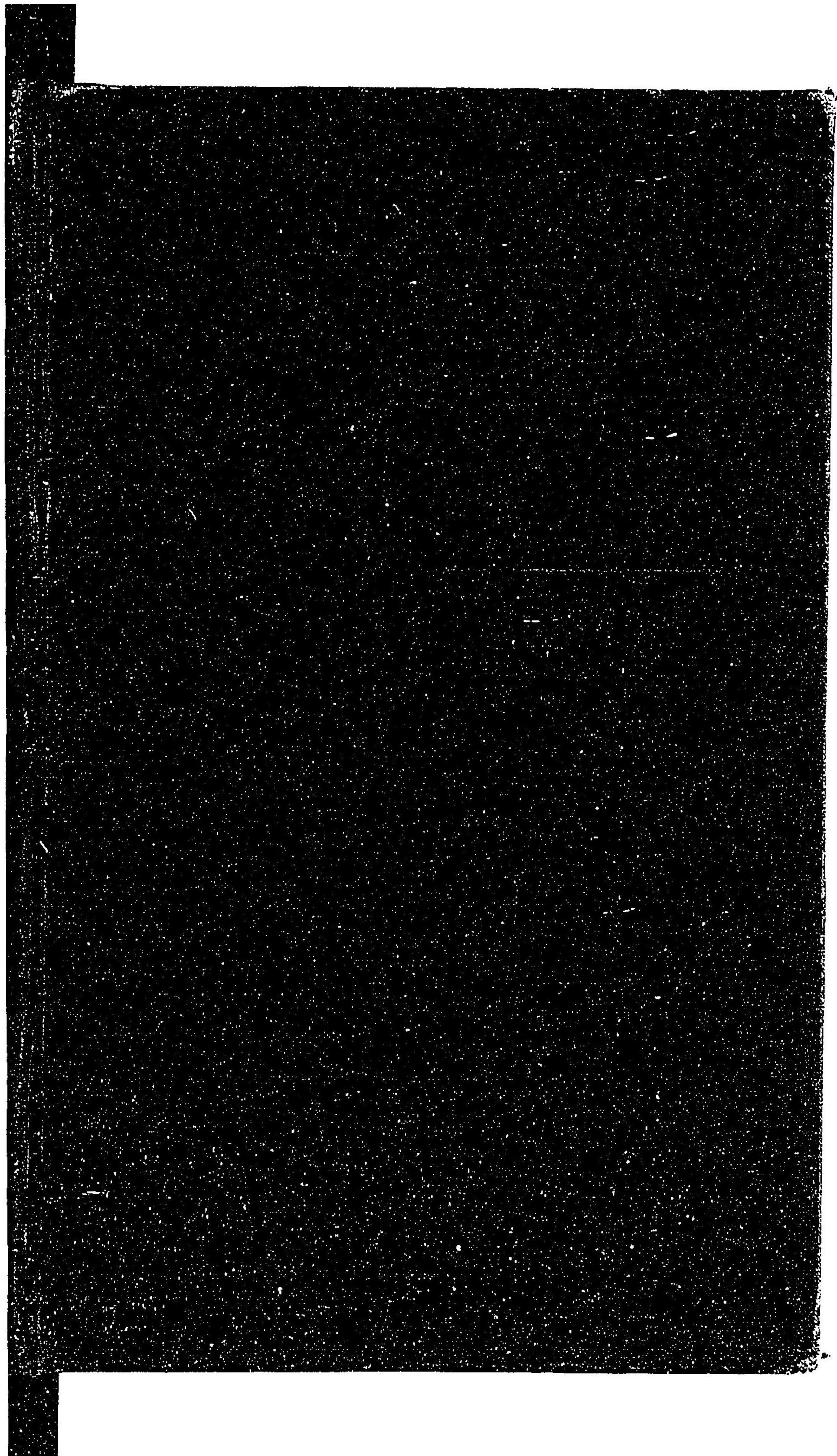
賣捌 全國各地書林

定價金三圓五十錢



128

355



089298-000-4

特12-534

侠客伝 (開卷奇驚)

滝沢 馬琴/著

M19

DBM-0660



